

畔田遺跡
追坊師A遺跡
黒岩遺跡
追坊師B遺跡
城山遺跡

津山圏域クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2015

津山市教育委員会

畔田遺跡
追坊師A遺跡
黒岩遺跡
追坊師B遺跡
城山遺跡

津山圏域クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2015

津山市教育委員会

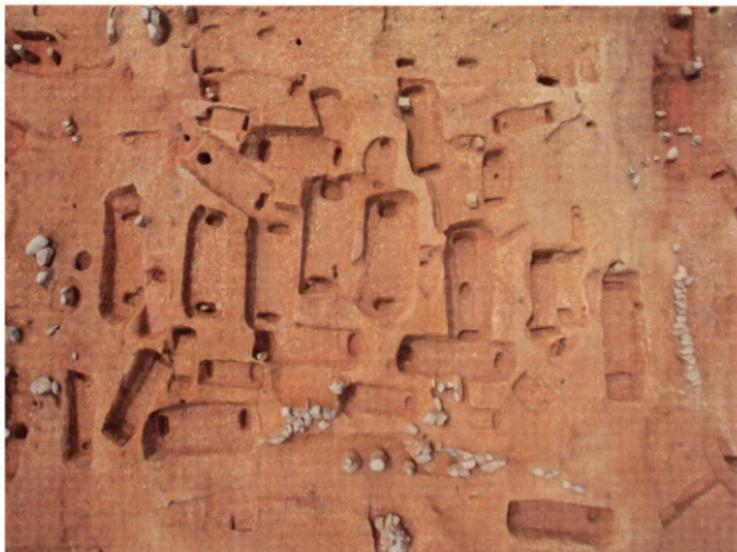
黒岩遺跡 卷頭図版 1



1 黒岩遺跡遠景（西から）



2 中心部土壤墓群（右上が北）



1 方形台状墓 1 (右上が北)



2 方形台状墓 2~4 (右上が北)



1 箱式石棺 1 (古墳時代) 検出状況 (西から)



2 土器棺墓 1 (古墳時代) 検出状況 (北西から)



1 土壌 1人骨出土状況



2 土壌 5人骨出土状況

序

津山市は岡山県の北部に位置し、人口約10万人の歴史・文化の薫る城下町であります。現在の市街地は、慶長8（1603）年に美作18万6500石を領して人封した森忠政によって整備された城下町を基盤としております。

津山の歴史を紐解きますと、戦後間もなく調査され、遺跡公園として整備された沼弥生住居址群、美作最大の前方後円墳である美和山1号墳など多くの遺跡が存在しております。さらに和銅6（713）年に美作国ができますと国府が置かれ、その後も江戸時代の終わりまで国の中心として機能しておりました。

このため、市内には多くの文化財・歴史遺産が見られます。特に出雲往来沿いにある城下町については、戦災にあっていないこともあり、古い町並みが良く残っております。平成25年には城東地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今後の保存活用が期待されるところであります。

さて、今回の発掘調査でございますが、永年の懸案でありましたごみ処理施設であるクリーンセンター建設に伴うものであります。建設予定地内では、複数の遺跡が確認され、弥生時代の集落や墳墓などが調査されました。特に弥生時代の貯蔵穴から人骨が出土した事例は、前例がほとんど無い発見がありました。

本書は、これらの調査成果をまとめたものであります。小冊子ではありますが、今後の美作地域の歴史研究の一助になれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、お世話になりました津山圏域資源循環施設組合ならびに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成27年3月19日

津山市教育委員会

教育長 田 村 芳 倫

例　言

- 1 本書は、津山圏域クリーンセンター建設事業に伴い、津山市教育委員会が津山圏域資源循環施設組合の依頼を受け、発掘調査を実施した、畔田遺跡・追坊師A遺跡・黒岩遺跡・追坊師B遺跡・城山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 畔田遺跡は津山市領家 1411-1 ほか、追坊師A遺跡は津山市領家 1378-1、黒岩遺跡は津山市領家 712、追坊師B遺跡は津山市領家 1378-1、城山遺跡は津山市領家 1446 に所在する。
- 3 試掘、確認調査は、平成 22 年 3 月 8 日から平成 24 年 7 月 2 日まで、仁木康治・平岡正宏・豊島雪絵・平井泰明が担当して行った。
本調査は、平成 23 年 9 月 26 日から平成 24 年 11 月 15 日まで、仁木・豊島・平井・伸井寛明が担当して実施した。調査面積は 10,550 m² である。
- 4 本書の執筆は、小郷利幸・仁木・豊島・平井・宮崎絢子が担当して実施した。文責はそれぞれ文末に記している。全体の編集は平井が行った。
- 5 人骨鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託を行った。
第 9 章第 3 節及び図版 56 は、同社が執筆及び作成した。
- 6 本書に関連する出土遺物及び図面・写真は、津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼 600-1）に保管している。

凡　例

- 1 本報告書に用いた高度値は標高である。
- 2 方位は平面直角座標第V系の座標北である。
- 3 本報告書に掲載した遺構及び遺物の縮尺は次のとおりとしているが、例外もあるため図ごとに縮尺率を明記している。
遺構 : 1/40 遺物 : 1/4
- 4 掲載遺物番号については、遺跡ごとに土器、金属製品など分けて通し番号を付け、上器以外については次の略号を番号の前に付している。
金属製品 : M
- 5 本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要な場合には世紀などを併用した。
- 6 番山遺跡については、遺構の場所を示すために、10mごとにX軸では北から順番に1～8を、Y軸では西から東にA～Gを付した。(第5章 番山遺跡 第2図及び第3図を参照)
名称は、北西隅を基準に例えば、4B区のように呼んでいる。
- 7 まとめは各章ごと（遺跡ごと）に記載した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
1 クリーンセンター建設に至る経緯	1
2 試掘・確認調査の経緯と経過	1
第2節 調査の経過と体制	6
1 調査の経過	6
2 報告書作成の経過	6
3 調査日誌抄	7
4 調査及び整理の体制	8
第2章 遺跡及びその周辺の地形と歴史的環境	11
第3章 本事業以前に行なった調査	15
第4章 試掘・確認調査	19
第1節 平成21年度（A～E地区）	19
第2節 平成23・24年度（F・G地区）	21
第5章 畔田遺跡	27
第1節 遺跡の概要	27
第2節 検出された遺構と遺物	29
第3節 まとめ	41
第6章 追坊師A遺跡	44
第1節 遺跡の概要	44
第2節 検出された遺構と遺物	45
第3節 まとめ	46
第7章 黒岩遺跡	48
第1節 遺跡の概要	48
第2節 弥生時代の遺構と遺物	53
第3節 古墳時代の遺構と遺物	98
第4節 まとめ	105
第8章 追坊師B遺跡	116
第1節 遺跡の概要	116

第 2 節 検出された遺構と遺物	117
第 3 節 まとめ	119
第 9 章 城山遺跡	121
第 1 節 遺跡の概要	121
第 2 節 検出された遺構と遺物	122
第 3 節 城山遺跡出土骨の同定	127
第 4 節 まとめ	131

図版

報告書抄録

図目次

(第 1 章)	
第 1 図 遺跡位置図	2
第 2 図 新クリーンセンター～施設配置図	4
第 3 図 新クリーンセンター建設予定地内	5
遺跡分布図	
(第 2 章)	
第 1 図 周辺遺跡分布図	13
(第 3 章)	
第 1 図 トレンチ位置図	16
第 2 図 反尾池京南遺跡確認調査出土遺物	17
(第 4 章)	
第 1 図 F 地区トレンチ詳細図	21
第 2 図 G 地区トレンチ詳細図	22
第 3 図 武振・佛誕周地区及び	25
トレンチ配置図	
(畔田遺跡)	
第 1 図 畔田遺跡全体図	27
第 2 図 畔田遺跡遺構配置図（北部分）	28
第 3 図 畔田遺跡遺構配置図（南部分）	28
第 4 図 土壙 1	29
第 5 図 土壙 1 出土遺物	29
第 6 図 土壙 1 山上遺物	30
第 7 図 上壙 2・出土遺物	31
第 8 図 土壙 3	31
第 9 図 上壙 4	31
第 10 図 土壙 5・出土遺物	32
第 11 図 土壙 6	32
第 12 図 土壙 7	32
第 13 図 土壙 7 山上遺物	33
第 14 図 上壙 8・出土遺物	33
第 15 図 土壙 9	34
第 16 図 土壙 10	34
第 17 図 土壙 11	35
第 18 図 上壙 12	35
第 19 国 土壙 13	35
第 20 国 土壙 14	35
第 21 国 土壙 15	36
第 22 国 土壙 16	36
第 23 国 上壙 17	36
第 24 国 土壙 18	36
第 25 国 土壙 19	37
第 26 国 柱穴 6 山上遺物	37
第 27 国 墓 1・出土遺物	38
第 28 国 住居 1	39
第 29 国 住居 1 出土遺物	39
第 30 国 墓 1	40

(追跡A遺跡)	
第 1 図 追跡A遺跡構成図	44
第 2 図 溝 1	45
第 3 図 溝 2	45
第 4 図 溝 1 出土遺物	46
第 5 図 溝 2 山上遺物	46
第 6 図 土壇 1	46
第 7 図 土壇 2	46
(黒岩遺跡)	
第 1 図 黒岩遺跡発掘調査前測量図	49
第 2 図 調査区断面図及び 1997 年調査時のトレンチ配図	50
第 3 図 調査区上層断面図(東西)	51
第 4 図 調査区上層断面図(南北)	52
第 5 図 上層遺構平面図	53
第 6 図 黒岩遺跡平面図	55
第 7 図 黒岩遺跡下層遺構拡大図	57
第 8 図 黒岩遺跡遺構群分け図	59
第 9 図 土壇塗 1 ~ 5 平面・断面図	60
第 10 図 土壇塗 6 ~ 9、溝 3 平面・断面図	62
第 11 図 土壇塗 10 ~ 13 平面・断面図	63
第 12 図 上層塗 11 山上遺物	64
第 13 図 上層塗 14 ~ 17 平面・断面図	64
第 14 図 土壇塗 66 平面・断面図	65
第 15 図 土壇塗 18 ~ 21・24・25 平面・断面図	66
第 16 図 土壇塗 22・23 平面・断面図	67
第 17 図 上器柄塗 1 平面・断面図(上)及び上器柄実測図(下)	68
第 18 図 方形台状塗 1 溝 1 平面・断面図	69
第 19 図 溝 1 出土遺物	70
第 20 図 方形台状塗 1 溝 2 平面・断面図	70
第 21 図 溝 2 山上遺物	71
第 22 図 溝 3 山上遺物	71
第 23 図 方形台状塗 1 溝 4 平面・断面図	73
第 24 図 土壇塗 26 ~ 31 平面・断面図	74
第 25 図 土壇塗 32 ~ 39 平面・断面図	75
第 26 図 土壇塗 40 ~ 44 平面・断面図	76
第 27 図 土壇塗 45 ~ 48 平面・断面図	77
第 28 図 土壇塗 49 ~ 54 平面・断面図	78
第 29 図 土壇塗 55 ~ 57 平面・断面図	79
第 30 図 土壇塗 58・59 平面・断面図	80
第 31 図 上層塗 60・61 平面・断面図	80
第 32 図 上層塗 62 ~ 64 平面・断面図	81
第 33 図 土壇塗 65 平面・断面図	82
第 34 図 方形台状塗 2 (土壇塗 54・67 ~ 70・溝 5) 平面・断面図(1)	83
第 35 図 方形台状塗 2 (土壇塗 67 ~ 70・溝 5) 平面・断面図(2)	84
第 36 図 方形台状塗 2 溝 5 山上遺物	85
第 37 図 方形台状塗 3	86
(上層塗 71 ~ 77) 平面・断面図	
第 38 図 方形台状塗 3 土壇塗 73・74 山上遺物	87
第 39 図 方形台状塗 3 土壇塗 72 山上遺物	87
第 40 国 方形台状塗 4 (上層塗 78・79・溝 6) 平面・断面図	88
第 41 国 溝 6 出土遺物	89
第 42 国 溝 7 平面・断面図	90
第 43 国 溝 7 山上遺物	90
第 44 国 調査区割と 1997 年調査トレンチ配図	91
第 45 国 A 区出土遺物	92
第 46 国 B 区出土遺物	93
第 47 国 C・D 区山上遺物 (1・3・12・13・C 区、それ以外は D 区)	94
第 48 国 その他の出土遺物	95
第 49 国 1997 年調査トレンチ 1 (A 区) 出土遺物	95
第 50 国 1997 年調査トレンチ 2 (B 区) 出土遺物	96
第 51 国 1997 年調査トレンチ 3・4 (C・D 区) 山上遺物	96
第 52 国 1997 年調査トレンチ内その他山上遺物	97
第 53 国 雜式石棺 1 平面・断面図	98
第 54 国 古墳時代の遺構分布図	99
第 55 国 土器柄 1 平面・見通し図	100
第 56 国 織機器 1・2 山上状況	101
第 57 国 遺構に伴う遺物	103
第 58 国 遺構に伴わない遺物	104

第 59 図 美作地域の弥生時代墳墓群 1	108	(城山遺跡)	
第 60 図 美作地域の弥生時代墳墓群 2	109	第 1 図 城山遺跡遺構配置図	121
第 61 図 方形台状墓 1 の東隅部	112	第 2 図 土壙 1 出土遺物	122
(追坊師 B 遺跡)		第 3 図 十塚 1・人骨出土状況	123
第 1 図 追坊師 B 遺跡遺構配置図	116	第 4 図 上塙 2	124
第 2 図 溝 1・出土遺物	117	第 5 図 上塙 3	124
第 3 図 溝 2 潟 3・山土遺物	117	第 6 図 土壙 4	125
第 4 図 溝 4	118	第 7 図 土壙 5・人骨出土状況	125
第 5 図 溝 5	118	第 8 図 土壙 5 出土遺物	126
第 6 図 土壙 1・出土遺物	119	第 9 図 人体骨骼各部の名称	127

表目次

(第 1 章)		(黒岩遺跡)	
表 1	確認調査概要一覧	表 1	黒岩遺跡土壙盛一覧表
表 2	文化財保護法に基づく文書一覧	表 2	追坊師 B 遺跡遺構配置一覧表
(畔田遺跡)		(追坊師 B 遺跡)	
表 1	畔田遺跡遺構一覧表	表 1	追坊師 B 遺跡遺構一覧表
表 2	畔田遺跡遺物観察表	表 2	追坊師 B 遺跡遺物観察表
(追坊師 A 遺跡)		(城山遺跡)	
表 1	追坊師 A 遺跡遺構一覧表	表 1	城山遺跡遺構一覧表
表 2	追坊師 A 遺跡遺物観察表	表 2	城山遺跡遺物観察表
	47	表 3	出土骨の同定結果

挿図写真目次

(第 1 章)		(城山遺跡)	
挿図写真 1	新クリーンセンター建設予定地	4	挿図写真 1 人骨出土状況
(畔田遺跡)		(城山遺跡)	
挿図写真 1	住居 1 作業風景 (北から)	37	挿図写真 1 人骨出土状況

図版目次

(巻頭図版)

巻頭図版 1 1 黒岩遺跡遺景（西から）	図版 8 3 D地区試掘前	
巻頭図版 1 2 中心部土壤変遷（右上が北）	図版 9 1 D地区重機掘削中	
巻頭図版 2 1 方形台状墓 1（右七が北）	図版 9 2 E地区試掘調査前	
巻頭図版 2 2 方形台状墓 2～4（右上が北）	図版 9 3 E地区試掘トレンチ（西から） （試掘・確認調査 平成23・24年度）	
巻頭図版 3 1 箱式石棺 1（古墳時代）検出状況（西から）	図版 10 1 F地区調査前現況（北西から）	
巻頭図版 3 2 土隙格子墓 1（古墳時代）検出状況 (北西から)	図版 10 2 G地区調査前現況（西から） 図版 10 3 作業状況（G地区）	
巻頭図版 4 1 士壙 1 人骨出土状況	図版 11 1 F地 ^ク 及びG地区調査状況遺景（北西から）	
巻頭図版 4 2 士壙 5 人骨出土状況	図版 11 2 F地区トレンチ（上空から）	
(辰星池東南遺跡認定墓)		図版 11 3 G地区 平成23年度調査トレンチ (上空から)
図版 1 1 調査位置遺景（南から）		
図版 1 2 T-1（北西から）	(畔田遺跡)	
図版 1 3 T-2（北東から）	図版 12 1 畔田遺跡遺景（北から）	
図版 2 1 T-3（南から）	図版 12 2 畔田遺跡全景（左が北）	
図版 2 2 T-4（北から）	図版 13 1 土壙 1（北から）	
図版 2 3 T-5（南から）	図版 13 2 土壙 14（東から）	
図版 3 1 T-6（北から）	図版 13 3 士壙 18（北から）	
図版 3 2 T 7（北西から）	図版 14 1 上墳 19（東から）	
(試掘調査)		図版 14 2 墓 1（北から）
図版 3 3 調査前状況（南から）	図版 14 3 建物 1（上が北）	
図版 4 1 T-1（南から）	図版 15 1 住居 1（上が北）	
図版 4 2 T 2（西から）	図版 15 2 住居 1（北から）	
図版 4 3 T-3（北から）	図版 15 3 住居 1内の土器 34出土状況	
図版 5 1 T-4（北東から）	図版 16 畔田遺跡出土遺物 1	
図版 5 2 遺物出土状況（T-2）（北西から）	図版 17 畔田遺跡出土遺物 2	
図版 5 3 遺物出土状況（T-4）（西から）	図版 55 1 畔田遺跡出土金属製品	
図版 6 1 調査状況（T-4）（北東から）	(追跡師A遺跡)	
図版 6 2 辰星池東南遺跡種認定調査出土遺物	図版 18 1 追跡師A遺跡遺景（東から 写真左側 右側は畔田遺跡）	
(試掘・確認調査 平成21年度)		
図版 7 1 A地区試掘調査前	図版 18 2 追跡師A遺跡全景（右が北）	
図版 7 2 A地区遭構検出状況（東から）	図版 19 1 溝 1（東から）	
図版 7 3 B地区試掘調査前	図版 19 2 溝 2（東から）	
図版 8 1 B地区試掘調査後（南から）	図版 19 3 溝 2断面	
図版 8 2 C地区試掘調査後（北から）		

(黒岩遺跡)		
図版 20 1	黒岩遺跡発掘調査前（西から）	図版 33 1 方形台状墓 3（南から）
図版 20 2	黒岩遺跡調査後全景（左上が北）	図版 33 2 方形台状墓 4（南東から）
図版 21 1	遺構全景	図版 33 3 方形台状墓 4（北東から）
図版 21 2	A郡土壇墓 1～5（左上が北）	図版 34 1 渕 7（西から）
図版 22 1	B群土壇墓（左上が北）	図版 34 2 土壇墓 58, 69, 66（北から）
図版 22 2	C群土壇墓（左上が北）	図版 34 3 方形台状墓 1 内土壇墓群（北から）
図版 23 1	箱式石棺 1（上が北）	図版 35 1 方形台状墓 1 内土壇墓群（南から）
図版 23 2	古墳時代の土壇墓（下）（上が北）	図版 35 2 方形台状墓 1 内土壇墓群（東から）
図版 24 1	上層遺構（南西から）	図版 35 3 発掘作業風景
図版 24 2	上層墓 1～5（西から）	図版 36 1 中学生職場体験
図版 24 3	溝 3、上層墓 6～9（東から）	図版 36 2 現地説明会
図版 25 1	左：土壇墓 1（南西から） 右：土壇墓 2（北から）	図版 37 黒岩遺跡出土遺物 1
図版 25 2	上層墓 4（南から）	図版 38 黒岩遺跡出土遺物 2
図版 25 3	左：上層墓 3（東から） 右：土壇墓 5（北から）	図版 39 黒岩遺跡山上遺物 3
図版 26 1	土壇墓 10, 16, 17（東から）	図版 40 黒岩遺跡出土遺物 4
図版 26 2	上層墓 11～13, 22（南から）	図版 41 黒岩遺跡出土遺物 5
図版 26 3	上層墓 14～17（西から）	図版 42 黒岩遺跡出土遺物 6
図版 27 1	土器棺墓 1 検出状況（北から）	図版 43 黒岩遺跡山上遺物 7
図版 27 2	土器棺墓 1 完掘状況（東から）	図版 44 黒岩遺跡出土遺物 8
図版 27 3	上層墓 18, 19, 21（東から）	図版 45 黒岩遺跡出土遺物 9
図版 28 1	土壇墓 25, 33, 35, 36（西から）	図版 46 1 土器棺墓 1（古墳時代）検山状況 (北西から)
図版 28 2	土壇墓 26～29, 31, 32, 38, 39, 45, 46（西から）	図版 46 2 土器棺墓 1（古墳時代）刀子出土状況 (北東から)
図版 28 3	土壇墓 38, 39, 41, 45（東から）	図版 46 3 須恵器 2 検出状況（南から）
図版 29 1	上層墓 55～57（東から）	図版 47 1 箱式石棺 1（古墳時代）蓋石取り外し後 (西から)
図版 29 2	上層墓 49, 50, 52, 53（西から）	図版 47 2 箱式石棺 1（古墳時代）完掘状況 (南東から)
図版 29 3	溝 5、土壇墓 51, 54（南東から）	図版 47 3 須恵器 1 検出状況（南東から）
図版 30 1	C群土壇墓（西から）	図版 48 黒岩遺跡出土遺物 10
図版 30 2	溝 2、土壇墓 62～64（東から）	図版 49 黒岩遺跡出土遺物 11 (造坊跡B遺跡)
図版 30 3	溝 1（西から）	図版 50 1 造坊跡B遺跡遺長（西から）
図版 31 1	溝 1 北側アゼト層断面（北から）	図版 50 2 造坊跡B遺跡全景（右が北）
図版 31 2	溝 1 南北アゼト層断面（東から）	
図版 31 3	溝 2 列石（北から）	
図版 32 1	方形台状墓 1 東端部拡大（東から）	
図版 32 2	方形台状墓 2（南東から）	
図版 32 3	方形台状墓 2（北から）	図版 51 1 城山遺跡遠景（西から） (右側端部は平成21年度試掘調査のトレンド)

- 図版 51 2 城山遺跡全景（上が北）
- 図版 52 1 土壙 1（西から）
- 図版 52 2 上壙 1 人骨出土状況（南面から）
- 図版 52 3 土壙 1 人骨出土状況
- 図版 53 1 土壙 2（北から）
- 図版 53 2 土壙 3（北から）
- 図版 53 3 上壙 4（北面から）
- 図版 54 1 土壙 5（北東から）
- 図版 54 2 土壙 5 人骨出土状況
- 図版 54 3 土壙配置（右から上壙 5・1・2・3）
- 図版 55 2 城山遺跡出土遺物
- 図版 56 城山遺跡山上骨

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1 クリーンセンター建設に至る経緯

津山市には、市内小柄にごみ処理施設（昭和51年建設）があり、補修をおこないながら現在も稼働している。ただこれら施設の耐用年数は20～25年と言われており、すでに耐用年数を超えており、新たな施設を建設する事が急務であった。このような事態は周辺の町村でも同様であった。

平成10年3月に岡山県が「岡山県ごみ処理広域化計画」を策定したのをうけ、同年12月に20の市町村で津山ブロックごみ処理広域化対策協議会を設立した。その後市町村合併もあり、平成19年3月策定の「新岡山県ごみ処理広域化計画」に基づき、津山ブロック7市町村（津山市・美作市・鏡野町・勝央町・奈義町・美咲町・西粟倉村）で、基本計画の策定、候補地の選定を行なうこととなった。

本市では早い段階で、市内東部の綾部地区が建設の候補地としてあがっていたが、根強い反対や多額な用地・補償費が必要など事業を進めるにあたっての問題点があり、平成18年に候補地が取りやめとなつた。その後候補地の公募が平成18年9月から開始され、平成19年5月には候補地が領家、為本ほか、安井地区に絞られ、同年6月に市内西部の領家地区に決定した。

平成20年5月には新クリーンセンター施設配置案（第2図）も決定した事を受け、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、担当部署との協議にはいる事となった。

なお、平成21年1月には、美作市と西粟倉村が津山ブロック協議会から脱会し、同年4月には残る5市町（津山市・鏡野町・勝央町・奈義町・美咲町）で、津山圏域資源循環施設組合が設立された。

2 試掘・確認調査の経緯と経過

津山市領家地区の約30haの建設予定地内に、周知の遺跡として知られていたのは、黒岩1・5・6号墳、野面羅遺跡（追跡B遺跡）だけであった（第2章 第1図）。これら周知の遺跡については出来る限り現状保存を求める一方（黒岩1・5・6号墳については現状保存）、遺跡の見られない部分について、地形図を見ながら現地を踏査した結果、集落遺跡の存在しそうな緩やかな丘陵が多く見られた。特にこの領家地区周辺には、中国自動車道建設などで弥生時代から古代にかけての遺跡（領家遺跡・宮尾遺跡・久米庵寺など）がすでに調査され各時代の遺跡が集中して見られる事や、隣接する鏡野町郷地区にも古墳など多くの遺跡が知られている事などから、確認調査の必要性を担当部署に説明し、実施する運びとなつた。

確認調査必要箇所は建設予定地内に7箇所あり、これらをA～G地区と呼称した。（表1、第4章第2節第3図）調査予定地はすべて丘陵で樹木が繁茂しており、そのままでは確認

調査にはいる事ができない。このため、確認調査範囲を現地に設定し、その部分の樹木の伐採片づけを先行して行い調査範囲を確保した。確認調査は、B地区のみ人力で掘り下げそれ以外は重機を使用して幅2m程のトレンチを尾根線とそれに直交する形で設定し、掘削後は人力で遺構の検出を行った。この結果、B・F地区以外で遺構・遺物が検出され、遺跡の範囲が確定された。これら新規発見の遺跡については、新クリーンセンター建設工事によって削平を余儀なくされる部分のため、発掘調査で記録保存を行う事となった。

なお、各地区的確認調査概要は以下のとおりで、詳細は第4章を参照されたい。

また、文化財保護法関係の手続きは、表2のとおりである。(小郷)



第1図 遺跡位置図

表1 確認調査概要一覧

地区名(遺跡名)	調査期間	確認調査結果	本調査面積
A(畔田遺跡)	H22.3.	住居・土壤・柱穴等、土師器・須恵器等出土	3,500 m ²
B	H22.3	遺構・遺物無し	
C(追坊師A遺跡)	H22.3	遺構検出、土師器片出土	900 m ²
D(黒岩遺跡)	H22.3	遺構検出、須恵器片出土	4,600 m ²
E(追坊師B遺跡)	H22.3	遺構検出、土師器・須恵器片出土	600 m ²
F	H23.6～9	遺構・遺物無し	
G(城山遺跡)	H23.6～9 H24.5～7	貯藏穴、弥生土器片出土	950 m ²

表2 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番 号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	目的	担当者	期間	主な監査事項
								ごみ発掘調査
2	滋賀県第329号 H22.3.9	出土物・集落 跡・古墳	津山市御室100-1ほか	300,000 面積	ごみ発掘 調査	津山市教育委員会 監督者 富村方穂	H22.4.1～ H23.3.31	埋蔵調査

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番 号	文書番号 日付	周辺・周辺外	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	包帯地の 年期	担当者	期間
1	洋松大字第10号 H22.4.16	周辺・周辺外	集落跡	津山市御室101-1ほか	999	ごみ発掘 調査	有	津山市教育委員会 監督者 富村方穂	H22.3.6～ H22.3.31
2	沖野生文第37号 H23.9.30	周辺外	集落跡・その他の 施設	津山市御室101-1ほか	1322.2	ごみ発掘 調査	有	津山市教育委員会 監督者 口村守倫	H23.8.6～ H23.9.30

遺跡発見の通知（法第97条）

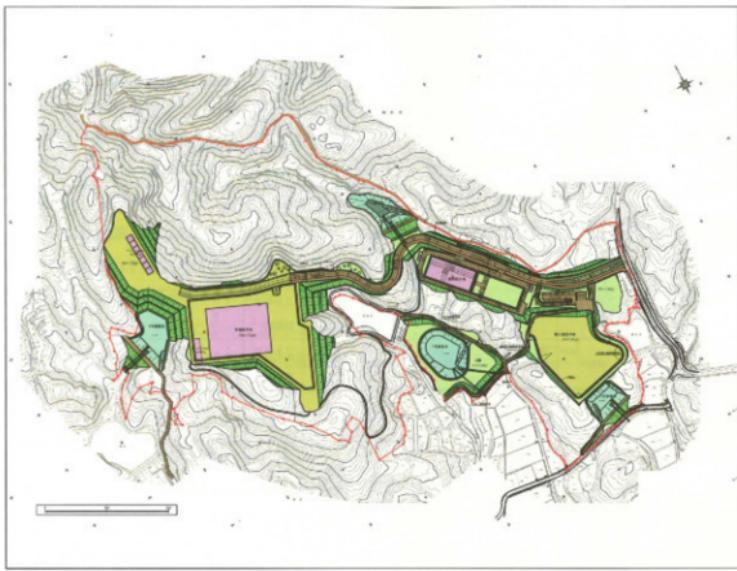
番 号	文書番号 日付	遺跡の種類	所在地	発見年月日	発見の事情	土地の所有者		
1	津野生文第212号 H22.5.12	集落跡	津山市御室101-1ほか	H22.3.9～ H22.3.31	試掘調査	津山市教育委員会 監督者 富村方穂		
2	津野生第331号 H23.9.29	集落跡・その他の施 設	津山市御室100-1ほか	H23.6.8～ H23.9.29	試掘調査	津山市教育委員会 監督者 富村方穂		

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番 号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	発見者	担当者	備考
1	津野生文第246号 H23.9.29	墓園跡・その他の 施設	津山市御室101-1ほか	9600	ごみ発掘 調査	津山市教育委員会 監督者 教育委員会 富村方穂	竹木治治・貴島信造 早川幸輔	

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

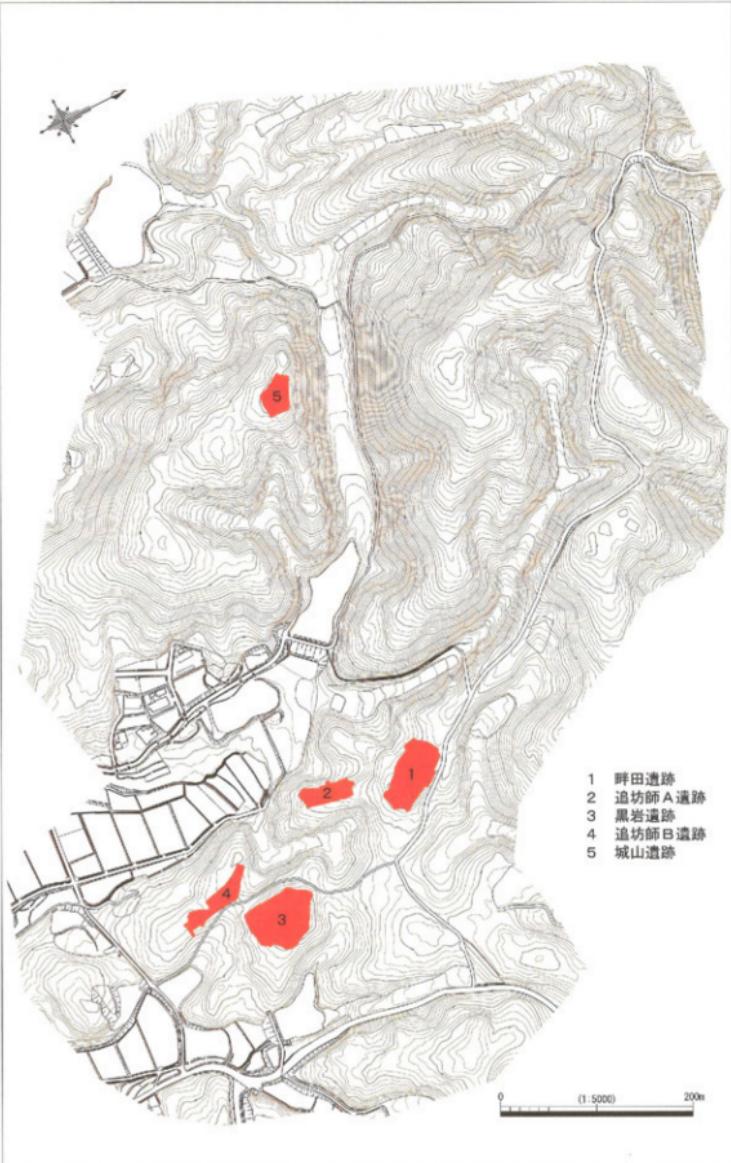
番 号	文書番号 日付	物件名	所在地	計上年月日	発見者	機械装置名	土地所有者
1	津野生文第104号 H22.4.19	野生土器・土器類・漆器器 コンテナ・箱	津山市御室101-1ほか	H22.3.9～ H22.5.31	津山市教育委員会 監督者 富村方穂	津山市生の里文 化財センター	津山市教育委員会 監督者 富村方穂
2	津野生文第235号 H23.9.20	野生土器・土器質土器 1 箱	津山市御室101-1ほか	H23.9.29	津山市教育委員会 監督者 富村方穂	津山市生の里文 化財センター	津山市教育委員会 監督者 富村方穂
3	津野生文第47号 H24.4.5	野生土器・漆器・土器類・吉良D か コンテナ・10 箱	津山市御室101-1ほか	H21.3.31	津山市教育委員会 監督者 富村方穂	津山市生の里文 化財センター	津山市教育委員会 監督者 富村方穂
4	津野生文第264号 H24.1.19	野生土器・漆器・吉良D か コンテナ・10 箱	津山市御室101-1ほか	H24.11.15	津山市教育委員会 監督者 富村方穂	津山市生の里文 化財センター	津山市教育委員会 監督者 富村方穂



第2図 新クリーンセンター施設配置図



挿図写真1 新クリーンセンター建設予定地



第3図 新クリーンセンター建設予定地内遺跡分布図

第2節 調査の経過と体制

1. 調査の経過

平成 22 年度から平成 23 年度にかけて実施した、クリーンセンター建設予定地内の試掘及び確認調査の結果を受けて、平成 23 年度から平成 24 年度にかけて、調査員 3 名体制で発掘調査を行った。

平成 23 年度は、9 月から翌年 3 月にかけて、畔田遺跡・追坊師 A 遺跡・黒岩遺跡・追坊師 B 遺跡の各遺跡の調査に着手し、畔田遺跡では弥生時代の貯蔵穴や、古墳時代の住居跡、古代の掘立柱建物等を検出したが、住居及び掘立柱建物は単独での検出であり、集落域は確認されなかった。追坊師 A 遺跡では弥生時代と奈良時代の溝を検出したが、検出できた遺構はごくわずかであり、遺跡の詳しい性格は不明であった。追坊師 B 遺跡は奈良時代の土壌や中世から近世にかけての数条の溝を検出したが追坊師 A 遺跡と同様に検出できた遺構はごくわずかであり、遺跡の詳しい性格は不明であった。黒岩遺跡については、表土の除去と遺構の検出に努めた。平成 23 年度の調査は、測量委託などの手続で一部調査を重複しながら行い、畔田遺跡と追坊師 A 遺跡の調査を終了した。

平成 24 年度はまず、4 月から追坊師 B 遺跡の作図作業を行い調査を終了した。黒岩遺跡は、遺構検出作業の結果、弥生時代から古墳時代にかけての 70 以上の埋葬施設を確認し、この時期の大規模な集団墓地であることが分かった。なお、黒岩遺跡の成果を一般に広く周知するため、7 月 7 日には現地説明会を実施した。その後作図作業を行い、8 月に黒岩遺跡の調査を終了した。9 月からは、城山遺跡の調査に着手し弥生時代の貯蔵穴 4 基等を検出した。このうち 2 基の貯蔵穴から人骨が出土した。

11 月にはすべての調査を終え、現地事務所を撤収し、現地での作業を終了した。

2. 報告書作成の経過

報告書作成のための整理作業は、平成 23 年度から平成 26 年度にかけて、調査が終了した遺跡から、津山弥生の里文化財センターで行った。

なお、担当者相互の意思疎通を図るため、随時整理作業及び報告書作成のための会議を開催した。（平井）

3. 調査日誌抄

畔田遺跡

平成23年 9月26日 調査機材搬入
平成23年 9月27日 遺構検出作業開始
平成23年12月20日 空撮実施
平成23年12月21日 測量着手
平成24年 2月21日 地形測量実施
平成24年 3月13日 現地調査終了

追坊師B遺跡

平成23年11月30日 重機による表土除去
平成23年12月6日 遺構検出作業開始
平成24年 1月31日 空撮実施
平成24年 3月14日 地形測量実施
平成24年 4月16日 測量着手
平成24年 4月16日 現地調査終了

追坊師A遺跡

平成23年10月18日 重機による表土除去
平成23年10月25日 遺構検出作業開始
平成23年12月20日 空撮実施
平成24年 1月10日 測量着手
平成24年 2月21日 地形測量実施
平成24年 3月13日 現地調査終了

城山遺跡

平成24年 5月16日 重機による表土除去
平成24年 9月24日 遺構検出作業開始
平成24年10月18日 岡山理科大学
富岡教授現地指導
平成24年10月23日 空撮実施
平成24年10月29日 測量着手
平成24年11月 1日 岡山理科大学
富岡教授現地指導

黒岩遺跡

平成23年11月 9日 調査区の草刈実施
平成23年12月16日 調査前の地形測量実施
平成24年 1月20日 遺構検出作業開始
平成24年 6月26日 空撮実施
平成24年 6月28日 津山市文化財保護委員
視察
平成24年 6月29日 測量着手
平成24年 7月 7日 現地説明会実施
平成24年 8月 3日 現地調査終了

4. 調査及び整理の体制

平成 21 年度（2009 年度）

津山市教育委員会

教育長	藤田長久	津山弥生の里文化財センター	行田裕美
教育次長	大下順正		小郷利幸
文化財課			
課長	行田裕美	所長	行田裕美
文化財保護係長	小郷利幸	次長	小郷利幸
主査	平岡正宏	主査	平岡正宏
主任	仁木康治	主任	仁木康治
主任	豊島雪絵	主任	豊島雪絵
主事	岡崎靖史	主事	岡崎靖史

平成 22 年度（2010 年度）

津山市教育委員会

教育長	山村芳倫	津山弥生の里文化財センター	行田裕美
教育次長	今井元子		小郷利幸
文化財課			
課長	行田裕美	所長	行田裕美
文化財保護係長	小郷利幸	次長	小郷利幸
主査	平岡正宏	主査	平岡正宏
主査	仁木康治	主査	仁木康治
主任	豊島雪絵	主任	豊島雪絵
主事	岡崎靖史	主事	岡崎靖史

平成 23 年度（2011 年度）

津山市教育委員会

教育長	山村芳倫	津山弥生の里文化財センター	赤松直人
生涯学習部長	行山裕美		小郷利幸
文化課			
課長	赤松直人	所長	赤松直人
主幹（兼）文化財保護係長	小郷利幸	次長	小郷利幸
主査	仁木康治	主査	仁木康治
主任	森本千春	主任	森本千春
主任	豊島雪絵	主任	豊島雪絵
主任	平井泰明	主任	平井泰明
主事	岡崎靖史	主事	岡崎靖史

平成 24 年度（2012 年度）

津山市教育委員会

教育長 山村芳倫
生涯学習部長 行田裕美

文化課

課長 竹内清起
主幹（兼）文化財保護係長 小郷利幸
主査 仁木康治
主任 森本千春
主任 豊島雪絵
主任 平井泰明
主事 仲井寛明

津山弥生の里文化財センター

所長 竹内清起
次長 小郷利幸
主査 仁木康治
主任 森本千春
主任 豊島雪絵
主任 平井泰明
主事 仲井寛明

平成 25 年度（2013 年度）

津山市教育委員会

教育長 山村芳倫
生涯学習部長 行田裕美

文化課

課長 谷口善洋
主幹（兼）文化財保護係長 小郷利幸
主査 仁木康治
主任 豊島雪絵
主任 平井泰明
主事 仲井寛明

津山弥生の里文化財センター

所長 小郷利幸
次長 仁木康治
主任 豊島雪絵
主任 平井泰明
主任 仲井寛明

平成 26 年度（2014 年度）

津山市教育委員会

教育長 山村芳倫
生涯学習部長 松尾全人

文化課

課長 谷口善洋
主幹 小郷利幸
文化財保護係長 仁木康治
主任 豊島雪絵
主任 平井泰明
主事 宮崎鉢子

津山弥生の里文化財センター

所長 小郷利幸
次長 仁木康治
主任 豊島雪絵
主任 平井泰明
主任 宮崎鉢子

調査・整理作業

岡千晶 岡崎ゆかり 岸本由紀子 権田俊朗 田淵千香子 野上燕子 春名博美
實石和子 宗本節子（敬称略 アイウエオ順）

発掘作業

発掘作業は、公益社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。（敬称略 アイウエオ順）

（畔田遺跡）

石本寛治 稲垣精一 井上信次郎 江田勝 岡山良治 木下益穂 庄司雅雄 田丸史
林原一郎 光岡平八郎 宮崎健二 森藤和三郎 菅木正喜 山本栄造 山本満

（追坊師A遺跡）

石本寛治 稲垣精一 井上信次郎 江田勝 岡田良治 木下益穂 庄司雅雄 田丸史
林原一郎 光岡平八郎 宮崎健二 森藤和三郎 菅木正喜 山本栄造 山本満

（黒岩遺跡）

石田久志 石本寛治 稲垣精一 井上信次郎 内田英文 江田勝 岡山良治 片岡計介
木下益穂 庄司雅雄 高山尚嗣 竹花修 田淵治平 田丸史 土井鯉喜丸 林原一郎
原口亘 藤島進 光岡平八郎 宮口一也 宮崎健二 森藤和三郎 菅木正喜 山本栄造
山本満 山本洋一

（追坊師B遺跡）

石本寛治 稲垣精一 井上信次郎 江田勝 岡田良治 木下益穂 庄司雅雄 田丸史
林原一郎 光岡平八郎 宮崎健二 森藤和三郎 菅木正喜 山本栄造 山本満

（城山遺跡）

石田久志 片岡計介 高山尚嗣 田淵治平 土井鯉喜丸 原口亘 宮口一也 山本洋一

発掘調査から報告書作成にあたり、津山地域資源循環施設組合、岡山県産業労働部企業立地推進課、津山市クリーンセンター建設事務所、津山市都市建設部及び下記の方々にお世話なった。記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 アイウエオ順）

石田爲成 宇垣匡雅 小椋繁述 可見通公 猪野久 木村督 目下隆春 河本清
鳥崎東 杉山知子 頭士倫典 富岡直人 永禮宜子 三好基之
株式会社アークコンサルタント 有本観光バス株式会社 株式会社オーエスエー
久米建設株式会社 大和リース株式会社 株式会社中電工 フジテクノ有限会社

第2章 遺跡及びその周辺の地形と歴史的環境

津山市領家地区は市の西部に位置し、行政区画としては北を若田郡鏡野町、南を津山市久米川南、東を津山市宮尾、西を津山市中北下にそれぞれ接する。地形は、北半分は津山市・鏡野町境をなす丘陵性山地から南に派生した樹状の尾根と深く狭小な谷で構成され、南半分は古井川支流である久米川中流域の沖積平野を構成して久米川に至る。また、谷地形を利用して幾つかの溜池が造られて水田を潤している。

この地区に關係する水系は久米川以外ではなく、地区的東端は津山市・鏡野町境から南下する丘陵性山地によって区切られ、西は北半部が山地、南半部は水田で中北下地区に続いている。

領家地区から北行して峠を越すと鏡野町郷地区に通じ、地勢的に隣接する鏡野町からも鉄道などがよく利用されていたという。また、地形的な条件から、集落は山地の裾部に多くが分布するが、近年では平野部に拡大する傾向にある。

以下、この地域の歴史的環境を遺跡の分布を中心に時代別に概観したい。

縄文時代以前～縄文時代

縄文時代とそれ以前の生活痕跡は、この地域内では確認されていない。地区東端の領家遺跡から出土した打製石斧が旧石器時代に属するとされている（註1）。東接する宮尾遺跡では縄文晚期・久米川対岸の法事坊遺跡では、縄文後・晚期の土器片が出土していることから、人が何らかの形で活動していたことは想像に難くない（註2）。

弥生時代

弥生時代に入ると、遺跡数としてはそれなりの増加をみるが、何れも小規模で密度そのものあまり高くない。遺跡は、概ね丘陵の頂部から南向きの緩斜面に分布する。遺跡の規模としては辰尾池東南遺跡が大きいとみられるが、発掘調査が行われていないことから詳細は詳らかではない（註3）。また、領家遺跡では弥生時代後期の堅穴住居から炭化材や炭化米が出土し、当時のコメの住居内での保管状況をみることができる。

ほか、畔田遺跡、追坊御A遺跡、城山遺跡では柱穴、土壙などが確認され、土器片が出土しているが、何れも密度や広がりに欠ける。辰尾池西遺跡や新池東遺跡でも土器片の出土が記録され、西方にも芭蕉遺跡、鴻の池遺跡があるが、詳細はわからない。なお、二つ塚1号墳の下層遺構として、弥生時代の土壙が発掘調査時に検出されている（註4）。

久米川対岸の法事坊遺跡では、井戸や弥生時代後期の住居址が確認されている。また、^古高嶺遺跡、円光寺裏山遺跡でも弥生土器片が出土しているが詳細は不明である。

古墳時代

古墳時代になると、この地区においても数的には多くはないものの古墳が築造されている。概ね直径10m未満の円墳または方墳で、丘陵頂部に多く築造され、数基で古墳群を構

成している。これらの詳細については、発掘調査が行われた少数の例外を除いて多くがよくわかっていない。

地区東端の丘陵性山地上に占地する車戸1・2号墳は、何れも径8m、高さ1.5mの円墳である。二つ塚1号墳は、径9mの円墳もしくは方墳で、出土遺物から6世紀前半から中頃の築造とみられている（註5）。同2号墳は径10m、高さ1.5mの円墳、同3号墳は径8m、高さ0.5mの低平な円墳である。登船1・2号墳及び7～9号墳は、何れも横穴式石室を有する後期古墳であることが判明しているが、領家地区において現時点で確認されている後期古墳はこれらに限られる。また、登船3号墳は発掘調査が行われていないが、墳長35mの前方後円墳で埴輪を作ることが判明している。

鏡野町境に近い最奥部にある、黒岩1～6号墳は、径8～10m、高さ1m未満の低平な円墳または方墳とされる。また、平野部を臨む丘陵頂部に位置する、大庭様1・2号墳は共に径8mの円墳とされる。城山1号墳は径13m、高さ約1mの円墳である。2号墳の規模はわからない。大字が中北下となるが、同様に平野部を臨む芭蕉古墳群は、墳長約27mで帆立貝式の墳形を持つ前方後円墳の4号墳を中心とするグループと、尾根を越える6・7号墳に分かれる。4号墳以外は、概ね径10mクラスの円墳で、7号墳のみ径約6mとやや小規模である。西方の多田1～4号墳も規模的に類似する古墳で、さらに西方の鴻の池1・3・4号墳は径6mクラスの小規模円墳である。なお、第1図には記載されていないが、池の西岸には内部主体に横穴式石室を持ち、陶棺を内蔵する鴻の池2号墳（墳長35m）が築造されている。久米川流域で最後の前方後円墳とされる。

古墳時代の集落遺跡はほとんど確認されていない。領家遺跡で6世紀後半から7世紀の堅穴住居址が多数検出されている。ほか、畔田遺跡では堅穴住居址、黒岩遺跡では土壙が確認され、久米川対岸の山山遺跡でも堅穴住居址が確認されているが、築造された古墳に比較すると、遺跡としては小規模かつ遺構密度も低い。遺跡のあり方については弥生時代とあまり変わりはみられないようである。

古代～中世

古代から中世にかけてはさらに遺跡数が減少する。領家遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての礎石建物が検出され、石帶・綠釉陶器・円面鏡などの遺物が出土している。東に隣接する久米庵寺や、久米郡衙に比定される宮尾遺跡との関係が注目され、これらを成立させた有力者の集落とみられる。ほか、時期的に相当する遺跡は法事坊遺跡があげられる。主たる存続時期は弥生時代から室町時代と幅広いが、井戸・溝状造構などが検出され、墨書き器や施釉陶器・青磁片などの遺物が出土している。これ以外にも散発的に遺物が出土しているが（註6）、遺跡のみからこの地域の古代を推し量ることは極めて難しい。

近世～現代

「領家」という名は、古い莊園の地に因んだといわれる（註7）。中世末頃には地名として使用され、近世に入ってのち村名としてつかわれた。江戸期は、慶長8年（1603）に森忠政が津山に入封したことから森氏の支配を受け、元禄10年（1697）森氏の廃絶に伴い幕



82 滝の池 1 号墳 84 滝の池 3 号墳 85 滝の池 4 号墳 86 滝の池遺跡 90 多田 4 号墳 91 ~ 94 多田 1 ~ 4 号墳 95 多田
 5 号墳 96 ~ 100 芭蕉 1 ~ 5 号墳 101 ~ 102 芭蕉 6, 7 号墳 103 芭蕉遺跡 104 新池東遺跡 105 新池西遺跡 106 長
 尾池東南遺跡 107 ~ 108 城山 1, 2 号墳 109 追訪跡 B 遺跡 (旧 蒲原羅遺跡) 110 ~ 115 黒岩 1 ~ 6 号墳 116 大麻様 1 号墳
 117 大庭様 2 号墳 118 ~ 119 登野 1, 2 号墳 120 ~ 126 登野 3 ~ 9 号墳 127 蓬田遺跡 128 ~ 130 二つ屋 1 ~ 3 号墳
 131 ~ 132 草戸 1, 2 号墳 135 須家遺跡 266 半山 2 号墳 267 古崎遺跡 268 山田遺跡 271 法事坊遺跡 272 萩園千人塚
 古墳 275 円光寺裏山遺跡 1183 稲田遺跡 1184 追訪跡 A 遺跡 1185 黒岩遺跡 1191 城山遺跡 1192 城山古墳
 (注: 太字は本著所収遺跡、遺跡番号前の「久米」は町村合併前の旧自治体名)

第1図 周辺遺跡分布図 ($S = 1/10,000$)

府領となり、次いで甲府藩領、再び幕領、小田原藩領、再び津山藩領とめまぐるしく領主が変わりつつ明治を迎えた。

明治以降は、津山県から北条県を経て明治9年(1876)に岡山県となり、明治22年(1889)の久米村の成立に伴い大字のひとつとなった。大正12年(1923)には、国鉄作備線(現JR姫新線)の津山口～美作追分間が開通し、地域の西南端に美作千代駅が置かれたことから地域交通の拠点ともなった。

昭和に入ってからは、昭和30年(1955)の旧久米町への合併以後も、俗に「領家田園」と呼ばれた穀倉地帯として、一貫して町の基幹産業である農業を支えてきた。かつての出雲往来にかかる国道181号線が地区の南を走り、また、昭和50年(1975)には地区内を東西に縦断する中国縦貫自動車道(現中国自動車道)が完成した。

そして、平成6年(1994)には、地区的東端から宮尾地区にかけての丘陵に県営久米工業団地(現久米産業団地)が造成され、津山西部地域における産業振興拠点の役割が期待された。

平成17年(2005)の津山市への合併後は、5自治体で構成される津山圏域資源循環施設組合の総合型ごみ処理施設の建設が決定し、従来からの農村地帯のみならず、隣接する宮尾及び中北下地区とともに津山圏域におけるこの地区的果たす役割が増大しつつある。(仁木)

(註1) 栗野克己『領家遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会 1975

以下、この遺跡に関する記述については本報告に従っている。

(註2) 村上幸雄・橋本惣司『鷹山遺跡群1』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979

以下、この遺跡に関する記述については本報告に従っている。

(註3) 『改訂版 岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会 2003

以下、註のない遺跡の記述については本書に従っている。

(註4) 小郷利幸・豊島雪絵『大蔵池南2号鉄穴流し遺構 二つ塚1号墳』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告79集』津山市教育委員会 2009

(註5) 註4と同じ

(註6) 本書第3章出土遺物参照。

(註7) 『久米郡誌』久米郡教育会編 久米郡読刊行会 1923

参考文献

『久米町史』久米町史編纂委員会 1984

『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店 1989

第3章 本事業以前に行った調査

津山岡城クリーンセンター建設事業予定地の一部においては、以前に計画された民間開発に伴い、旧久米町教育委員会によって発掘調査が実施されている。今回の調査事業と関連する箇所もあるため、本章ではその概要を報告する。

平成3年8月以降、現在のクリーンセンター建設予定地にはほぼ相当する範囲を対象とする民間開発が具体化した。この計画に対して、久米町（当時）は町誘致企業として対応し、久米町教育委員会（当時：以下同じ）は、開発予定地内に所在する埋蔵文化財の保存について事業者及び岡山県教育委員会と協議を開始した。協議の対象となった埋蔵文化財包蔵地は、黒岩古墳群（1・5・6号墳）と辰尾池東南遺跡である。具体化以後、久米町教育委員会は数回の現地踏査を実施して周知の遺跡及び周知外の遺跡の把握にも努めた。

保存協議の結果、原則としてその時点で既知の埋蔵文化財は綠地等によって現状保存されることが図られた。ただし、辰尾池東南遺跡については遺跡地図上での遺跡範囲は保全されていたが、地形的な条件から遺跡範囲が拡大される可能性があると判断され、さらに現地踏査によって新たに古墳の存在が想定される地点が確認された。これらの取扱いについては、事業者が経費を負担して久米町教育委員会が確認調査及び試掘調査を実施し、遺跡の有無及び範囲を把握したのちに保存協議を行うことで平成6年9月中旬までに事業者と合意することができた。

以上のことと踏まえ、岡山県教育委員会、事業者及び久米町教育委員会の三者で文化財保護に関する覚書を平成7年4月23日付で締結し、工事等の時期が具体化した平成8年11月11日付で試掘・確認調査に関する埋蔵文化財包蔵地調査委託契約を締結した。

調査は平成8年12月24日に辰尾池東南遺跡の範囲確認調査から着手し、平成9年3月11日にトレンチの埋戻しを行い終了した。また、試掘調査については辰尾池東南遺跡の調査と並行して行う形で立木等伐採後の平成9年3月5日に着手し、3月21日に終了した。

いずれも調査主体は久米町教育委員会で、以下に概要を調査箇所別に記述する。

辰尾池東南遺跡確認調査（第1図、図版1～3）

辰尾池東南遺跡は、東向きの丘陵頂部から斜面にかけて位置する。確認調査にあたっては、現在の遺跡範囲から谷に向かってテラス状に張り出した箇所を調査対象範囲とした。旧状は水田または荒蕪地（旧水田）で、調査予定地の多くにススキなどの草木が繁茂していた。

このため事前に下刈作業等を実施し、任意の位置にトレンチを7か所設定（第1図参照）してバックホウを併用して掘り下げ、その後作業員による精査を行った。調査面積はトレンチ総計で130m²である。

調査結果は、トレンチの多くは谷地形を示す堆積状況で湧水が著しく遺構は確認されなかつた。また、遺物は散発的に出土したもの全て流れ込みとみられた。

以上のことから、確認調査範囲には辰尾池東南遺跡の遺跡範囲は及ばないと判断された。

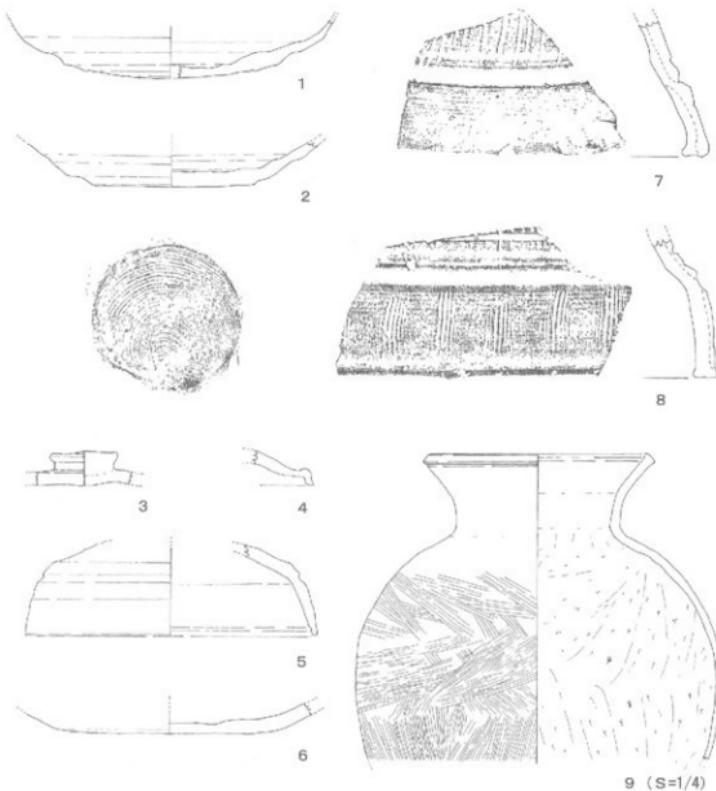


第1図 トレンチ位置図 ($S=1/2,000$)

出土遺物（第2図、図版6）

辰尾池東南遺跡確認調査では、弥生時代から古代にわたる遺物が整理用コンテナに約2箱分出土した。弥生土器・土師器・須恵器が多くを占め、T-2を除く全てのトレンチから出土したが、前述のとおり全て遺構に伴わない遺物である。出土量的にはT-7が多く、T-6がそれに次ぐ。以下に、図化が可能な遺物を紹介するが、ほとんどが古墳時代に属する遺物である。弥生土器・土師器は多くが細片で、復元できなかった。

1・2・6は須恵器底部片で、1・6は底部ヘラ切り、2は糸切りで、底径6.4cmを測る。また、1には×形のヘラ傷が残る。3は須恵器のつまみ部分、4は蓋の端部である。



第2図 辰尾池東南遺跡確認調査出土遺物 (S=1/2・1/4)

2・3・6は古代に属すると考える。5は須恵器杯蓋で復元径12cmを測る。7・8は何れも須恵器の脚部片で、8には外面が6条のハケ目で單位文様に等間隔に加飾される。9は土師器蓋で口径17.6cm、胴部最大径30cmに復元される。4はT-4、1～3・7・8はT-6、5・6・9はT-7から出土した。

試掘調査（古墳推定地）（第1図、図版3-3～6）

黒岩池西側の丘陵頂部において、分布調査によって人工的な地形の改変が認められたため、埋蔵文化財の分布が推定される箇所と判断し試掘調査を実施した。

調査の実施にあたっては、地形を考慮して古墳の所在を想定し、丘陵頂部に設定した4本のトレンチを互いに直交させて設定し、人力で掘り下げ、精査を行って遺構の有無を確認した（第1図参照）。調査面積はトレンチ総計で51.6m²である。

調査結果は、T-1、T-2では地山面からやや浮いた状態ではあったが、多量の弥生土器の散布が認められた。また、T-3ではピット及び石列が確認され、付近では弥生土器が出土した。また、T-4においては、段状遺構の一部とみられた平坦面と、土壙1基が確認された。土壙土体からは壺・高坏などの弥生上器片がまとまった状態で比較的多量に出土し、遺物の出土状況等から遺構は弥生時代に属するものと判断された。

試掘調査地点では、当初古墳の所在を推定したが、調査によって丘陵上に弥生時代の遺跡が分布することが明らかになり、保存協議の対象となることが判明した。

出土遺物

古墳想定地の試掘調査においては、整理用コンテナに約4箱の遺物が出土した。遺物は弥生土器がほとんどである。これらについては、本書第7章の黒岩遺跡の調査報告に一括して整理・掲載しているので、該当箇所を参照されたい。

以上が、今回のクリーンセンター建設の前に行われた本地区の埋蔵文化財調査の概要である。久米町教育委員会は、調査終了後に試掘調査によって確認された新規発見遺跡に対する遺跡範囲の確定作業を含む保存協議を事業者と行う予定としていたが、その後開発事業自体が休止状態となった。このため、岡山県遺跡地図の改定の際、新規発見遺跡については周辺の地形を考慮して遺跡範囲の設定を行い、野面糞遺跡（遺跡番号：久米町Na109）として周知し、以後の開発協議に備えることとした。（仁木）

第4章 試掘・確認調査

第1節 平成21年度（A～E地区）

はじめに

平成21年度の試掘調査は、調査対象地のうち最も面積の狭いB地区から着手した。その後、樹木伐採の完了したA地区→C地区→D地区→E地区的順に調査を進めた。調査期間は平成22年3月8日～3月31日、調査面積は合計約800m²である（第3図）。

A地区（対象面積4,260m²、調査面積230m²）

津山市と鏡野町を画する山から南東に延びるなだらかな丘陵の一部で、丘陵頂部東寄りに市境の道路が走る。対象地区に合計27本のトレンチを設定し、重機により掘削した。その結果、丘陵頂部の南半部、及びそこから少し下がったところで遺構が検出された。遺構は丘陵頂部付近で堅穴住居跡、土壙、柱穴を検出し、南側では浅い溝、近世墓等を検出した。遺物は上部器片、須恵器片、寛永通宝などが出土した。対象地区内の北半部では遺構は検出されなかつたため、地区の中央部から南側にかけて遺跡が存在すると考えられる。

B地区（対象面積195m²、調査面積30m²）

A地区のある丘陵から南西に短く延びる尾根の先端である。「キ」字形にトレンチを設定し、人力により掘削したが、表土を除去するとすぐに地山が表れ、遺構・遺物は検出されなかつた。

C地区（対象面積1,746m²、調査面積90m²）

B地区同様、A地区のある丘陵から南東側に延びる丘陵である。地区内に合計16本のトレンチを設定し、重機により掘削した。その結果、尾根の東側では遺構はなく、尾根の西側のトレンチ1箇所で遺構を検出し、土師器片が出土した。遺構はさらに谷に向かって延びているため、対象地区の東側を中心に遺跡の存在が推測される。

D地区（対象面積3,613m²、調査面積105m²）

A地区的丘陵から南側に延びる丘陵である。本地区はかつて弥生土器が出土していたことから、遺跡の存在が推測されていた。丘陵の裾部を中心に合計17本のトレンチを設定し、重機により掘削したところ、トレンチからは須恵器等が出土したため、裾部付近にまで遺跡が広がっていることが確認された。

E地区（対象面積5,254m²、調査面積345m²）

D地区の位置する丘陵の南西に接する丘陵である。本地区は野面窓遺跡として周知されていたが、発掘調査範囲確認のため合計40本のトレンチを設定し、重機により掘削した。

その結果、丘陵の中央から南にかけてのトレンチで遺構を確認し、土師器片や須恵器片などが出土した。

まとめ

工事予定地の5箇所のうち、B地区を除く4箇所で遺構が確認された。A・C・E地区については、遺構の検出状況や遺物の出土状況から、遺構の密度は低いと考えられる。A地区については、出土遺物から古墳時代及び近世の遺跡の存在が想定される。また、D地区からは過去に弥生土器の出土があることや、今回の調査により須恵器が出土していることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の存在が推測される。(豊島)

第2節 平成23・24年度（F・G地区）

はじめに

平成23・24年度においては、F地区及びG地区の試掘・確認調査を実施した。F地区及びG地区は、計画時には周知の遺跡は確認されていなかったが、事前の分布調査によって遺跡が所在する可能性があるとみなされた地点である。

調査期間は、平成23年度事業分として試掘調査を実施した。F地区が平成23年6月8日から平成23年7月29日、G地区が平成23年7月2日から平成23年9月20日である。また、平成24年度事業分として実施したG地区的確認調査が平成24年5月16日から7月2日である。以下、調査地点ごとに概要を報告する。

F地区（第1図、図版10～11）（対象面積4,300m²、調査面積918.2m²）

津山市と鏡野町を画する山塊から南東方向に伸びた尾根の頂部で、同じ山塊の最高位には目崎城がある。この城の主郭は鏡野町側にあるが、山塊の頂部が津山市との行政界であるため、津山市との境界に隣接する位置にまで関連するとみられる郭や堀切が所在する（註1）。

現地踏査の結果により、工事計画範囲の尾根上に堀切とみられる崖地状の地形や、山腹部分に並行した凹凸を示す地形がみられたことから城郭関連遺構の所在も考えられた。加えて、立木伐採後にいった踏査の際に新たに盛土とみられる高まりが確認された。この高



第1図 F地区トレンチ詳細図 (S=1/1,500)

まりは開発区域外であったが、開発区域に極めて近接し今後協議の対象となる可能性があるとみられたために併せて試掘調査の対象とした。ただし、面的な伐採は行っていない。

調査にあたっては、立木等の取り片付け後、尾根頂部の主軸上にトレンチを設定した。さらに、そのトレンチから等高線に直交する方向に 11 本のトレンチを配した。トレンチ幅は 2 m を基準としている。尾根上の窪地状の地形についてはサブトレンチにより精査した。また、山腹の凹凸部分については別に 1 本トレンチを設定し、盛土状の高まりについては 4 本のトレンチを直交するよう設定した。

発掘作業は基本的にバックホウを使用して表土掘削を行い、作業員による精査を行ったが、盛土状の高まりについては全て人力で掘削作業を行っている。

調査の結果、尾根鞍部の窪地状の地形については人工的な改変ではなく、鞍部を道として利用したことによって形成された自然地形であることが判明した。また、山腹の凹凸状の地形については人工的な改変であることが判明したが、検出状況から遺構ではないと判断された。何れのトレンチからも遺物は出土しなかった。

G 地区（平成 23 年度）（第 2 図、図版 10 ~ 11）（対象面積 2,140 m²、調査面積 404 m²）

G 地区は、F 地区南側の独立丘陵上にあり、北を辰尾池奥の谷によって画される。地元では具体的な場所を指さないながらも、「城山」と称されていた。この地区では、分布調査によって墳墓状の高まりが 2か所確認されていたことから、その性格の把握を主目的とした。併せて、地元での呼称等から城郭関連遺構についても考慮している。調査対象面積は、当初約 4,800 m²を見込んでいたが、現地踏査の結果 2,140 m²を試掘調査対象面積とした。

調査は、F 地区と同時期に伐採が行われていたため既に伐採済みの状態であったことか



第 2 図 G 地区トレンチ詳細図 (S=1/1,000)

らF地区の調査と並行して適宜調査準備を行い、F地区発掘作業終了後に機材を移転して7月2日から着手した。2か所の墳墓状の高まりについては、3本ないし4本のトレーナーを直交して設定し、人力による掘り下げと精査を実施した。その他の遺構については尾根の主軸上と、等高線に直交するように9本のトレーナーを設定して重機で表土を排土し、のち人力で掘り下げて精査を行った。また、遺構が確認された部分については遺構の広がりを把握するため部分的に周辺を拡張した。

試掘調査の結果、墳墓状の高まりについては即地形に伴う残丘であることが判明した。遺物の出土も皆無である。また、北側の墳墓想定位置付近の頂部からわずかに北向きに下った斜面において、弥生時代に属する貯蔵穴とみられる遺構を確認した。遺物は、弥生時代後期に属する土器片が出土した。

G地区（平成24年度）（第2図）（対象面積2,060m²、調査面積135m²）

平成23年度調査においてG地区において遺構の確認された位置は、丘陵頂部の平坦面の北端であり、南に向かって緩やかに下降する窪地状の平坦面が広がっていた。このため、遺跡範囲を確定することを目的として、平成24年度において南側に新たに11本のトレーナーを設定して確認調査を行った。結果、遺構は確認されず遺物も認められなかつたことから、南側には遺跡は分布しないことが明らかになった。

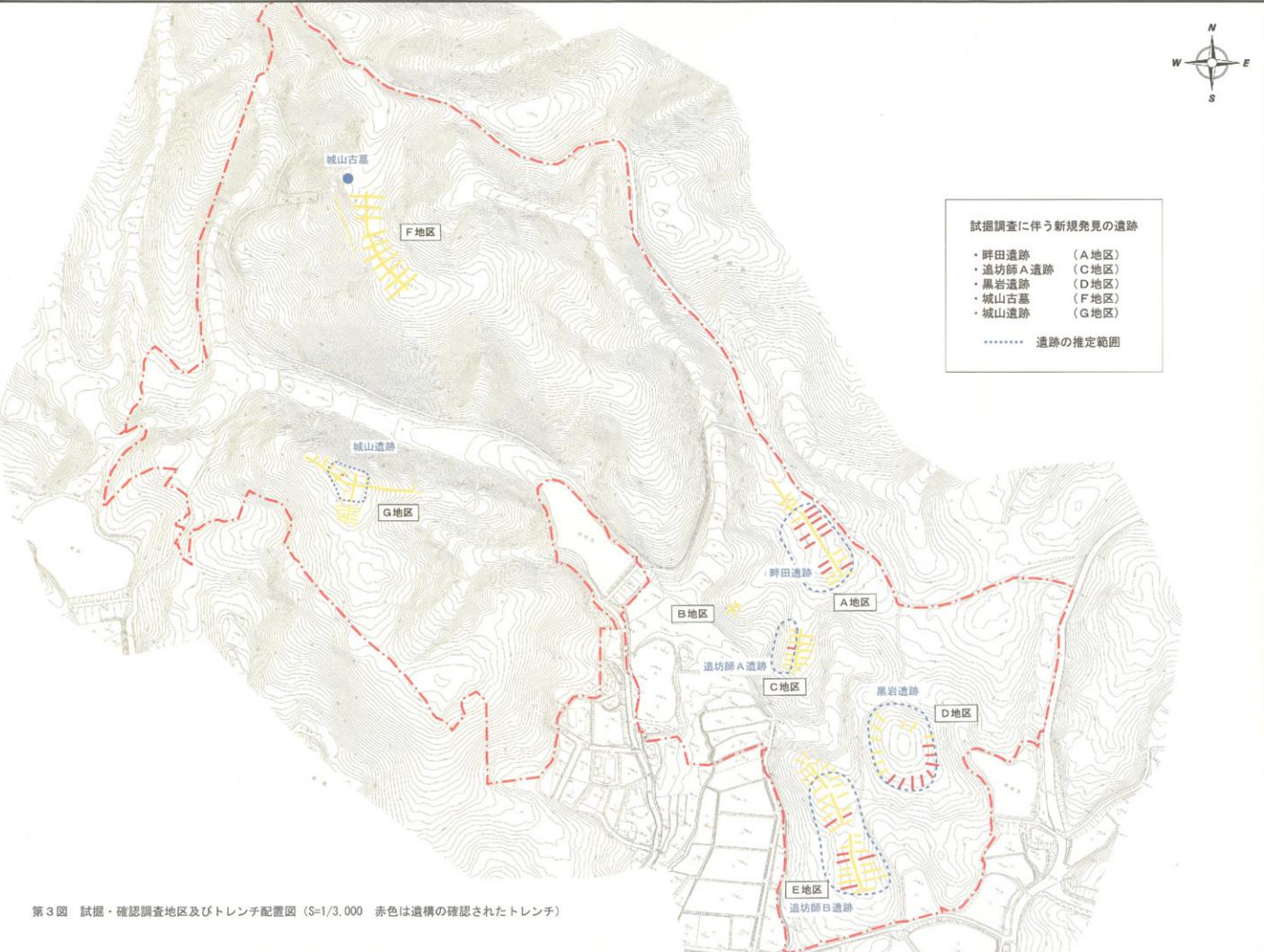
まとめ

平成23年度の試掘調査の結果、F地区においては、開発協議対象となる埋蔵文化財は当該位置には存在しないことが判明した。

また、伐採後に確認された高まり部分については、径5m、高さ0.8mのほぼ円形のプランを示す盛上遺構であることが判明した。裾部に周溝等は確認されなかつたが、一部に集石が認められ、その部分から若干の土師質土器片が出土した。のことから、遺跡名称を「城山古墳」として遺跡発見の手続きをとっている。現状と出土遺物からみて、墳墓的な性格を持つ遺構であると考えられる。

G地区については、当初想定された古墳は確認されなかつたものの、弥生時代の遺構が存在することが明らかになった。確認された新規遺跡は、名称を「城山遺跡」として遺跡発見の手続きを行った。この遺跡については、造成計画範囲内に位置しており、設計変更ができないことから発掘調査が不可避であった。このため、平成24年度に追加して確認調査を実施し、遺跡範囲を画定したうえで全面調査を実施することとなつたが、確認調査により遺跡の広がりが認められなかつたため、平成23年度調査において遺構が確認された頂部一帯の約950m²を発掘調査の対象とすることが確定した。（仁木）

（註1）分布調査時に確認された。行政界を画す林道の銚子町側に隣接し、堀切及び郭面が残る。林道を挟んで尾根を津市側（南）に進めば、F地区の試掘調査地点である。ただし、目崎城との関連については検討が必要である。



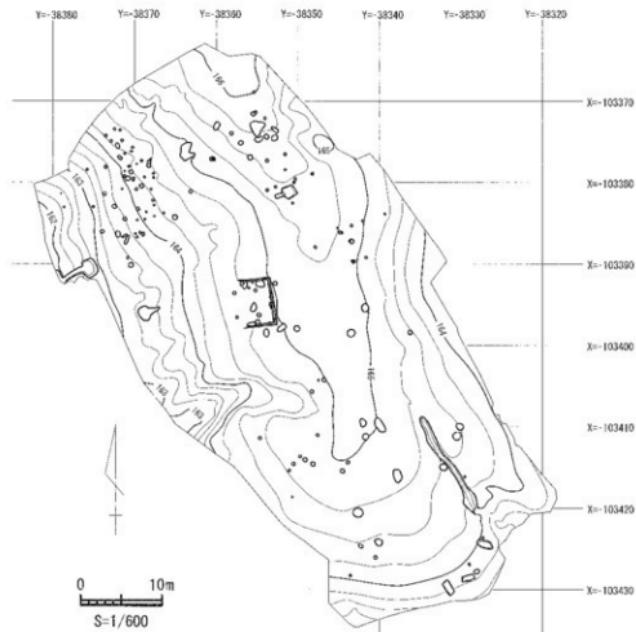
第5章 畠田遺跡

第1節 遺跡の概要

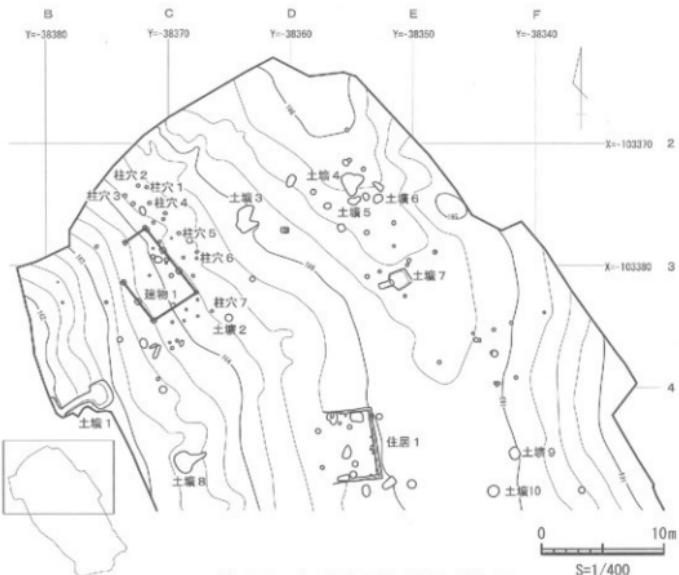
畠田遺跡は、津山市領家1411-1ほかに所在し、約30haの新クリーンセンター建設予定地北辺の南東方向にのびる丘陵上に位置している。遺跡の範囲の標高は約162～166mである。

遺構は、調査区北西部において、掘立柱建物1基、貯蔵穴2基及び複数の土壙を検出し、特に土壙1とした貯蔵穴からは、多くの弥生時代後期の土器が出土した。調査区中央部では古墳時代の住居跡1基を検出し、調査区南部では明治期の墓1基、時期は不明であるが上墳墓3基を検出した。ただし、検出できた遺構の数は多くなく、しいて言えば調査区北西部に遺構が密に存在している。

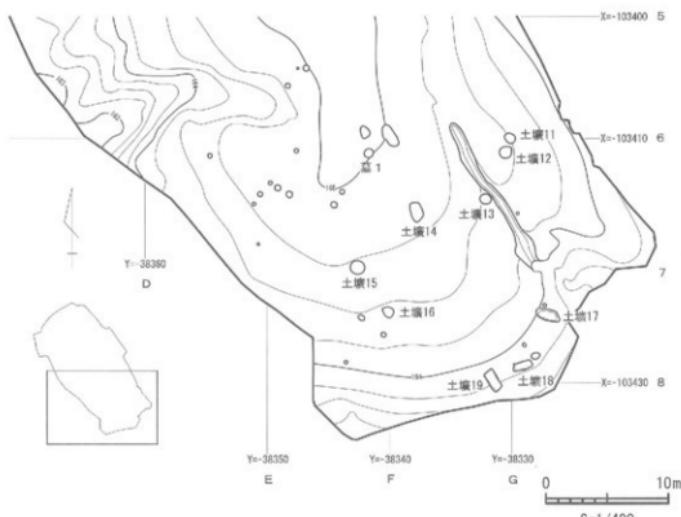
なお、本調査区内において、複数の柱穴を検出しているが、遺物の出土した柱穴のみ番号を付し、その他のものは第2図及び第3図の遺構配置図において位置のみを示した。また、これらの柱穴から出土した遺物のうち図示できるもののみを掲載している。(平井)



第1図 畠田遺跡全体図



第2図 畑田遺跡遺構配置図（北部分）

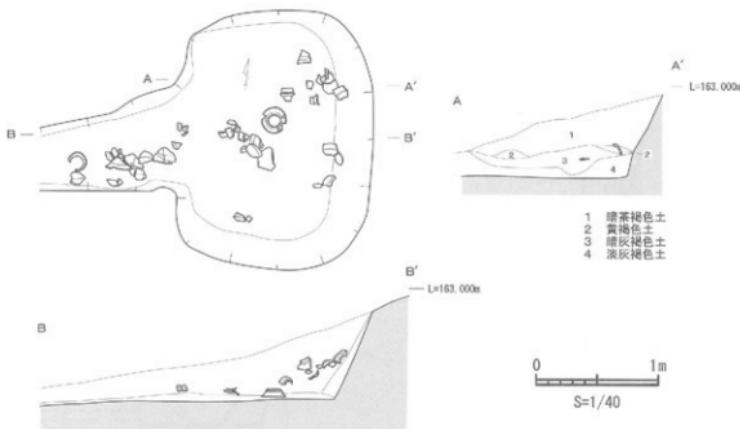


第3図 畑田遺跡遺構配置図（南部分）

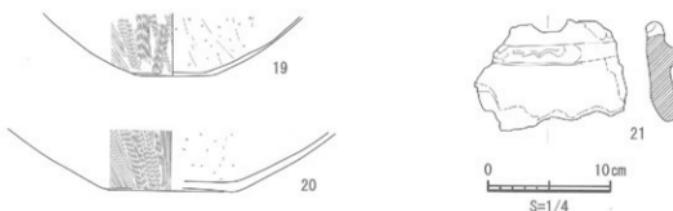
第2節 検出された遺構と遺物

土壤1（第4・5・6図）

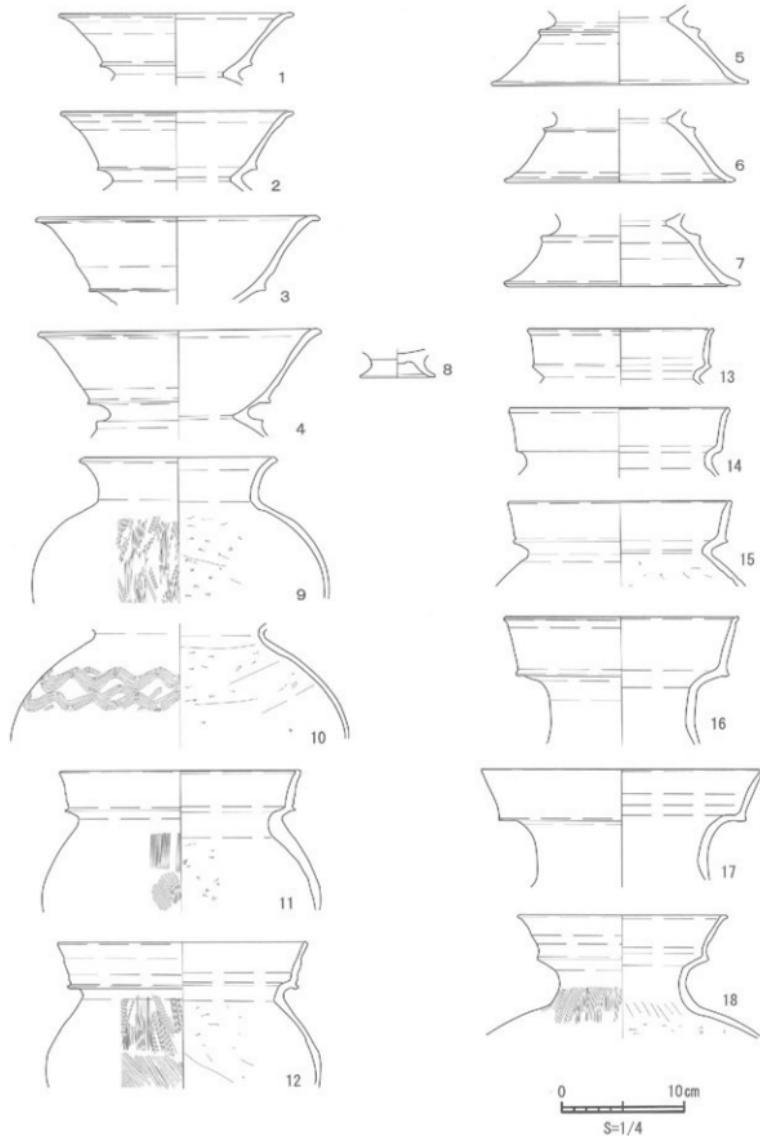
4B区に位置し、平面形は213cm×162cmを測る隅丸方形を呈し、また、土壤西側中央付近から調査区西辺に向かって幅80～60cmの溝状に遺構がのびている。検出面からの深さは、土壤が西に向かってかなり削平されているため、最深部で70cm、最浅部で15cmを測る。遺物は床面より10～20cmほど上の第3層より上から多く出土している。鼓形器台1～7、このうち5は床面上から出土している。低脚壺8、甕9～15、10は肩部に波状文を施す。壺16～18、壺もしくは甕の底部19、20、器台21は上下2つの円孔があり、突帯には波状文を施す。土器の特徴から弥生時代後期後葉のものであろう。



第4図 土壌1



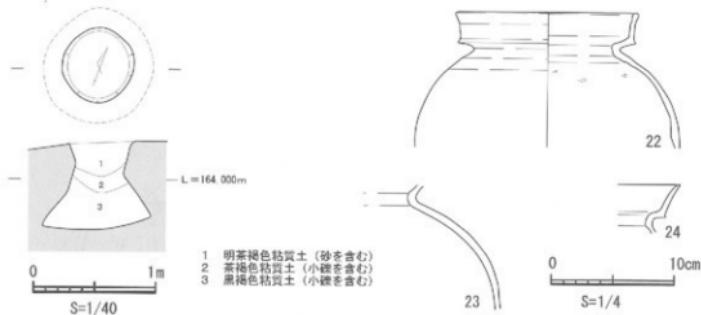
第5図 土壌1出土遺物



第6図 土壌1出土遺物

土壤2（第7図）

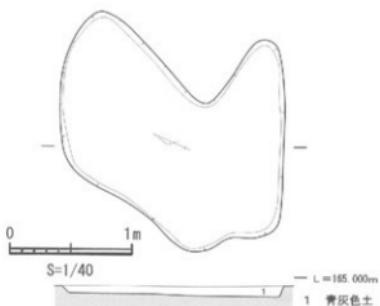
3C区に位置し、平面形は長軸95cm×短軸90cmで、ほぼ正円形を呈している。検出面からの深さは、69cmを測り、土壤断面は袋状を呈する。遺物は床面付近より22~24の壺が出土している。その他土器片が出土しているが、いずれも極小破片のため図示することができなかった。この土壤の時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。



第7図 土壤2・出土遺物

土壤3（第8図）

2C区に位置し、平面が205×108cmと163×60cmの2つの土壤が重なり合っていると考えられる土壤である。上層観察等からは、遺構の前後関係は不明。遺物は、極小破片のため図示できないが、須恵器が数点出土している。



第8図 土壤3



第9図 土壤4

土壤 4 (第 9 図)

2 D 区に位置する。西側から①(182×104 cm) と②(不明 $\times 88$ cm) の 2 つの土壤が重なり合っていると考えられる土壤である。遺構の切りあい関係から①が新しく②が古いことが分かるが具体的な時期差については不明。極小破片のため図示できないが、埋土から須恵器片及び土師器片を出土している。

土壤 5 (第 10 図)

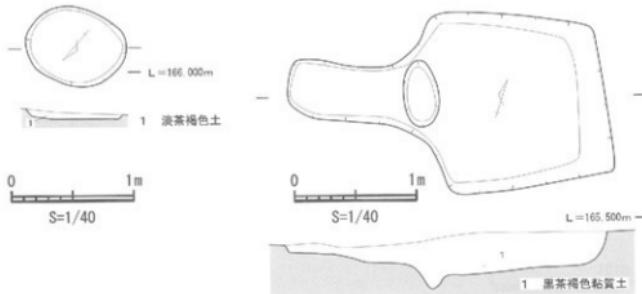
2 D 区に位置する。西側から①(60×80 cm) と②(45×90 cm) の 2 つの土壤が重なり合っていると考えられる土壤である。遺構の切りあい関係から①が古く②が新しいことが分かるが具体的な時期差については不明。出土遺物は埋土から 25 が出土している。弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭にかけて埋没した土壤であろう。



第 10 図 土壌 5・出土遺物

土壤 6 (第 11 図)

2 D 区に位置する。平面形は 80×64 cm の梢円形を呈し、検出面からの深さは、5 cm を測る。遺物は、埋土から土器片 1 点が出土しているが、極小片のため図示できず、時代等明らかにすることはできないが、弥生時代のものであろう。

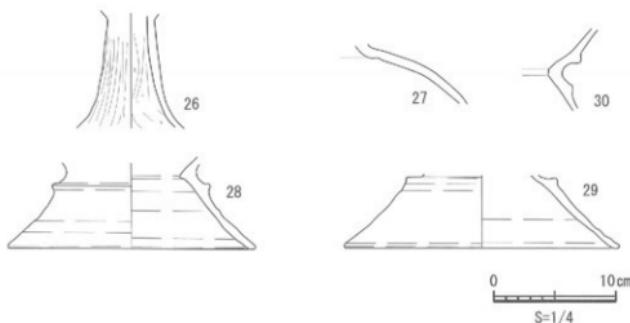


第 11 図 土壌 6

第 12 図 土壌 7

土壤7（第12・13図）

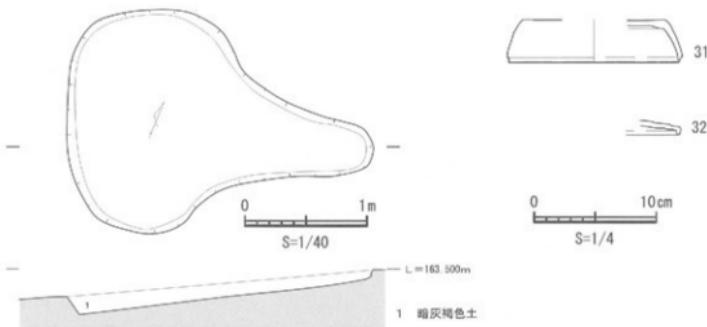
2D区に位置する。平面形は263×145cmの方形の有柄形をし、検出面からの深さは、32cmを測る。ただし柄形の部分は、深さ6~15cm程度である。遺物で図示できるものは、26~30の5個体で、いずれも埋土から出土している。26は高壺の脚部分、27は壺もしくは壺の胴部である。28~30は鼓形器台で内面上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ、外面はナデを施す。弥生時代後期後葉のものと考えられる。



第13図 土壌7出土遺物

土壤8（第14図）

4C区に位置し平面形は252×181cmの不定形の土壤である。検出面からの深さは、15cmを測る。遺物は埋土から須恵器の蓋31,32が出土している。出土遺物の特徴から、奈良時代初頭のものであろう。



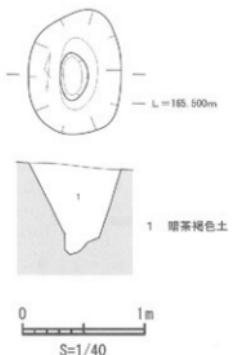
第14図 土壌8・出土遺物

土壤9（第15図）

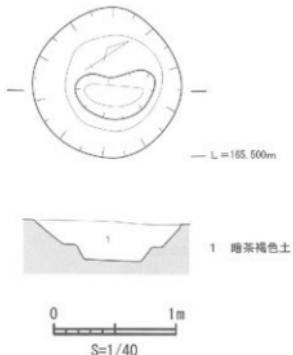
4 E区に位置し、平面形は $103 \times 76\text{ cm}$ の楕円形を呈する。検出面からの深さは 76 cm を測る。土壌の断面形は逆三角形を呈し、検出面より約 60 cm 下のところに段を有する。 76 cm の深さがあるにもかかわらず、土層観察では分層できず、一度に埋まったものと考えられる。出土遺物はなく、遺構の時期、性格等は明らかにできなかった。

土壤10（第16図）

4 E区に位置し、平面形は $92 \times 91\text{ cm}$ の正円形を呈する。深さは、検出面から 25 cm を測る。検出面から 15 cm 下の部分に段を有する。遺物の出土はなく、遺構の時期や性格は明らかにできなかった。



第15図 土壌9



第16図 土壌10

土壤11（第17図）

5 F区に位置し、平面形は $89 \times 80\text{ cm}$ の円形を呈する。検出面からの深さは 10 cm を測る。土壌内西側には、径 15 cm 、深さ 20 cm のピットを有する。出土遺物はなく時期等は不明。

土壤12（第18図）

6 F区に位置し、平面形は $106 \times 95\text{ m}$ の不整形な円形を呈する。検出面からの深さは 11 cm を測る。土層はいわゆるレンズ状の堆積をしており、出土遺物がなく時期は不明であるが、自然に埋没していったものと考えられる。

土壤13（第19図）

6 F区に位置し平面形は $92 \times 81\text{ cm}$ の円形を呈する。検出面からの深さは 17 cm を測る。土壌床面北側に径約 30 cm 、深さ 8 cm の窪みがある。出土遺物はなく時期は不明。



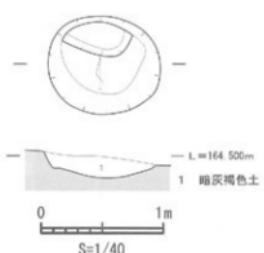
第17図 土壌11



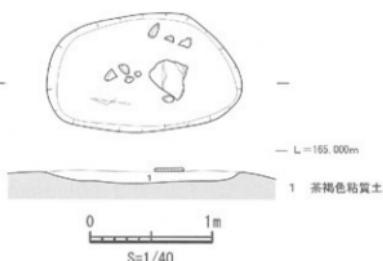
第18図 土壌12

土壌14（第20図）

6F区に位置し、 160×99 cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは、9 cmを測る。土壤中央部や南側に約 30×30 cm、厚さ2 cmの石があり、また、周辺には10 cm角の石数個を検出した。これらの石が、本来この面に据えられたものなのか、落ち込みによるものなのかは、検出状況等では判断できなかった。出土遺物はなく時期や遺構の性格については不明。



第19図 土壌13



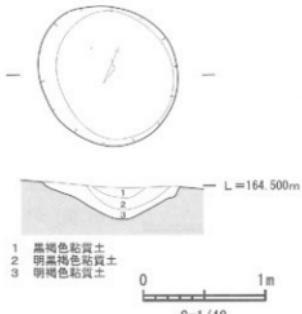
第20図 土壌14

土壌15（第21図）

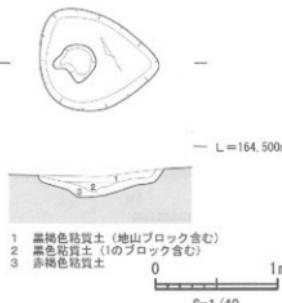
7E区に位置し、 113×113 cmの円形を呈する。検出面からの深さは、26 cmを測り、土壤の形態はすり鉢状をしている。土器等出土遺物がなく、時期等は明確にできないが、検出時の状況から、比較的新しい時期のもの（明治時代以降）と考えられる。

土壌16（第22図）

7F区に位置し、平面形は 98×87 cmの不整形な円形を呈する。検出面からの深さは18 cmを測る。土壤の形態は、すり鉢状をしており、土器等遺物の出土はない。土壤15と形態がよく似ており、これと同じ性格の土壤と考えられる。



第 21 図 土壌 15



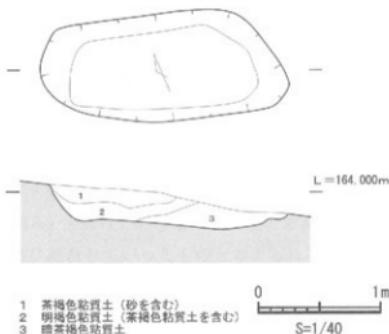
第 22 図 土壌 16

土壤 17 (第 23 図)

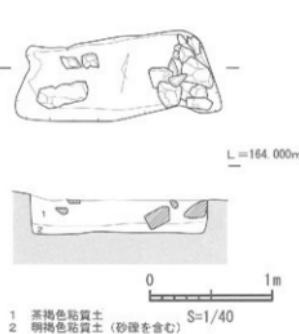
7 G 区位置し、平面形は 203×89 cm のやや不整形であるが、隅丸方形を呈し、検出面からの深さは、27 cm を測る。土壤墓の可能性が考えられるが、検出過程や土層観察からは、土壤の性格を知る手掛かりは得られず、土器等遺物の出土もないため、土壤墓の可能性があることを示すのみとする。

土壤 18 (第 24 図)

7 G 区に位置し、平面形は 155×68 cm のやや不整形であるが隅丸方形を呈する。検出面からの深さは、33 cm を測る。土壤西側の隅と東側において石を検出しておらず、土壤間に置かれたものについては、検出した状況から棺台として利用されたものと推測され、また、東側のものについては、墓標的な意味で土壤上に配されたものが棺の腐朽とともに土壤内に落ちたものであろう。土器等の遺物の出土はなく時期は明らかではないが、土壤墓と考えられる。



第 23 図 土壌 17



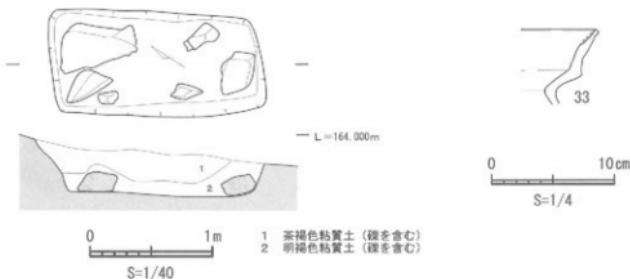
第 24 図 土壌 18

土壤 19（第 25 図）

7F 区に位置し、平面形は 175×86 cm の方形を呈する。検出面からの深さは、33 cm を測る。床面からは、棺台に利用されたものと考えられる数個の石を検出しており、また、周辺の状況から土壤墓と考えられるが、出土遺物はなく、時期は不明。

柱穴 1～7（第 26 図）

出土遺物から弥生時代のものと考えられる小穴が特に建物 1 付近に集中している。しかし、大きさや深さは一様ではなく、すべてが柱穴とは考えられないが、土器が出土したものを作柱として取り上げた。柱穴 6 から出土した 33 のみが図示できたが、他は極小破片のみで図示できなかった。柱穴 6 は弥生時代後葉のもの、その他の柱穴については年代は不明。



第 25 図 土壤 19

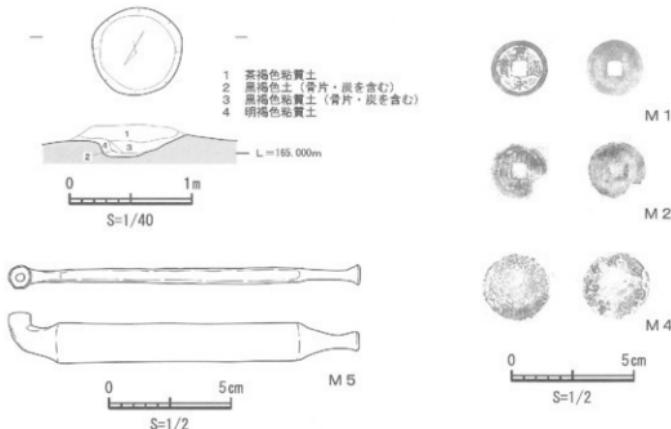
第 26 図 柱穴 6 出土遺物



挿図写真 1 住居 1 作業風景（北から）

墓 1 (第 27 図)

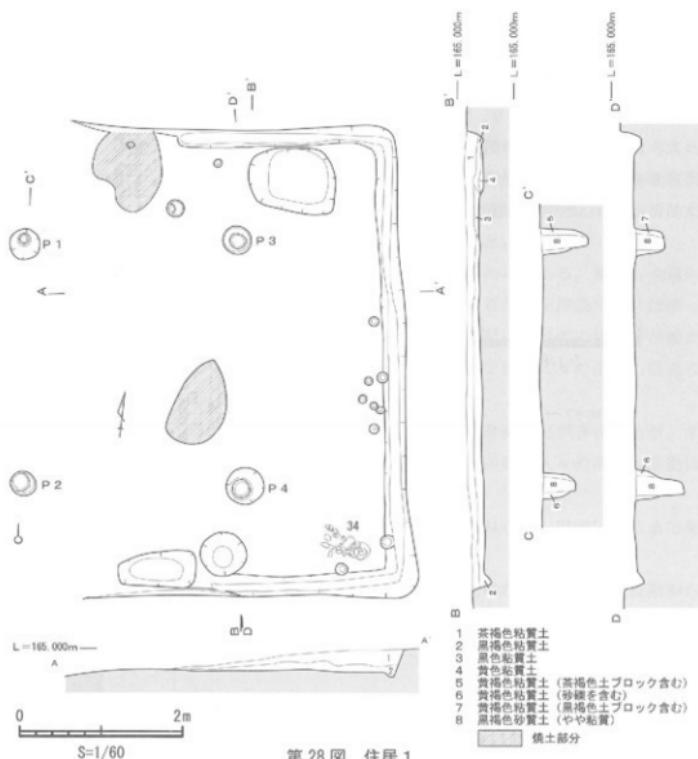
6 E 区に位置し、平面正円形の土壙である。規模は径 74×73 cm、深さは検出面より 24 cm を測る。出土遺物は埋土 3 より寛永通宝 2 枚 M 1、M 2、銭文は不明の錢貨 M 3、錢貨表面が剥落し年号を読み取ることができないが、明治 6 (1873) 年から明治 21 (1888) 年にかけて発行された 1 銭銅貨 M 4 及び吸口・雁首およびその両者をつなぐラウが一体で作られている煙管 M 5 が出土している。また、極小片の入骨が少量出土している。出土品から、明治 6 年以降に作られた墓である。



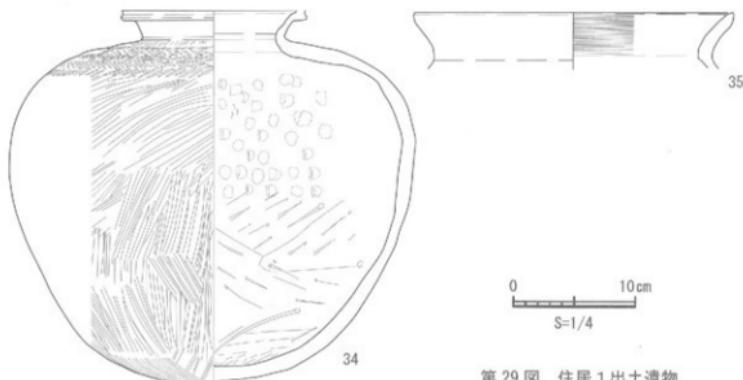
第 27 図 墓 1・出土遺物

住居 1 (第 28・29 図)

4 D 区に位置する。住居の規模は、西側部分が流失しており、東西の規模は明らかにできないが、南北に 578 cm で平面形は方形を呈する。深さはもともと残りの良い住居東側で約 30 cm を測る。住居中央部東寄りと北壁沿いに赤褐色の焼土面を検出した。柱穴は 4 本で構成され、柱間の距離は南北方向 (P 1-P 2, P 3-P 4) が約 300 cm、東西方向 (P 1-P 3, P 2-P 4) が約 270 cm を測る。柱穴の規模は 35 ~ 45 cm の平面が円形を呈しており、深さは検出面から約 40 ~ 60 cm を測る。また、住居の壁際には幅約 25 cm、深さ約 10 cm の壁体溝を検出している。この壁体溝は住居中央部から西にかけては地形の流失により検出できなかったが、本来は住居壁沿いに壁体溝がめぐっていたと考えられる。出土遺物は、極小破片が多く図示できたのは 34 と 35 である。34 は、住居南東隅に床面よりやや浮いた状態で検出をした。欠損しているものの有段口縁を持つ壺で、肩部に綾杉文を 2 段施している。また、この部分に円形のスタンプ文を施している。頸部は内外面ともにヨコナデを施し、胴部内面の上半部は指頭圧痕がみられ、下半部はヘラケズリを施している。外面はハケを施す。当地周辺にこのような土器は見られず⁹、山陰地方に類似の上器が見られ、古墳時代中期前葉ころのものとされていることから、このころのものであろう。



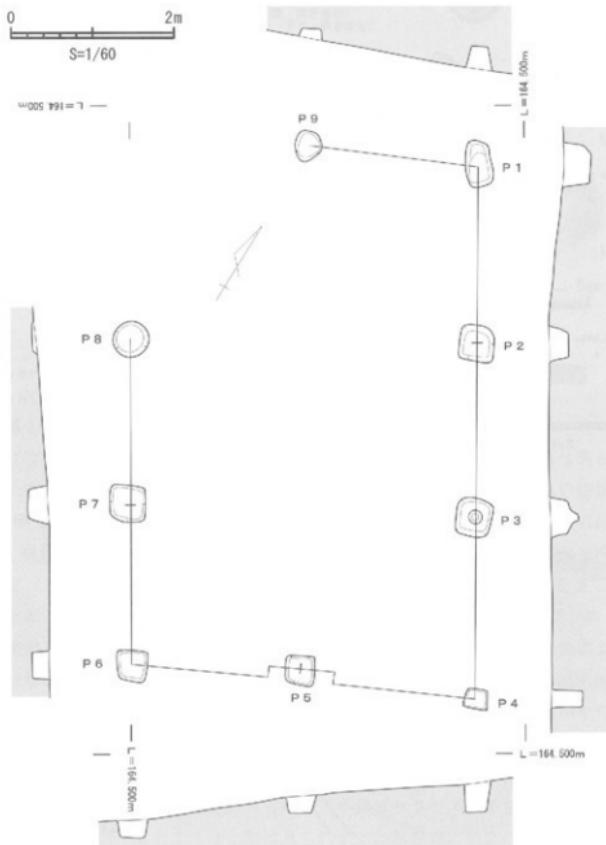
第28図 住居1



第29図 住居1出土遺物

建物 1 (第 30 図)

3B 区北東部を中心とする場所に位置する。建物北西部は地形が流失しているため、一部柱穴が検出できない等不明な部分はあるが、桁間 3 間 × 梁間 2 間の規模である。桁行は 653 cm、梁行は 423 cm を測り、柱間の距離が桁行で 223 cm～213 cm、梁行で 217 cm～207 cm であった。床面積は約 28 m² である。棟は N-31°-W を向く、柱穴の掘方の平面形は、大部分が方形を呈しており、規模は一边が、27～45 cm に収まる。P 7 からは土師器と須恵器が出土している。しかし極小破片で明確な時期は特定できないが、古代に属するものであろう。



第 30 図 建物 1

第3節　まとめ

今回、調査した畔田遺跡の弥生時代の遺構で、主なものは後期後葉の貯蔵穴と考えられる土壙数基のみである。他に住居等の検出はない。これらの土壙を検出した遺跡北西部の地形がかなり流出しているという原因もあるのであろうが、遺構、遺物ともに局所的にしか検出されておらず、人々の営みはかなり稀薄な状況であった。

これに継ぐ古墳時代の主な遺構は単独で検出された住居跡のみである。遺物も少量の出土にとどまっており、これらのことから古墳時代においても集落域を形成するには至っておらず、また、周辺では、領家遺跡から6世紀後半から7世紀にかけての住居跡が検出されているものの他には目立った集落遺跡はなくこの周辺地域では、人々の活動も活発なものではなかったようである。

古代においても、周辺では、領家遺跡、久米庵寺及び宮尾遺跡などが存在するが、本遺跡では掘立柱建物1棟のみの検出で他に遺構もなく前時代と同様、人々の活発な活動は感じられない。

こののち、畔田遺跡では、目立った遺構遺物は検出されておらず、現在に至るまで集落域が形成されることとなかった。

このようなことから畔田遺跡は、かなり限定された土地利用ながら弥生時代後期から古代にかけての集落遺跡であると考えていいだろう。(平井)

参考文献

- 「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
- 「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4 岡山県教育委員会 1973
- 「久米庵寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4 岡山県教育委員会 1973
- 「坂下門前遺跡2 坂長ヨコロ遺跡 坂長熊谷遺跡」『鳥取県教育文化財団調査報告書』114 財団法人鳥取県教育文化財団 2010
- 「長瀬高浜遺跡Ⅱ 国第6遺跡」『鳥取県教育文化財団調査報告書』61 財団法人鳥取県教育文化財団
建設省倉吉工事事務所 1999

表1 畦田遺跡遺構一覧表

土壙

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙1	有肩方形	213	162	70	弥生時代後期後葉	
土壙2	円形	95	90	69	弥生時代後期後葉	台状土壙
土壙3	不定形			7		2つの土壙が重なる
土壙4	不定形			14		2つの土壙が重なる
土壙5	不定形			7	弥生時代後期後葉	2つの土壙が重なる
土壙6	稍円形	80	64	5		
土壙7	有肩方形	263	145	32	弥生時代後期後葉	
土壙8	不定形	252	181	15	奈良時代初期	
土壙9	梢円形	103	78	76		
土壙10	円形	92	91	25		
土壙11	円形	89	89	19		
土壙12	円形	106	95	11		
土壙13	円形	92	81	17		
土壙14	稍円形	109	99	9		
土壙15	円形	113	113	26		
土壙16	不規方形	98	87	18		
土壙17	隅丸方形	203	89	27		
土壙18	隅丸方形	153	68	33		
土壙19	方形	175	86	36		

柱穴

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
柱穴1	円形	25	24	34		
柱穴2	円形	25	21	29		
柱穴3	円形	32	30	17		
柱穴4	円形	33	32	32		
柱穴5	円形	28	25	25		
柱穴6	円形	21	19	35	弥生時代後期後葉	
柱穴7	円形	22	22	50		

墓

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
墓1	円形	74	73	24	明治時代	

整穴住居

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	床面積(m ²)	柱穴	柱間距離(cm)	焼土面	壁体構	時期	備考
住居1	方形	578		1	4	306~262	有	有	古墳時代中期前葉	

獨立柱建物

遺構名	棟構	柱間距離(cm)	桁行	梁行	面積(m ²)	袖方向	時期	備考
建物1	3×2	223~213	217~207	663	423	26	N-31°-W	古代

表2 畦田遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名	器種	計測値(cm)	寸法	色調	形態・手法の特徴	備考
1	土壙1	鼓形縁台	(19.0)	口径 底径 器高	褐色	内側：ヨコナデ 外側：ヨコナデ	
2	土壙1	鼓形縁台	(18.7)		淡黄褐色	内側：ヨコナデ 外側：ヨコナデ	
3	土壙1	鼓形縁台	(23.0)		淡黄褐色	内：ナデ 外：ヨコナデ	
4	土壙1	鼓形縁台	(23.0)		明黄褐色	内：ナデ 外：ヨコナデ	
5	土壙1	鼓形縁台		21.0	褐色	内側：ヨコナデ 外側：ヨコナデ	
6	土壙1	鼓形縁台		(18.4)	にい黄褐色	内：ナデ 外：ヨコナデ	

7	土壤1	筑形器台	(19.0)	にぶい黄褐色	内：ナグ 外：ヨコナグ
8	土壤1	低脚杯	6.2	黄褐色	内外：ヨコナグ
9	土壤1	甕	(16.0)	褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ ナグ
10	土壤1	甕		褐色	内：ヘラケズリ カ：ヨロナグ
11	土壤1	甕	(19.0)	にぶい褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ カ：ナグ
12	土壤1	甕	(20.0)	褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ ナグ
13	土壤1	甕	(15.0)	明黄褐色	内外：ヨコナグ
14	土壤1	甕	(18.0)	褐色	
15	土壤1	甕	(17.0)	黄褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ
16	土壤1	甕	(19.0)	黄褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ ナグ
17	土壤1	甕	(22.0)	褐色	
18	土壤1	甕	(17.0)	褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ ナグ
19	土壤1	甕	(7.0)	褐色	内：ヘラケズリ 外：ハケ
20	土壤1	甕	(10.0)	明黄褐色	内：ヘラケズリ 外：ハケ
21	土壤1	器台		褐色	外：ナグ
22	土壤2	甕	(14.0)	にぶい黄褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ
23	土壤2	甕		褐色	内：ヘラケズリ 外：ハケ
24	土壤2	甕		明黄褐色	
25	土壤5	甕		明赤褐色	内：ヘラケズリ 外：タタキ
26	土壤7	高环		明黄褐色	内：ヘラケズリ 外：タタキ
27	土壤7	甕		明黄褐色	内：ヘラケズリ 外：ヨコナグ
28	土壤7	筑形器台	(20.0)	明黄褐色	内：ヘラケズリ 外：ヨコナグ
29	土壤7	筑形器台	(22.0)	明黄褐色	内外：ヨコナグ
30	土壤7	筑形器台		明黄褐色	内：ヨロナグ 外：ヘラケズリ ナグ
31	土壤8	盖	(14.0)	灰白色	内外：ヨコナグ
32	土壤8	盖		青灰色	内：ヨコナグ
33	柱穴6	甕		暗褐色	内：ヨコナグ
34	住居1	甕		明黄褐色	
35	住居1	甕	(26.0)	黄褐色	内：ハケ 外：ヨコナグ

金属製品

掲載番号	査定名	断面	材質	計測値 (cm)・重さ (g)			時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
M1	基1	鉢底	銅	2.34		0.12	1.5	18世紀
M2	基1	鉢底	銅	2.32		0.1	1.0	18世紀
M3	基1	鉢底	銅			0.14		
M4	基1	鉢底	銅	2.76		0.17	4.5	明治6年 (1873) ~ 明治21年 (1888) 発行
M5	基1	キセル	銅	14.38	1.45	0.58	27.5	1枚目

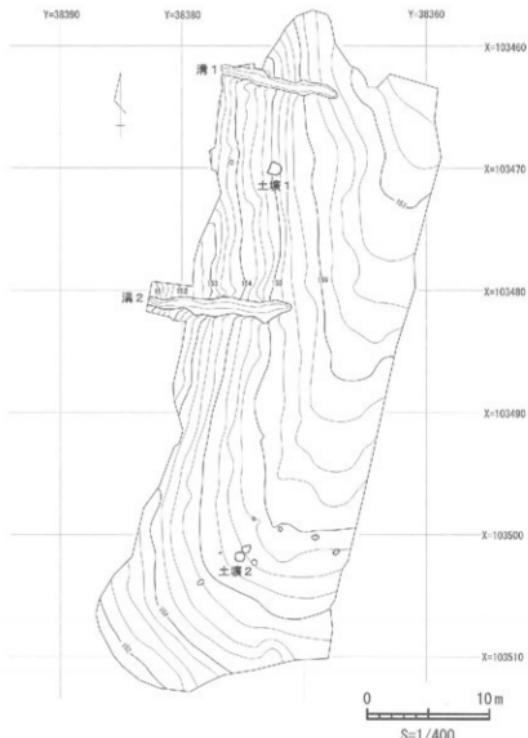
第6章 追坊師A遺跡

第1節 遺跡の概要

追坊師A遺跡は、津山市領家 1378-1 に所在し、新クリーンセンター建設予定地北辺から南東にのびる丘陵上に位置する畠田遺跡あたりから南に派生する尾根の西側斜面に位置する。

遺跡の範囲の標高は約 151 ~ 158m である。遺構は、東から西に向かう溝 2 条と土壙 2 基を検出しているのみであり、検出できた遺構は多くない。

なお、他に数基の土壙及び柱穴と思われるものを検出しているが、遺物等の出土がなく詳細は不明である。これらのものは、第 1 図の遺構配置図に位置のみを記している。(平井)



第 1 図 追坊師 A 遺跡遺構配置図

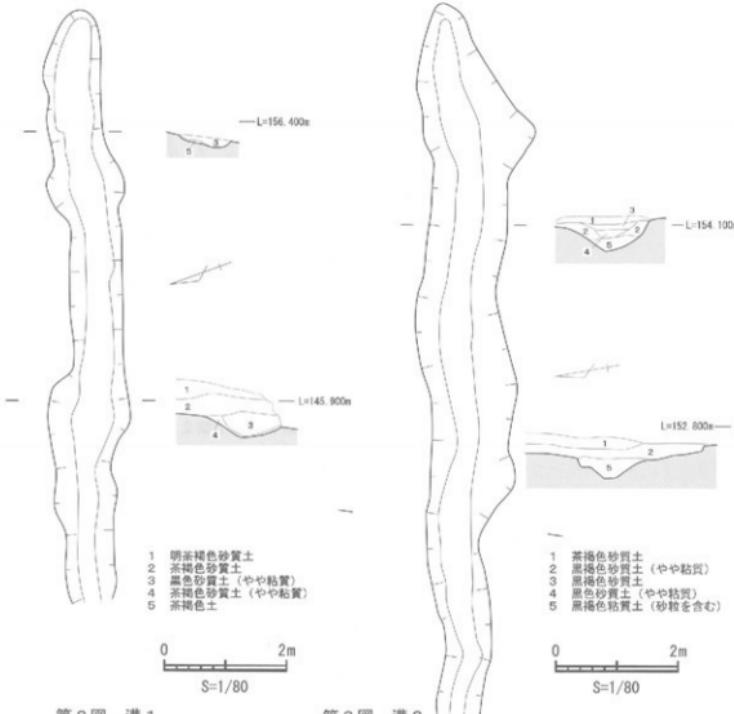
第2節 検出された遺構と遺物

溝1（第2・4図）

調査区北辺に位置し、溝は東西に流走している。溝の幅は、70～130 cmを測り、深さは5～55 cm程度残存していた。埋土は、基本的に単層である。遺物は1の甕が1点のみ出土しており、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

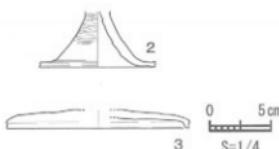
溝2（第3・5図）

調査区中央部に位置し、溝は東西に流走している。溝の幅は64～150 cmを測り、深さは、8～24 cm程度残存していた。埋土は、基本的には2層に分けることができる。また、上層の状況から具体的な年代は不明であるが、一度埋没した溝の掘り直しが行われていたことが分かった。遺物は埋土から、2の高坏、3の坏蓋が出土しており、7世紀後半から8世紀前半に比定される。





第4図 溝1出土遺物



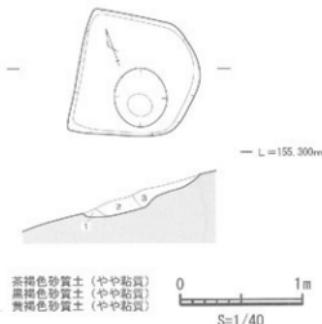
第5図 溝2出土遺物

土壤1（第6図）

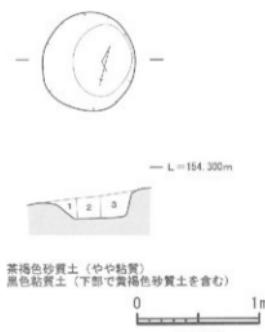
調査区北側の西斜面に位置し、平面形は径約100cmの不定形の土壌である。検出面からの深さは、12cmを測る。また床面南側に径40cm深さ10cm程度のくぼみがある。出土遺物がなく時期等の詳細は明らかにできなかった。

土壤2（第7図）

調査区南側の斜面に位置し、平面形は75×80cmの円形を呈する。検出面からの深さは18cmを測る。土層の観察から柱抜取痕の存在も考えられる。ただし、同様の土壌を周辺で検出することができず、詳細は不明。出土遺物もなく時期等も明らかにできなかった。



第6図 土壌1



第7図 土壌2

第3節 まとめ

今回調査した調査区は、西に向かう急な斜面上に位置しており、検出できた遺構のうち時期が推定できる溝1は弥生時代後期中葉で、溝2は7世紀後半から8世紀前半のものであるが、その他に目立った遺構は検出されず、そのため、各遺構どうしの関連や、各時期における様相などの詳細を明らかにすることができなかった。（平井）

表1 追坊師A遺跡遺構一覧表

清

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	床面幅 (cm)	深さ (cm)	床面標高 (m)	時期
床1	筒の底形	70~130	25~55	3~55	155~150	弥生時代後期牛集
床2	蓬台形	64~130	28~65	3~55	155~153	7世紀後半から8世紀前半

土壙

遺構名	平面形	長軸 (cm)	延長(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙1	不定形	100	100	12	-	-
土壙2	円形	80	75	18	-	-

表2 追坊師A遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名	系樹	計測値 (cm)		色調	形態・手辺の特徴	備考
			口径	底径			
1	清1	丸			浅黄褐色	内：ヘリコナデ 外：セイシガラ 合口目無	
2	清2	両耳		(9.4)	にじい褐色	内：ロコナデ 外：カキ目	
3	清2	片耳		(14.8)	灰白	内外：ロコナデ	

第7章 黒岩遺跡

第1節 調査の概要

1. はじめに

黒岩遺跡は、津山市領家の北西からのびる標高159mの丘陵上に位置する遺跡である。丘陵は、北西から南西方向に向かってなだらかにのびており、頂上から北東にかけては大きく削平を受けているため急傾斜になっている（第1図）。

この丘陵は、1997年に開発予定があり、丘陵頂部を中心として十字にトレンチを設定し、試掘調査を実施した経緯がある。その際、トレンチ内から弥生時代後期後葉の土器が多数出土したことから、この丘陵上には弥生時代の墳墓群が存在すると推測されていた（1997年試掘調査時の出土遺物については、第2節で記述する）。

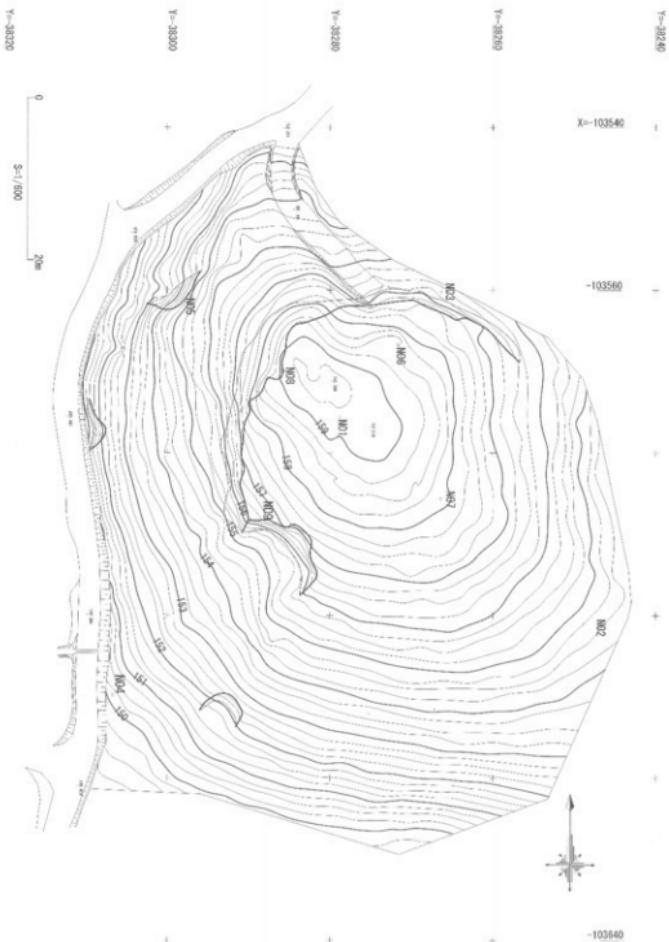
今回、クリーンセンター建設に伴い、黒岩遺跡の存在する丘陵全体が再び開発行為の対象となつたため、事前に全面調査を実施する運びとなった。

調査の結果、丘陵上には多数の遺構が残っていたことが明らかになった。遺構のほとんどは、頂上付近から2mの標高差の地点内の丘陵頂部を中心に検出された。丘陵の頂部では遺構は表土直下の遺構（以下、上層遺構とする）、及びそこから10cm程度掘り下げたところで検出された遺構（以下、下層遺構とする）とに分けられる。丘陵の下位部分には遺構はほとんどみられなかつたが、一部古墳時代の遺構が存在したことが判明した。丘陵の西側部分は削平を受けているため、遺構は全くみられなかつた。また、丘陵尾根がのびる南側部分についても、遺構は存在しなかつた。

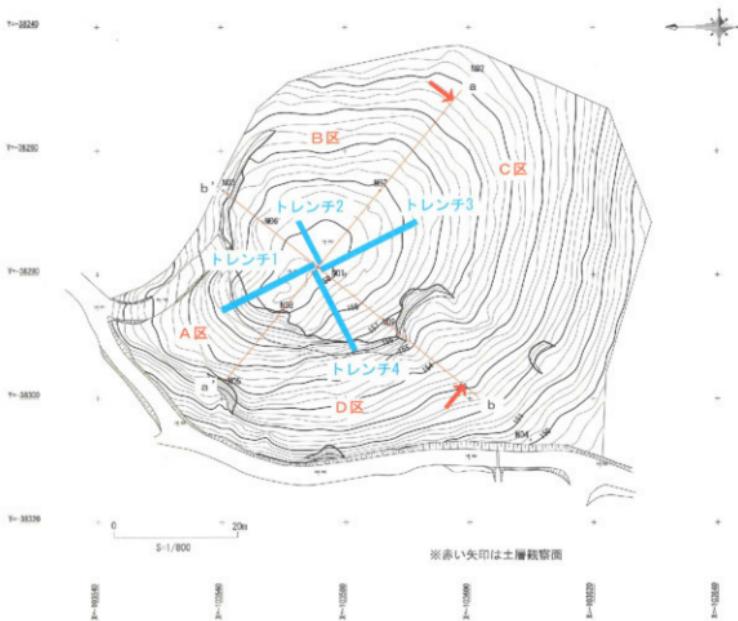
検出した丘陵頂部付近の遺構のうち、下層からは弥生時代後期の墳墓群が良好な状態で遺存していた。これは、美作地域における墳墓のあり方を良好に示すものとして貴重な発見である。さらに、古墳時代の遺構としては、中期の箱式石棺墓や土器棺墓などが発見された。これにより、黒岩遺跡の存在する丘陵は、弥生時代から古墳時代にかけての墓域として利用されていたことが明らかになった。

2. 調査区の設定

調査の実施にあたり、土層観察用のアゼを丘陵頂部を中心にして十字に残し、それぞれの区域をA区～D区の4箇所に分けた。後述する出土遺物は、この区割ごとに記述を行つてある。土層観察用のアゼは、丘陵頂部の地形の概ね長軸と短軸に設定し、北をA区、東をB区、南をC区、西をD区とした（第2図）。基本層序は、表土が10～20cmあり、その下は暗灰色土がほぼ全体にみられる。上層で検出された土坑は表土下でみられる。暗灰色土の下は黄褐色粘質土である。この層は場所により検出されず、暗灰色土の直下で地山に達するところもみられる。丘陵頂部ではこの層を地山まで掘削した段階で下層遺構が検出された。また、表土下の暗灰色土を掘削する段階で、後述する土壤墓群に供獻されたと考えられる土器が多数出土した。



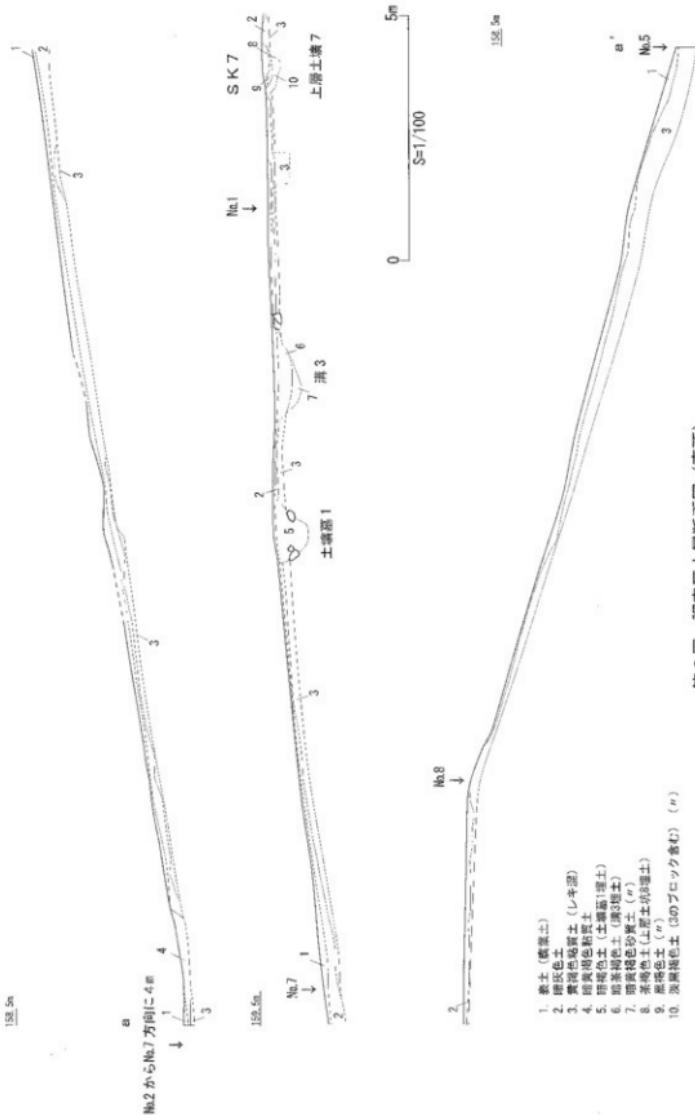
第1図 黒岩遺跡発掘調査前測量図



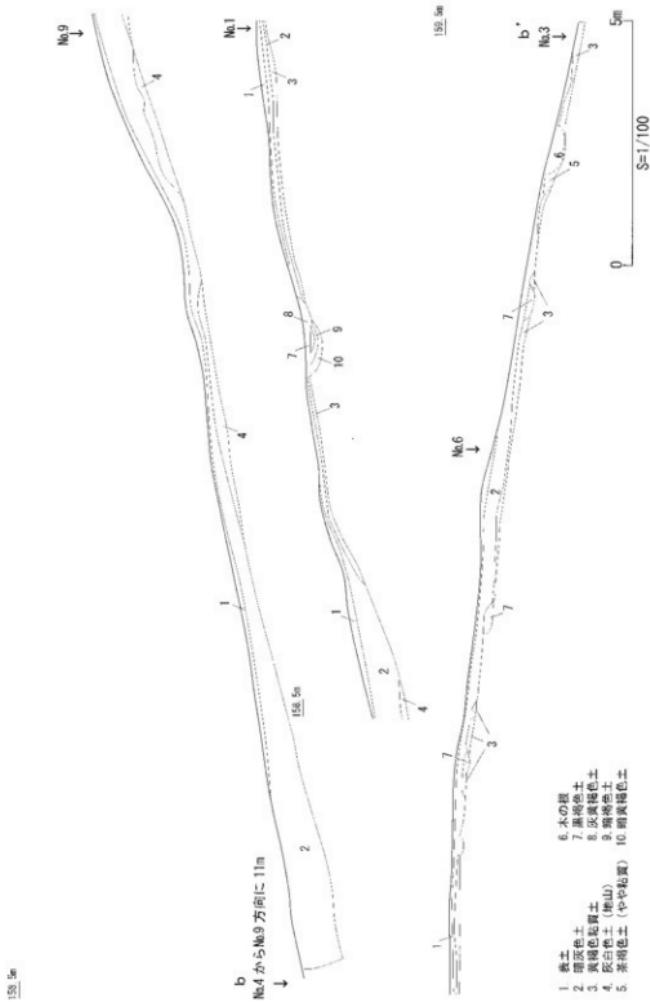
第2図 調査区割図及び1997年調査時のトレーンチ配置図

なお、弥生時代の遺構については上層と下層にわけて記述しているが、上層と下層に分けられるのは丘陵頂部のみであり、頂部から下がったところで検出された遺構については遺構は1層のみであった。これらの遺構については、下層の遺構と同時期の中で考えるべきものであるため、いずれも下層の遺構に含めて報告を行う。(豊島)

第3図 調査区土層断面図（東西）



第4図 調査区土層断面図（南北）



第2節 弥生時代の遺構と遺物

1. 上層の遺構（第5図）

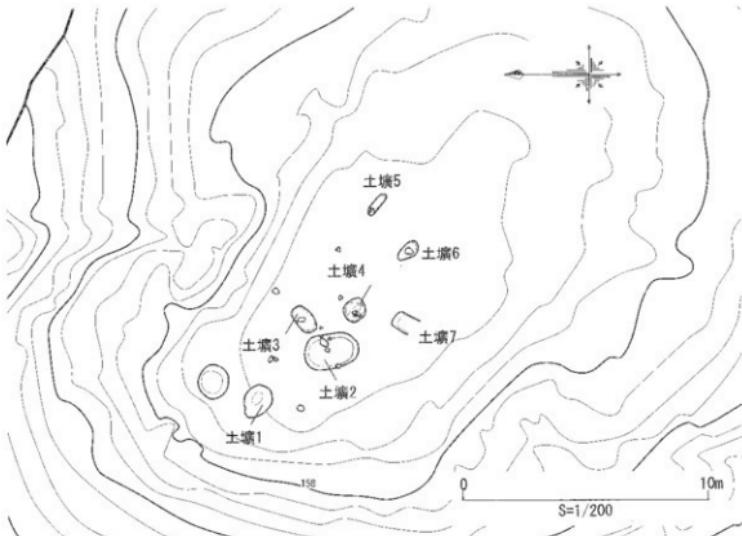
土壙が7基検出された。これらの土壙はすべて丘陵の頂部付近に位置する。土壙は円及び梢円形のもの、不整形のものなど様々である。

土壙1の直上や、土壙7で弥生時代後期の土器が出土したが、それ以外は遺物ではなく、時期を特定できなかった。また、土壙1山上の土器についても、底面から浮いた状態での出土であることから、遺構に伴うものであるかは不明である。

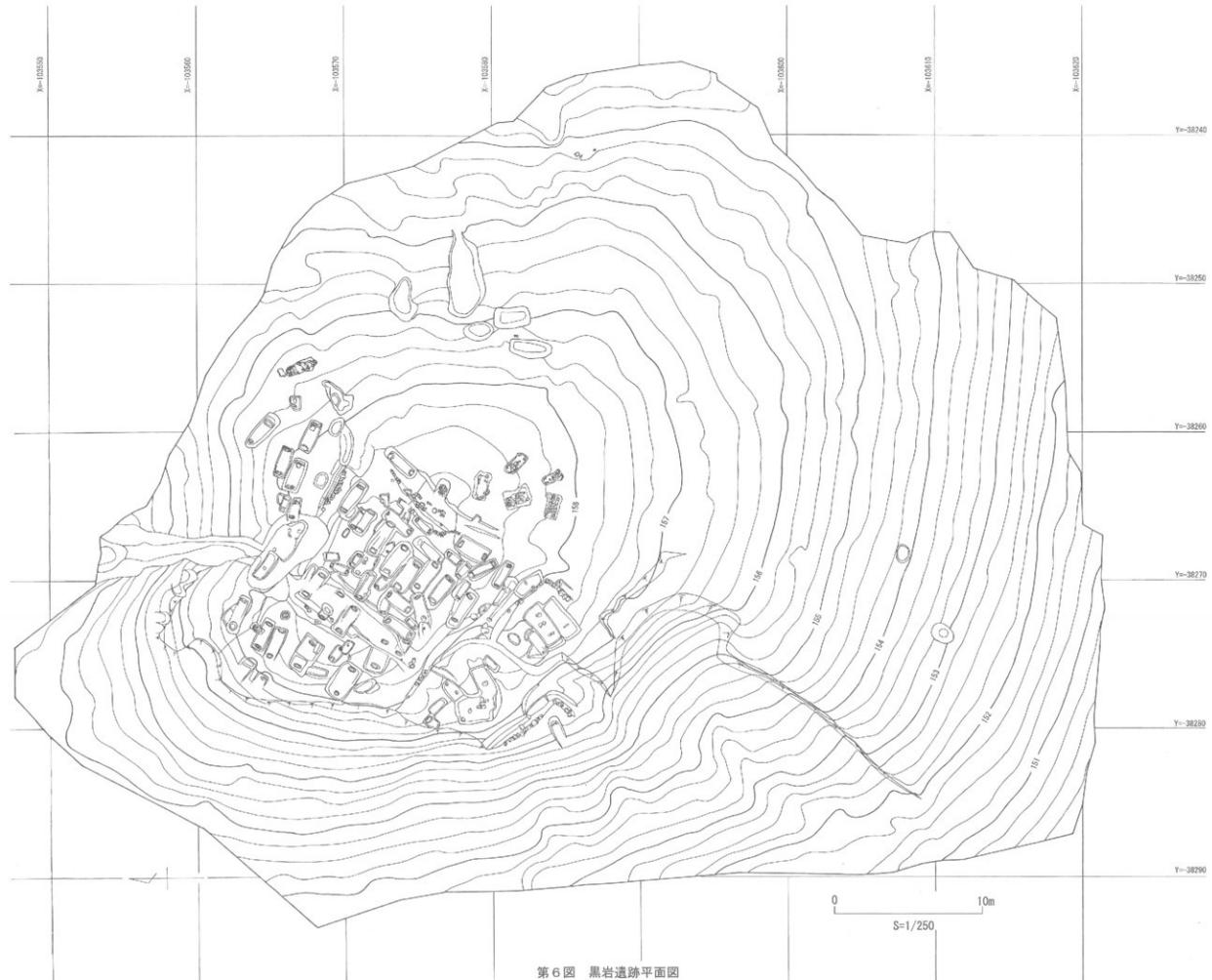
2. 下層の遺構

発見された遺構は、方形台状墓4基、これに伴う土壙墓が48基、土器棺墓1基、溝などで区画されない部分に位置する土壙墓が31基である（第6・7図）。埋葬施設の総数は80である。これらの遺構のうち、丘陵頂部からやや下がったところに位置する土器棺墓及び方形台状墓に伴う溝については、上層・下層の区別はないが、墳墓群の遺構であるため下層遺構として一括して取り扱う。上層墓群は、上層の遺構検出時には表出しておらず、上層の遺構検出の後、堆積していた黄褐色粘質土を10～20cm程度掘削した段階で検出された。

土壙墓群については、方形台状墓に伴って築かれたものその他に、区画されない部分に築



第5図 上層遺構平面図



第6図 黒岩遺跡平面図



かれたものが存在するため、検出位置や主軸方向などから 3 つの群に分けた（第 8 図）。これらについては、群ごとに記述する。

A 群（土壙墓 1 ~ 8）（第 9・10 図）

丘陵の頂部から少し南東に下がった部分に集中してみられる一群である。中でも土壙墓 1 ~ 5 は墓壙が良好な状態で残っている。これらは本遺跡で検出された多くの土壙墓の様相とは異なり、すべての墓壙内に直径 20 ~ 30 cm 程度の石が墓壙床面から浮いた状態で検出されている。やや小型の土壙墓 5 を除き、墓壙底の長さは 140 ~ 160 cm、幅 60 ~ 70 cm の範囲におさまる規模である。墓壙の主軸方向は統一されていないが、地形に沿って作られているような印象を受ける。土壙墓 1 は他の 2 ~ 5 ほど多くの石は検出されていないが、



第 8 図 黒岩遺跡遺構群分け図 (S=1:400)



第9図 土壙墓 1~5 平面・断面図

墓壇の四隅に石がみられる。土壙墓 2 は墓壇床面から浮いた状態で多くの石が検出された。石を取り除くと土壙墓 1 同様、墓壇の隅に石がみられるが、四隅すべてではない。土壙墓 3 は、土壙墓 2 と同様、石が検出されているが、墓壇の全面には及んでおらず、北側半分に偏った状態でみられる。また、この中には墓壇の隅に置かれた石も含まれている。墓壇の南側半分には、短辺の隅に 1 つずつ、墓壇床面から浮いた状態で石が検出されている。土壙墓 4 は、土壙墓 2 と類似したあり方を示しており、石が多くみられたほか、四隅にも石が置かれていたことが推測される。土壙墓 5 は残りの良い 5 基のうち最も小型で、墓壇

底の長さ 100 cm、幅 48 cm を測る。床面から浮いた状態でみられる石は土壙墓 2 や 4 より少ないが、墓壙の四隅に石が置かれていたことが検出状況からわかる。

これらの土壙墓からは、出土遺物はほとんどなく、土壙墓 4 から弥生土器の小片が出土したのみであった。

土壙墓 1 ~ 5 の大きな特徴としては、土壙墓 1 以外は墓壙上に多くの石が検出されたこと、墓壙の四隅に石を据えたと考えられることがあげられる。墓壙内に木棺の存在を示すような痕跡はないが、これまでの調査例から推測すると、墓壙内にみられる多数の石は墓壙を掘削し、木棺が据えられた後に、墓壙上に置かれた石と考えられる。また、墓壙隅に据えられた石は、木棺の支えの石と推測される。

土壙墓 6 ~ 8 は 1 ~ 5 の北東部にある。いずれも方形台状墓に伴う溝によって部分的に削平されているため遺存状態は悪く、全体の形を復元することが困難であるが、土壙墓 2 ~ 5 で検出されたものと同様に石が遺存していたことからその痕跡を確認することができた。土壙墓 6 は、土壙墓 1 の北側に位置し、西半分を方形台状墓に伴う溝 3 によって切られている。遺存する東側部分には一辺 10 ~ 20 cm 程度の石が墓壙床面から浮いた状態で検出された。墓壙の幅は 95 cm、残存する深さは 9 cm である。土壙墓 7 は溝 3 の底部でわずかに確認された遺構で、土壙墓であるかは判然としないが、周辺に墓壙上に石を伴う土壙墓が検出されていることなどから土壙墓と判断した。溝 3 との前後関係については、溝 3 の埋土を掘削した段階で発見されたため、土壙墓 7 が溝 3 によって切られているものと推測される。土壙墓 7 の東側には石がまとった状態で検出されているが、これらの一帯は土壙墓 7 に伴うものである可能性も考えられる。土壙墓 8 は溝 3 の中に検出されたもので墓壙の外形ラインがわずかに残る。墓壙上には石がみられるが、これらは溝 3 に伴う石列、あるいは石列が動いたものである可能性も考えられるため、土壙墓 8 に伴うものであるかは不明である。

以上の埋葬施設のうち、土壙墓 1 ~ 7 については、墓壙上に石を伴うもので、一つのまとまりをもって構成されている群ととらえることができる。8 については、遺存状態が悪いため詳細は不明である。

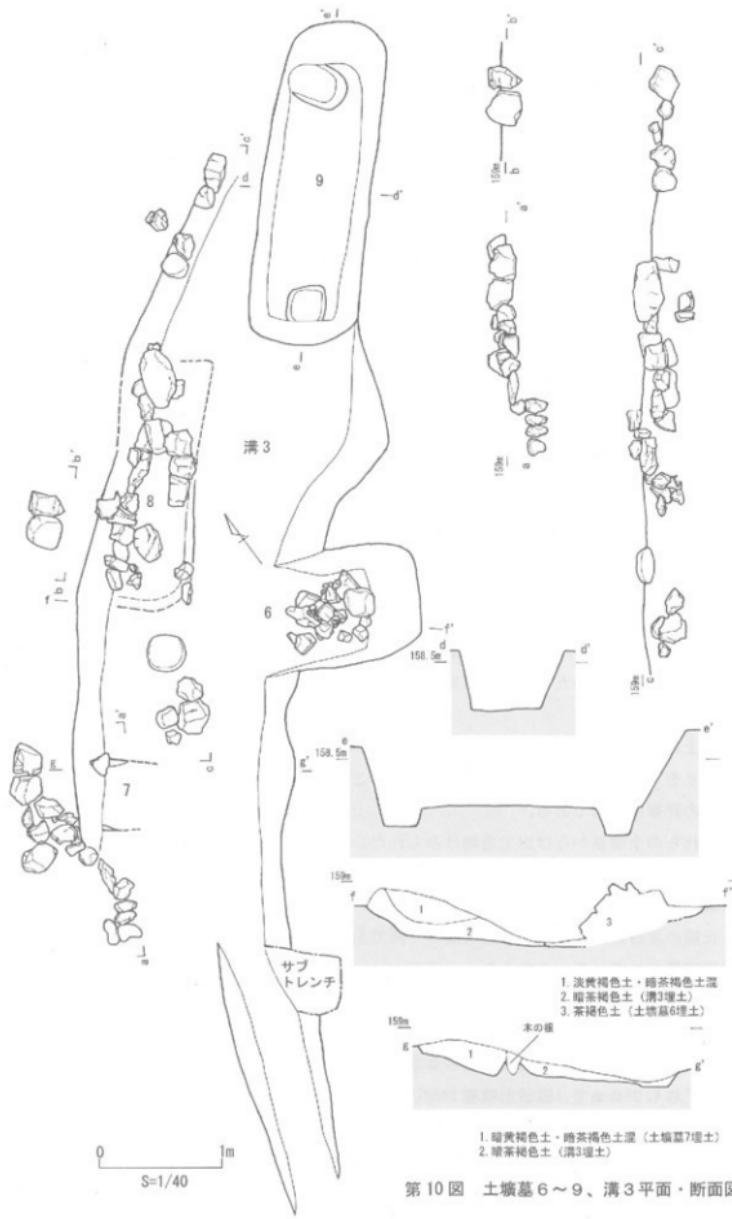
これらの土壙墓からは出土遺物はみられなかった。

B 群（土壙墓 10 ~ 23・66・土器棺墓 1）

丘陵の北斜面に位置する土壙墓の一群である。墓壙はいずれも主軸が尾根に直交する方向で築かれている。このうち、土壙墓 18 ~ 23 は方形台状墓 1 に伴うと考えられる溝 1 を切る形で築かれている。

① 土壙墓 10 ~ 13（第 11・12 図）

土壙墓 10 及び 13 は丘陵で確認された土壙墓群の中でも大型の墓壙をもち、墓壙の全長はいずれも 260 cm で、幅が土壙墓 10 が 156 cm、土壙墓 13 が 148 cm をはかる。いずれも墓壙両端に木棺を据えた小口溝の痕跡がみられる。土壙墓 10 は墓壙底部の中心付近に段差がみられるほか、南東小口付近が一段高くなっているところがみられる。土壙墓 13 は規模、主軸方向が土壙墓 10 とほぼ同じであることから、同時期に並列して築かれたと考えられる。



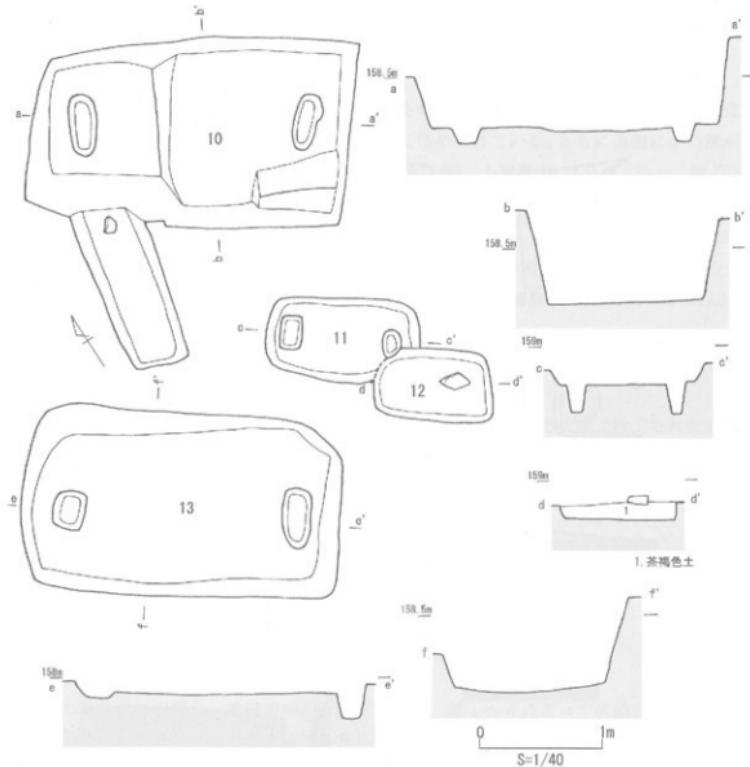
第10図 土壌基6~9、溝3平面・断面図

土壙墓 11、12 は切り合っており、11 が古く、12 が新しい。墓壙全長は 11 が 126 cm、12 が 96 cm と、土壙墓の中では規模の小さいものである。11 には墓壙両端にしっかりととした小口溝がみられるが、12 には小口溝がなく、墓壙上には、墓標と推測される石が 1 個、床面から浮いた状態でみられる。

出土遺物は少なく、土壙墓 11 からは、壺の口縁部が出土している（第 12 図 1）。端部がわずかに外反するものである。弥生時代後期に位置づけられる。また、図示できなかったが、土壙墓 13 からも弥生土器と考えられる小片が出土した。

② 土壙墓 14 ~ 17 (第 13 図)

土壙墓 14、15 と土壙墓 16、17 はそれぞれ並列しており、16、17 の斜面下に 14、15 が築かれている。14、15 は削平のため全体の規模は不明であるが、片側に小口溝があり、



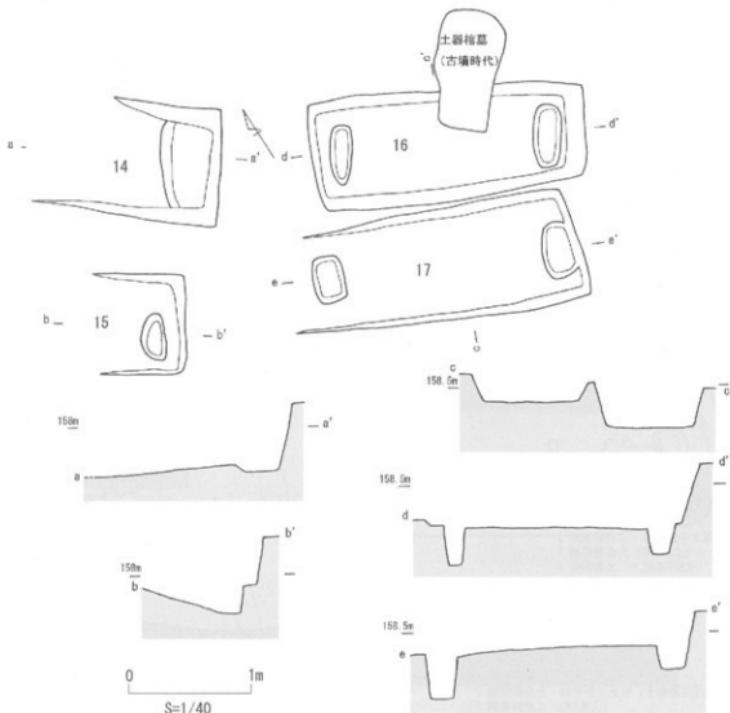
第 11 図 土壙墓 10~13 平面・断面図

周辺の土壙墓の様相から、本来は両側に小口溝をもつものであったと推測される。16、17 も、両側に木棺を固定するための小口溝が両側にみられる土壙墓である。墓壙規模や主軸がほぼ同じであることから、同時期に築かれたと考えられる。なお、16 の上層からは、須恵器の甕と土師器の甕を合わせ口にした古墳時代の土器棺墓が検出されている。

土壙墓 14～17 からは、出土遺物は全くみられなかつた。

③土壙墓 66（第 14 図）

土壙墓 16 の北側 1 m のところに位置する土壙墓である。全長 266 cm、幅 85 cm をはかる。墓壙両側底部に木棺の小口溝と思われる痕跡が確認できるが、西側小口のものは掘方が円形であり、小口溝とするのにはややいびつである。



第 13 図 土壙墓 14～17 平面・断面図

出土遺物はみられなかつた。

④土壙墓 18～23（第 15・16 図）

すべて区画溝 1 と切り合っている土壙墓の一群である。土層の観察により、溝 1 が埋まった後に土壙墓の掘削が行われていることから、溝 1 の方が古く、土壙墓群の方が新しいことが分かる。土壙墓 20、21 については溝 1 との前後関係は不明であるが、埋葬施設の方向や位置関係から判断する

と、20、21 についても溝 1 よりも新しいと推測される。土壙墓 18、19 は溝 1 にほぼ直交して検出された。土壙墓 19 は墓底が一段掘りくぼめられている。ともに両側に小口溝がみられる。土壙墓 18 は全長約 220 cm、幅 73 cm（遺存部）、土壙墓 19 は全長 228 cm、幅 103 cm を測る。土壙墓 20、21 は溝 1 の北東部、丘陵頂部から北斜面に至る直前の部分に位置し、いずれも溝 1 に直交する。土壙墓 21 は両側小口に溝をもつが、土壙墓 20 は検出できた部分からは小口溝は検出されなかった。土壙墓 22、23 は、溝 1 の南西側で溝 1 に直交する土壙墓で、切り合い関係から溝 1 よりも新しく位置づけられる。土壙墓 22 は推定長 235 cm 以上、土壙墓 23 は推定長 135 cm で、ともに両側に小口溝を有する。

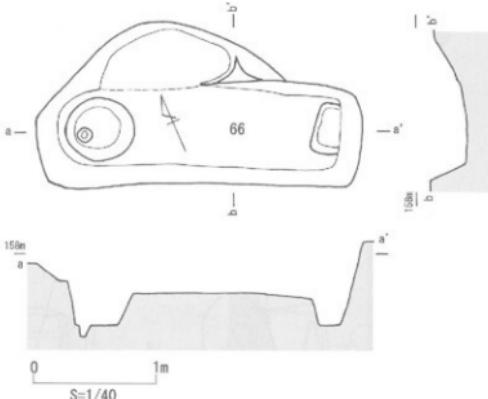
土壙墓 18～23 からは出土遺物はみられなかった。

⑤土器棺墓 1（第 17 図）

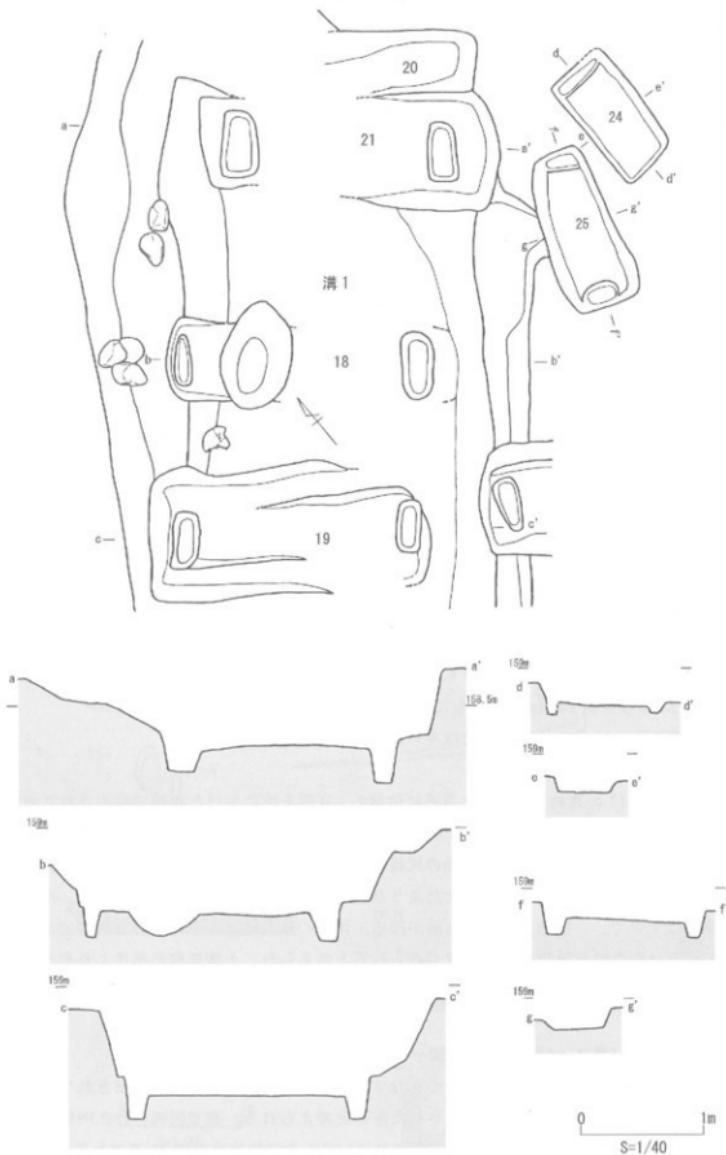
土壙墓 16、17 の東約 0.6 m のところに位置し、底部を南に向かって状態で検出された壺棺である。検出時は既に全体の半分を欠いた状態であった。壺は口径 18.5 cm、底径 12.8 cm、高さ 50.9 cm を測る。口縁部には 3 条の沈線が施されている。体部全体にはハケ目が施され、片部には S 字文を横にして連続させたような模様がヘラ描によって描かれている。内面は口頭部はナデで、一部指押さえの痕跡が残る。体部の最大径より下部はヘラ削りである。壺の時期は弥生時代後期前葉に位置づけられると考えられ、土壙墓群の年代よりやや遅るものである。出土遺物はみられなかった。

方形台状墓 1（第 7・10 図、第 18 図～29 図）

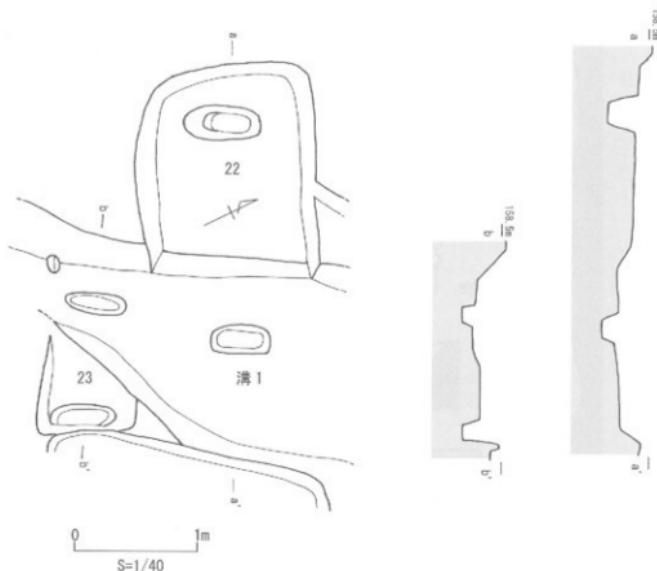
丘陵の最高位に位置し、遺跡の中心をなす墳墓で、溝 1～4 によって区画されている。盛土ではなく、地山を削り出して造成されたものと考えられる。溝で区画された内側には、土壙墓がほとんど隙間のない状態で配置されている。その数は全部で 34 基である。溝 1 を除き、各溝には所々で列石が遺存しており、本来は溝と列石によって区画されていた墳墓



第 14 図 土壙墓 66 平面・断面図



第15図 土塙墓 18~21・24・25 平面・断面図



第16図 土塙墓22・23平面・断面図

であったことが分かる。

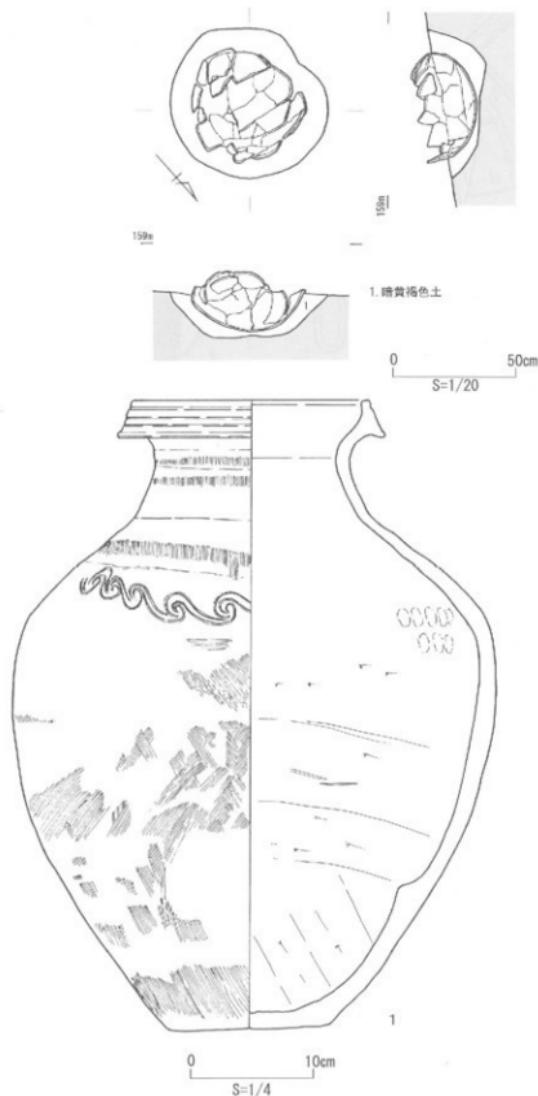
溝1（第18・19図）

墓の北西部を区画する溝で、長さ約6m、幅2~2.5m、深さは約0.5mをはかる。溝1に直交する形で土塙墓18~23が検出されているが、土層の観察からは溝1が埋まつた段階で土塙墓の掘削がなされていることから、これらの土塙墓は溝1の存続時期にはなかつた土塙墓である。溝の断面形は浅いレンズ状であるが、両端の立ち上がり部分にテラス状の平坦面をもつ。これは、溝の北側部分で明瞭にみられ、溝の南側部分では土塙墓と切り合つていているため、検出されなかつた。北側の平坦面には、部分的に列石が残っている箇所がみられる。列石は2箇所で残つており、石は20~30cmの河原石が3個、もう1箇所では同大の2個の河原石がともに面を南東側に向けて立て並べられている。2箇所とも方形台状墓の内側に向けて並んでおり、他の箇所で検出された列石が方形台状墓の外側に面向て並べられている状況とは異なつてゐる。

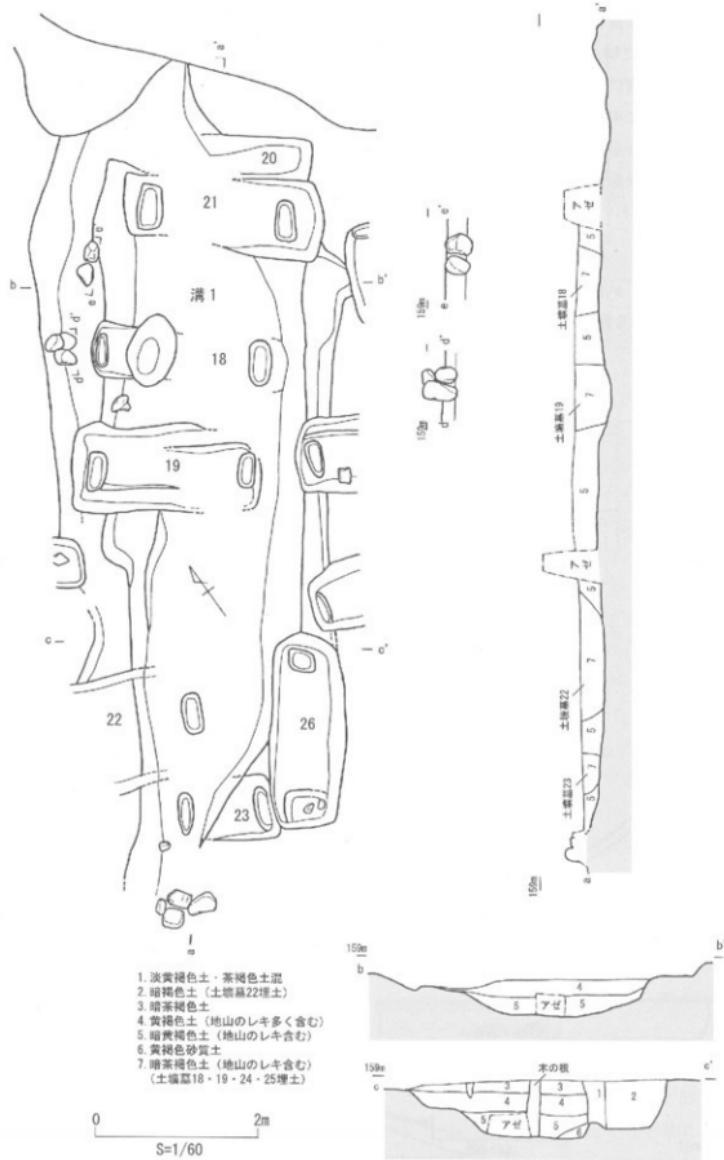
出土遺物はほとんどなく、土器の底部片が出土したのみである（第19図1）。

溝2（第20・21図）

溝2は、方形台状墓1の北東部を区画する溝である。残存する長さ7.3m、幅0.4~0.6m、

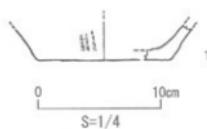


第17図 土器棺墓1平面・断面図（上）及び土器棺実測図（下）

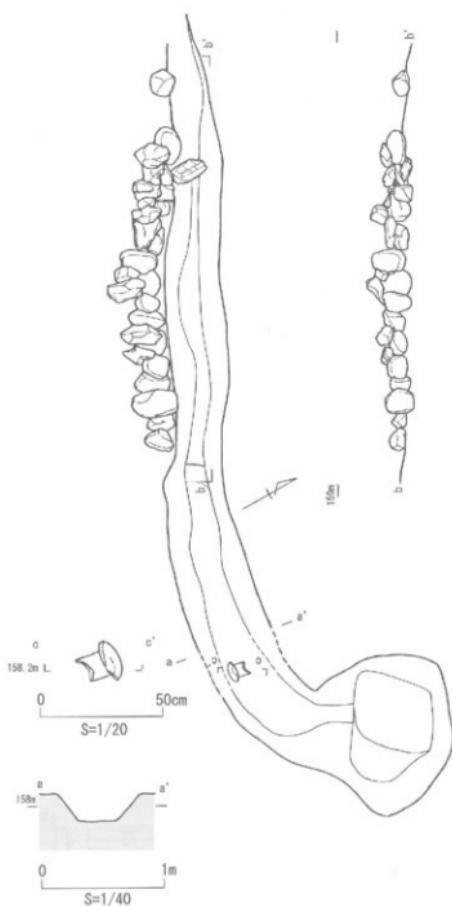


第18図 方形台状墓1 溝1平面・断面図

深さは残りの良いところで約0.25mを測る。溝の西半分は土壙墓58、59に切られており、東側の端は緩やかに北に向かってカーブを描いている。溝の南側、つまり方形台状墓1の内側には、溝に沿って列石が検出された。列石は一部動いているものはあるが、河原石及び周辺の石を立て並べたような状態で、方形台状墓の外側に向けて面をそろえて3m程度残っている。



第19図 溝1出土遺物

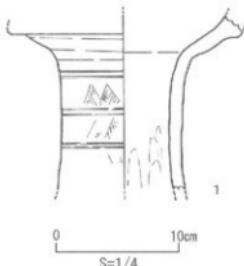


第20図 方形台状墓1 溝2平面・断面図

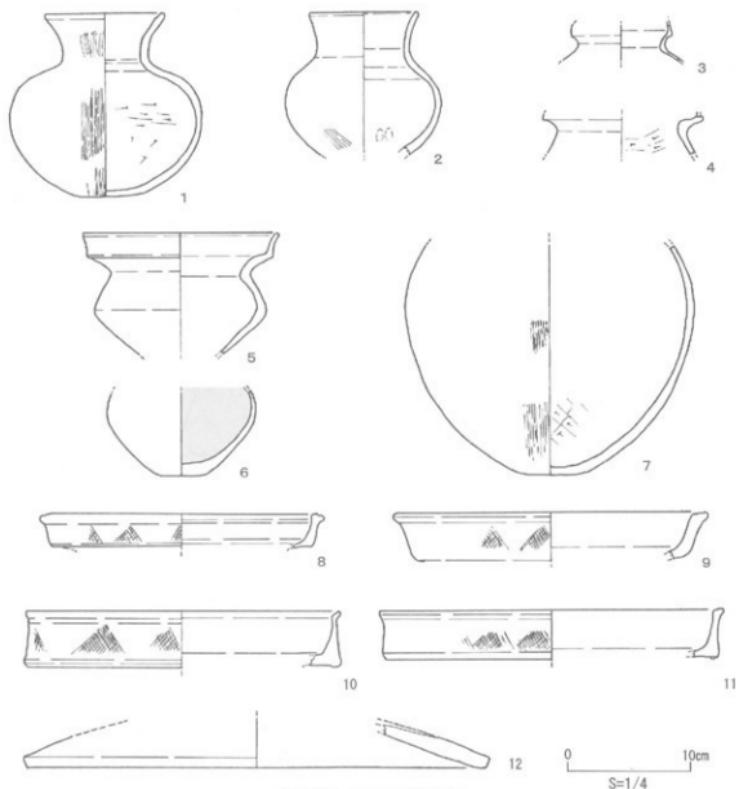
出土遺物は、溝の埋土直上から長頸壺の頸部片が出土している。頸部に回線文2条が3段に施され、その間には鰐齒文が施されており、内面は指ナデの痕跡がみられる（第21図1）。時期は弥生時代後期中葉に位置づけられよう。

溝3（第10・22図）

方形台状墓1の南東部を区画する溝で、長さ8.5m、幅1.85～2m、残存する深さは0.1～0.2mを測る。溝3は土塙墓6～9が切り合い関係にある。土塙墓6・7については先述のとおり、墓塙上に石を伴う土塙墓



第21図 溝2出土遺物



第22図 溝3出土遺物

である可能性が考えられる。上墳墓 8 はわずかに痕跡が残るのみであるため不明だが、上墳墓 9 は、方形台状墓 1 内にある上墳墓と同タイプの両小口に溝をもつものであることから、方形台状墓 1 にともなう埋葬施設と判断できる。溝の西側には石が所々で検出されているが、溝に伴う列石として原位置を保っているのは上墳墓 8 の西側のものや、その北側にみられる 4 個の石が想定される。これらはすべて南東側（方形台状墓の外側）に面をそろえている。列石は河原石は少なく、角礫が多く用いられている。

溝 3 からは、一定量の土器が出土した（第 22 図）。小型の短頸壺（1・2）は外面ハケで、1 の内面はヘラ削り、2 の内面は指押さえがみられる。二重口縁の甕（3～5）のうち、5 は外反する口縁部をもち、体部の中央が大きく張っている。6・7 は甕の底部である。6 は内面のみ丹塗りである。7 の外面はタテハケ、内面はヘラ削りである。8～11 は器台あるいは裝飾壺の口縁部である。すべて二重口縁部分に鋸歯文が施されている。12 は器台の底部である。6 は内面丹塗りである。これらの土器は概ね弥生時代後期中葉に位置づけられる。

溝 4（第 23 図）

溝 4 は部分的な検出であるが、方形台状墓の南西側を区画する溝である。長さ約 12m で、溝 5 及び溝 6 と重複しているため、幅は不明であり、深さは判明しているところで 0.1m である。溝の東側は残存状況が悪いため確認できないが、溝の西端部において列石が検出された。石は溝の内側に長さ 2.3m にわたって部分的にみられ、河原石を使用しており、面をすべて南側、つまり方形台状墓 1 の外側に向けて並べられていた。

出土遺物は、溝 4 の東半部に溝 5 があり、そこからの出土遺物との区別が付きにくいが、溝 5 と重複していない西半部からの出土遺物はみられなかったことから、溝 4 からの出土遺物はみられなかったと判断した。

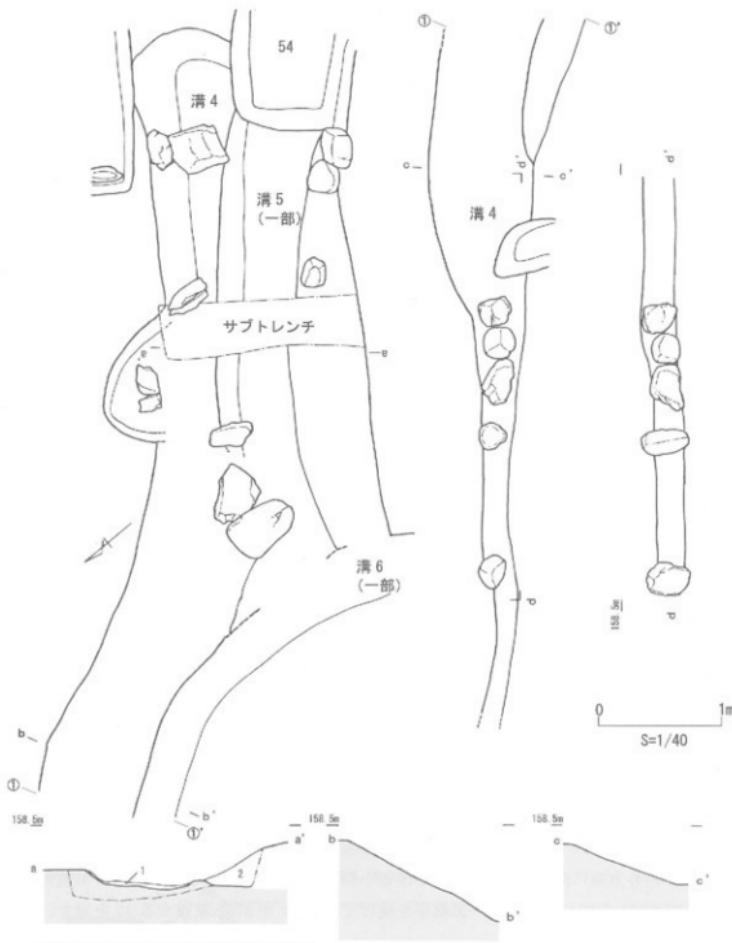
これらの溝で区画された方形台状墓 1 の規模は、溝 2～溝 4、及び溝 1～溝 3 を方形台状墓 1 の区画と考えると、北東～南西 14.4m、北西～南東 11.8～12.7m となる。

方形台状墓 1 に伴う埋葬施設（第 10・15・24～29 図）

方形台状墓 1 内で検出された埋葬施設は、溝で区画された空間の内部及び溝内に繋かれたものを合わせると、上墳墓 9、24～53、55～57 の全部で 34 基と推測される。これらの土墳墓は概ね北東～南西方向、北西～南東方向の 2 方向に主軸をもつものが大半を占めるが、一部異なる方向のものもあり、区画内に隙間なく墓が築かれていることが分かる。主軸方向の中心は方形台状墓の区画溝 2、4 に平行する向きである北西～南東方向である。この方向はすなわち丘陵の尾根方向に並行している。もう一つの主軸方向は北東～南西方向で、先の主軸と直交する向きである。以下、各土墳墓についてみていく。

①土墳墓 9（第 10 図）

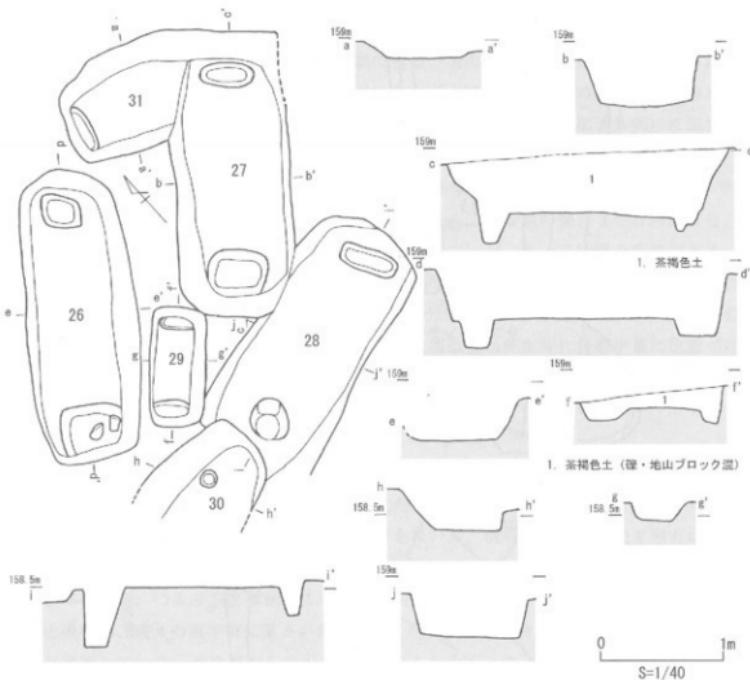
土墳墓 9 は、溝 3 に重なった状態で検出され、その前後関係は不明である。墓壙は全長 266 cm、幅 88 cm をはかる長方形で、墓壙の両小口部には木棺の側板を支える小口板の痕跡である小口溝を有する。



第23図 方形台状墓1 溝4平面・断面図

②土壤墓24、25（第15図）

方形台状墓1の北隅にみられる土壤墓である。方形台状墓内の多くの土壤墓群とはやや主軸方向が異なり、南北方向に近い主軸をもつ土壤墓である。土壤墓24は全長105cm、25が133cmを測るやや小型のものである。



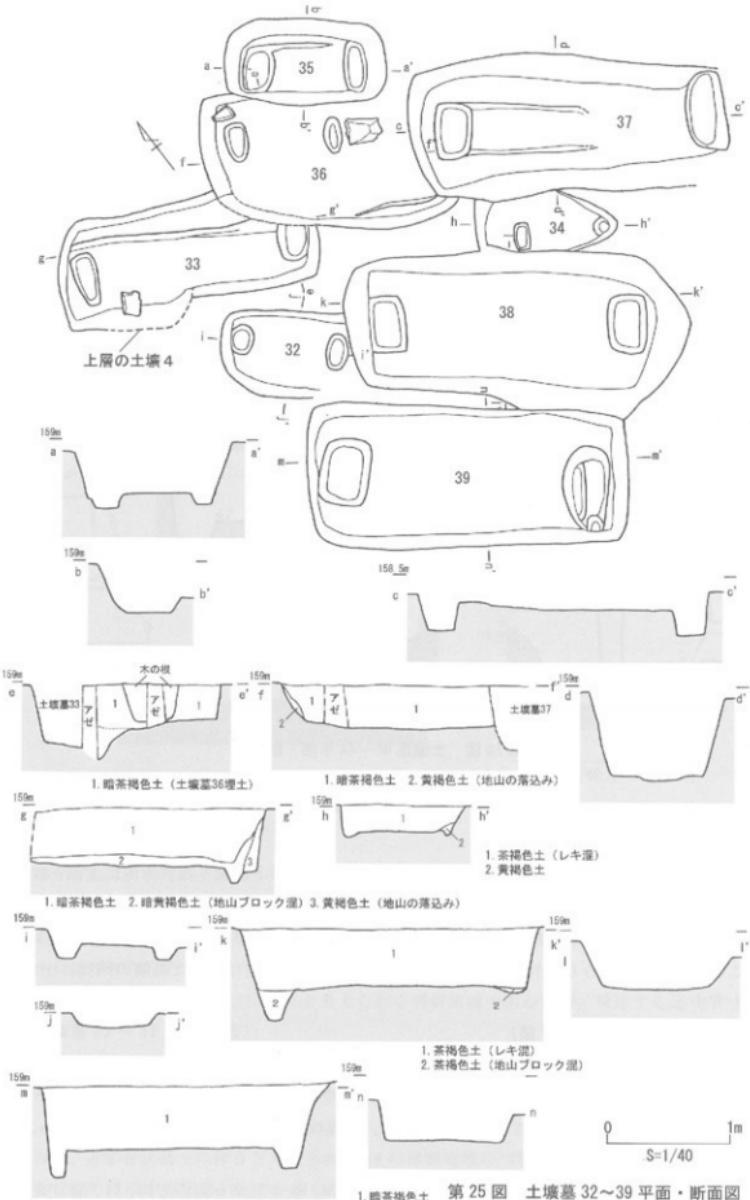
第24図 土壇墓26~31平面・断面図

③土壇墓26~31(第24図)

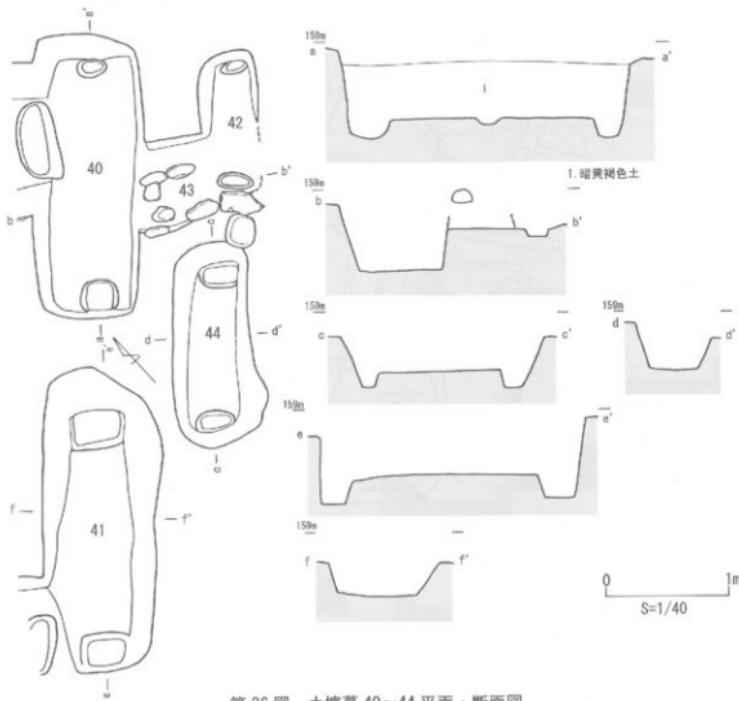
方形台状墓1の西側にみられる土壇墓群である。26は溝1を切っていることから、溝が埋まつた後に築かれている。26、27ともに主軸を北東一南西方向に向いている。28及び30は主軸が斜め方向に向く。29は全長98cmと小型の土壇墓である。31は27と一部重複しており、27が31を切っている。一部削平を受けている30や27と重複する31を除き、墓壇内に小口溝を有する。

④土壇墓32~39(第25図)

方形台状墓1のほぼ中心に位置する土壇墓群である。溝1を切る33がわずかに主軸が異なるが、それ以外のものはすべて主な主軸方向である北西一南東方向に主軸を向けた土壇墓群である。すべて墓壇の両側に小口溝をもつ。37~39は台状墓のほぼ中心に位置し、全長250cmを超える大型の土壇墓である。37の墓壇底部には小口溝の幅に沿って一段低くなっている箇所がみられる。これは墓壇に据えられた木棺の側板の痕跡と推測される。34、35はそれぞれ全長115cm、132cmと小型のものである。



1. 薄茶褐色土 第25図 土壌断面図



第26図 土塙墓40~44平面・断面図

⑤土塙墓40~44（第26図）

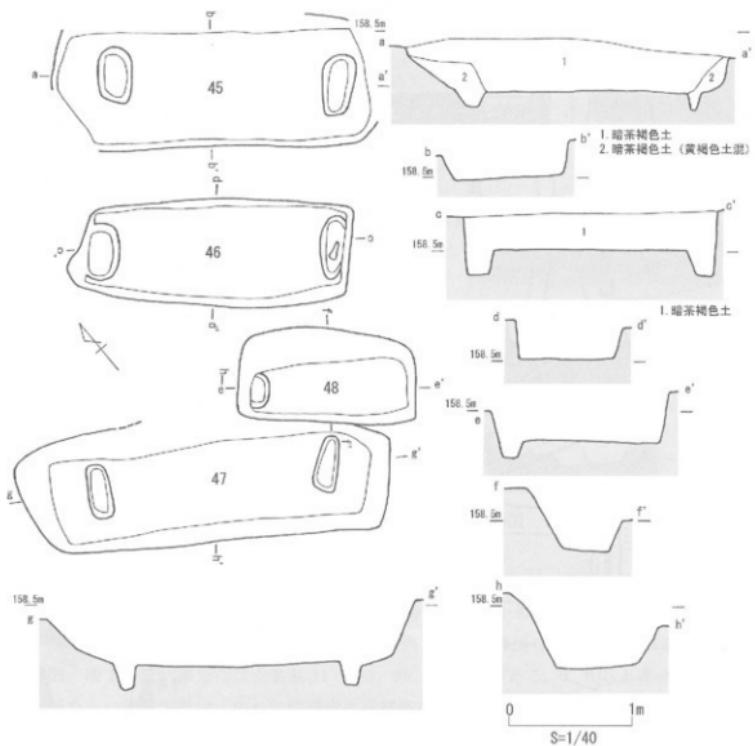
方形台状墓1の東隅に位置する土塙墓である。43を除き、北東—南西方向に主軸をほぼそろえている。40、41は縦に2つ並んだ状態で築かれている。43は40と42の間にみられるが、他の土塙墓とは様相が異なり、墓壇内部に河原石が立て並べられた状態で検出された。この石が墓標のような意味をもつのかは不明である。43以外はすべて墓壇の両側に小口溝を有する。

⑥土塙墓45~48（第27図）

方形台状墓1の中心から南側にかけて築かれた土塙墓である。主軸方向はすべて北西—南東方向である。45は39に隣接し、部分的に28や41と接するが新旧関係は不明である。47と48の新旧関係についても明瞭ではない。規模は47が最大で、全長300cmを測る。

⑦土塙墓49~53（第28図）

方形台状墓1の南隅に築かれた土塙墓である。49、52が北東—南西方向、51、53が北西



第27図 土壙墓45~48平面・断面図

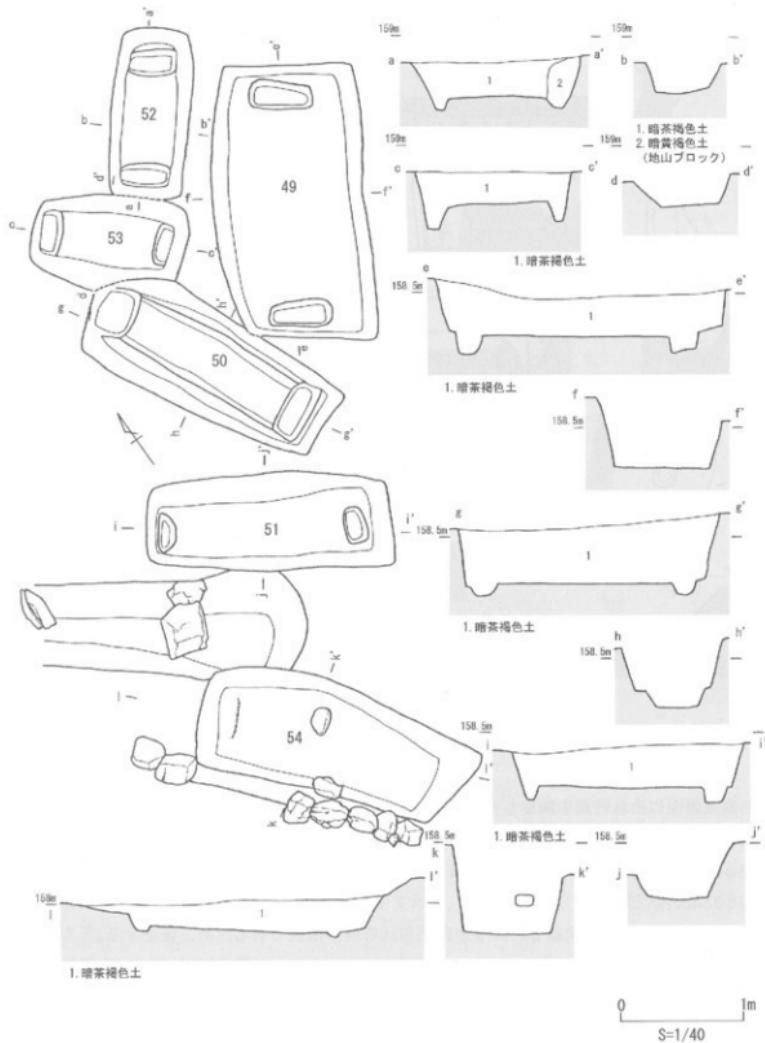
—南東方向にそれぞれ主軸をもつ。49は全長224cm、幅122cmの大型の墓壙である。この中で、50のみ斜め方向に墓壙が築かれている。50の墓壙底には、小口溝の幅で一段低くなっている。これは土壙墓37と同様であり、木棺の側板の痕跡と推測される。その他の土壙墓にも小口溝がみられる。

土壙墓54は方形台状墓2に伴うと考えられる埋葬施設であるため、後述する。

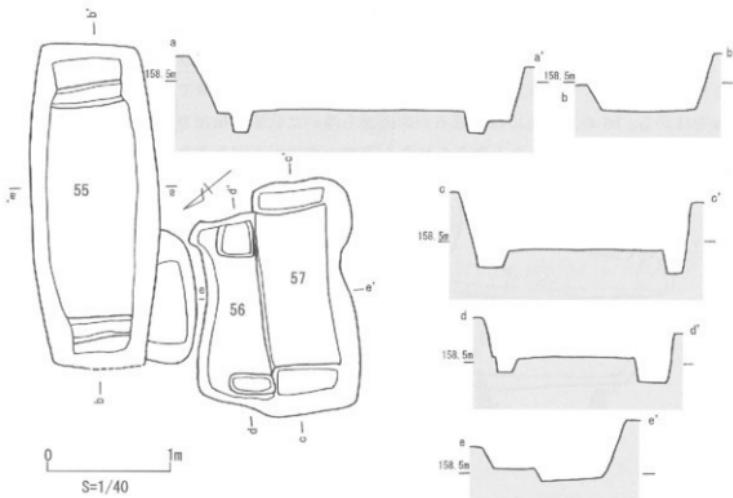
⑧ 土壙墓55~57(第29図)

方形台状墓1の北東に位置し、主軸をすべて北西—南東に向かう上壙墓である。56、57はやや小型でそれぞれ全長156cm、188cmである。56~58すべて墓壙に小口溝を有する。

以上、方形台状墓1に伴うと考えられる34の埋葬施設についてみてきた。このうち、方形台状墓のほぼ中央に築かれているものは主軸を北西—南東方向に向ける上壙墓37~39、



第 28 図 土壙墓 49~54 平面・断面図



第29図 土壙墓55~57平面・断面図

45などで、墓壙の全長は250cmを超える。これら3基の周囲には、同じく主軸を北西—南東方向に向ける土壙墓37及び小型の34が38に隣接し、その北東0.5mほど間隔を空けて55~57がある。また、土壙墓45の南西0.5mのところに隣接して46~48がみられる。北西部、溝1に近い部分には土壙墓31~33、35、36などがある。これらと直交する向きに主軸をもつ埋葬施設は、中心に位置する埋葬施設の隙間を埋めるような形で配されており、主に南東側でみられる。土壙墓40~42、44、49、52などがこれにあたり、溝3内に位置する土壙墓8なども同様の向きを示している。北西側で同様の主軸方向を示すのは土壙墓26、27、29などである。

区画内には、直交関係にある土壙墓がほとんどの割合を示すが、一部斜め方向に主軸をもつものがある。その土壙墓は区画内の隅にみられ、北隅の土壙墓24、25、西隅の土壙墓28、30、南隅の土壙墓50などがあげられる。これらの土壙墓の配置は、方形台状墓1の性格を考える上で重要な埋葬配置であると考える。

土壙墓群の墓壙をみると、墓壙の片側のみに小口溝をもつもの、あるいは一部判明していないものなどはあるが、短辺の両側に小口溝をもつものが大半を占めることがわかる。

土壙墓埋土中からの出土遺物はほとんどなく、土壙墓37、50及び53から弥生土器の小片が出土した以外はみられなかった。

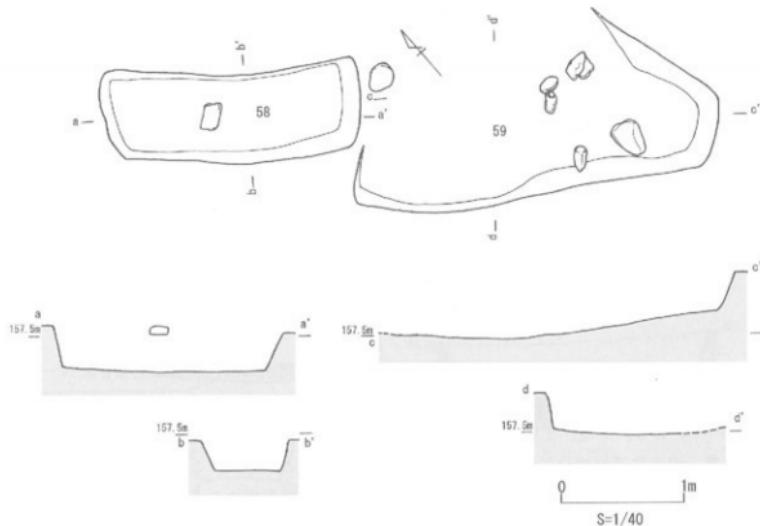
C群（土壙墓58~65）（第30~33図）

方形台状墓1の北西部を画する溝2から1m程離れた地点に、主軸を北西—南東方向に

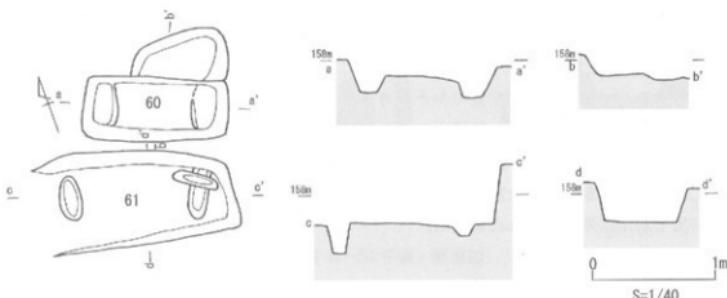
向けた土壙墓 58～65 からなる一群がある。いずれの土壙墓からも遺物は出土しなかった。

① 土壙墓 58・59 (第 30 図)

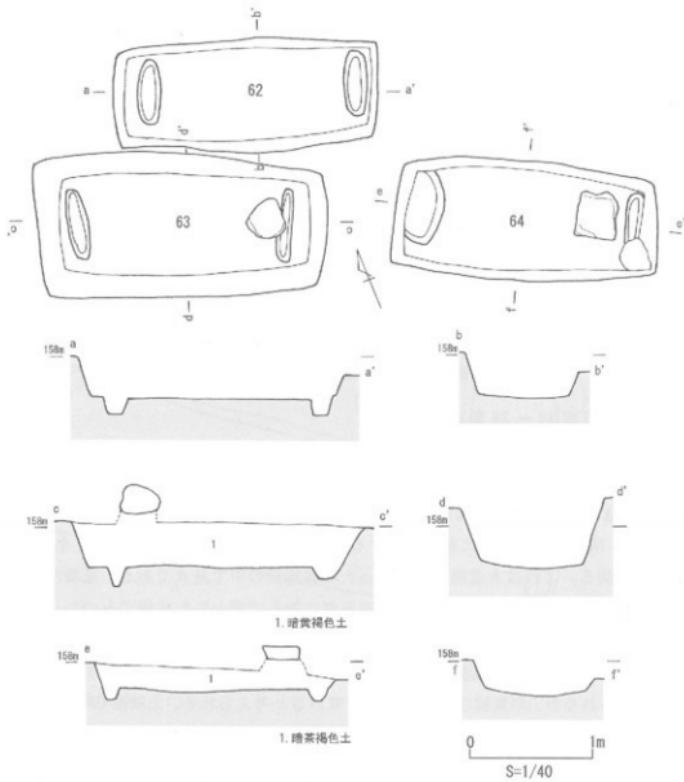
方形台状墓 1 のある丘陵から少し下がったところに位置する土壙墓である。溝 2 の西側を切る形で築かれている。59 は遺存状況が悪く、全体の形が明確ではない。58 は全長 210 cm をはかる。58 の墓壇上には河原石が床面から浮いた状態で検出された。この河原石は墓壇上に墓標として置かれたと考えられる。59 の上面にも石がみられるが、方形台状墓を構



第 30 図 土壙墓 58・59 平面・断面図



第 31 図 土壙墓 60・61 平面・断面図



第32図 土塙墓 62～64 平面・断面図

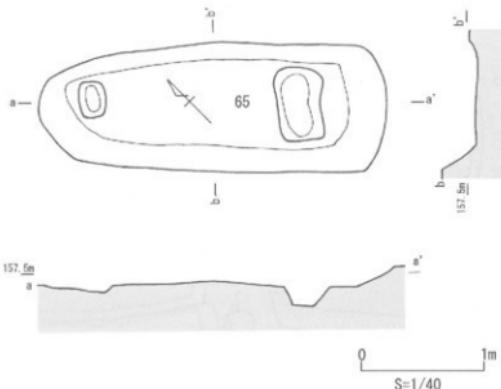
成する列石が転落したものと推測される。ともに小口溝はみられない。

②土塙墓 60～64（第31、32図）

主軸をほぼ同じくする土塙墓群で、すべて墓壇の両側に小口溝をもつタイプのものから構成される。土塙墓63、64の墓壇上には一辺30cm程度の河原石が床面から浮いた状態でみられることから、土塙墓58同様、墓標として置かれたものと考えられる。60は全長119cmと小型であるが、土塙墓62～64は全長220～230cm前後で同大である。

③土塙墓 65（第33図）

土塙墓62～64から1.5m離れたところ、丘陵の最も低いところで検出された。全長284cmと大型で、両側に小口溝をもつ。

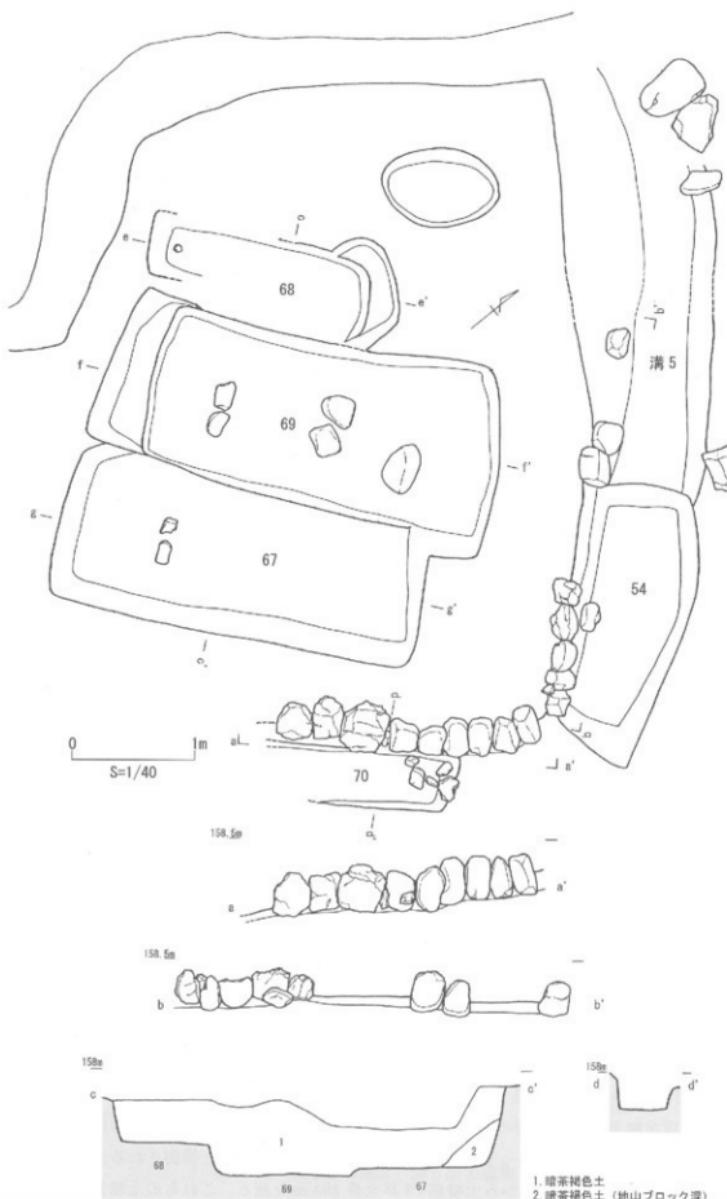


第33図 土壌墓65平面・断面図

方形台状墓2（第34～36図）

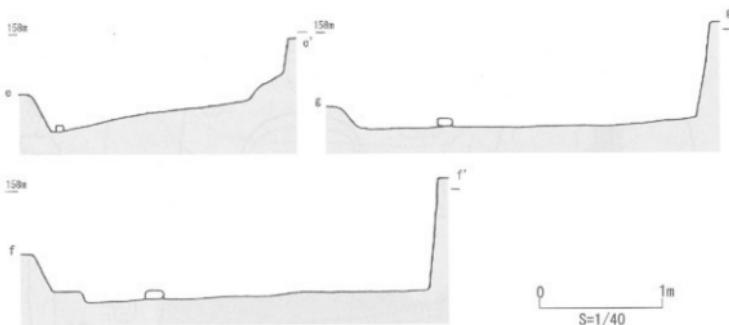
方形台状墓1の南東に接し、溝5によって区画されている。盛土ではなく、地山を削りだして造成されたと推測される。規模は、北東—南西5m、北西—南東6.2mである。方形台状墓に伴うと考えられる埋葬施設は全部で5基あり、そのうち中心となるものが3基（土壌墓67～69）南西—北東方向に並列している。最も大きなものは土壌墓69で、全長350cm、幅163cmを測る。これは本遺跡でみつかった埋葬施設の中で最大である。墓壙内の床面には20cm×10cm程度の平らな石が2個、南西側に並んで置かれた状態でみつかっていることから、これらは枕石であると推測され、頭位方向は南西側であったことが分かる。墓壙上に河原石が3個、浮いた状態でみつかっており、墓壙中心部の2個は墓標の石である可能性も考えられるが、南東側の1つは転落石であると考えられる。土壌墓69に隣接する土壌墓67も全長304cmを測る大型の土壙墓で、69同様、南西側に枕石2個が並べて置かれている。また、69の北西側に隣接する土壙墓68は、全長185cmと他の2基に比べて小型であり、墓壙南西側に枕石と考えられる石が1個置かれている。これらの3基は、配置や埋土の状況から、同時期に築かれ、埋葬がなされたと考えられる。区画をなす溝5は、斜面の上側では浅い溝として残っているが、台状墓の南東側では段となってわずかにみられるのみである。区画の北東側では溝に並行して列石が鉤状に残る。列石は主に河原石からなり、40cm×20cm程度の石を縦に並べている。列石は北東側で2.5m、南東側で2m程度遺存しているが、両側でさらに続いていると推測される。方形台状墓の周囲2箇所、列石に沿った形で土壙墓54と土壙墓70が検出されている。土壙墓54は溝5内に位置する全長226cmの土壙墓で、小口溝や枕石などはみられない。土壙墓70は南東部の列石に沿って検出されたもので、幅が狭く、半分は削平により遺存していないため、土壙墓であるか判別が付きにくいが、ここでは土壙墓と判断した。

出土遺物は、溝5埋土からまとまった量の土器が出土している。1は長頸壺の頸部である。口縁部を欠き、頸部は4段に刻まれた鋸歯文と、その間に施された3段の沈線文で加飾さ



第34図 方形台状墓2（土壤墓54・67～70・満5）平面・断面図（1）

1. 緑茶褐色土
2. 緑茶褐色土（地山ブロック層）

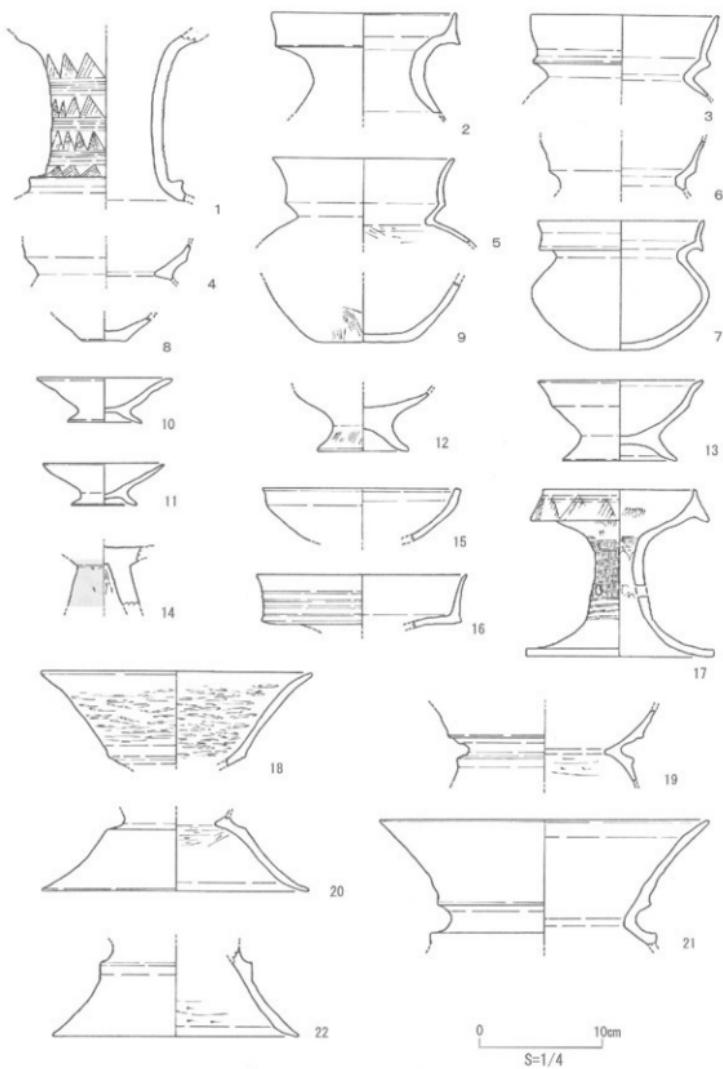


第35図 方形台状墓2（土壙墓67～70・溝5）平面・断面図（2）

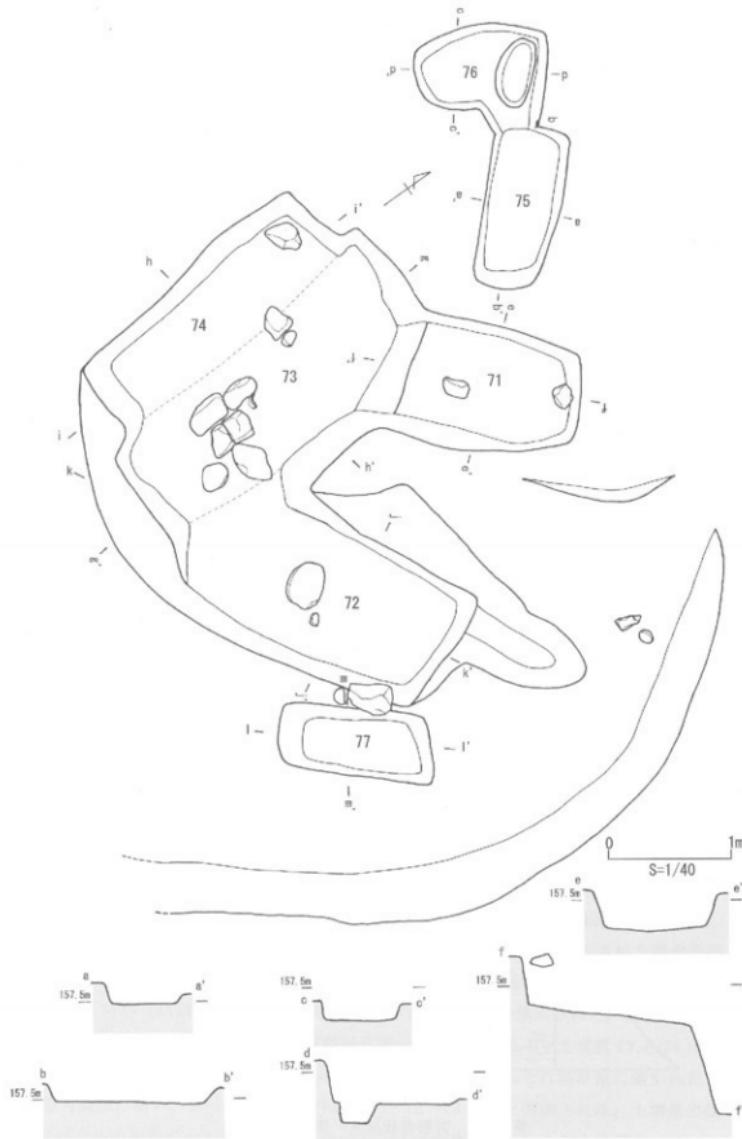
れている。2は二重口縁の短頸壺である。3～6は壺の口縁部で、やや外反あるいは外側に拡張する二重口縁をもつ。7は小型の壺である。10から13は低脚杯で、10はやや口縁部が外反し、11は口縁部が直線的に広がる。13の口縁部は坏部と口縁部との間に明瞭な稜をもつ。14、15は高杯の一部で、14の外面は丹塗りである。16は口縁部に沈線文が施されている。器台の口縁部と推測される。17は小型の器台で、口縁部が锯齒文で飾られる。脚部の3方向には円孔が穿たれている。18～22は鼓形器台である。いずれも筒部は短く太い。18の器受部は外面・内面ともヘラミガキが施されている。19、20、22は器受部の一部及び脚台部で、内面にヘラ削りが施されている。このほか、方形台状墓内の土壙墓67～69から小型の壺の口縁部片、及び土壙墓54から弥生土器の小片などが出土した。これらの土器は、1の長頸壺の頸部がわずかに上方に広がっていることや、17の器台の形態や、壺の口縁部形態などは後期中葉頃の特徴を備えているが、鼓形器台の筒部が短い点等、後期後葉の特徴をもつものもある。

方形台状墓3（第37～39図）

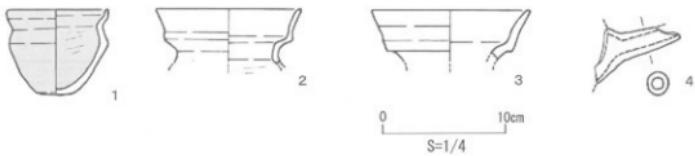
方形台状墓2の北西側に隣接して検出された方形台状墓である。方形台状墓2との間は溝ではなく段状の区画があり、斜面上側には方形台状墓1に伴う溝4がある。西側は削平されているため、全体の形状は把握できないが、隅丸方形の区画になると推測され、規模は、北東一南西6.4m、北西一南東6m以上になると考えられる。区画内で検出された埋葬施設は、土壙墓71～77の7基であり、小型の土壙墓75、76もこの区画内に入るものと推測される。土壙墓71～74は隅丸長方形の土壙墓4つが接した状態で検出された。土壙墓71は73に切られている。土壙墓71と72は主軸が北東一南西方向であり、土壙墓73と74は南北にほぼ主軸方向がほぼ同じで並列してみられることから、それぞれ同時期に築かれたものである可能性が高い。よって、築造順序は、71・72→73・74と推測される。土壙墓の規模は、ほぼ全体の形状が分かる土壙墓73が全長283cmを測る。これらの土壙墓内には、一辺20～30cm程度の河原石が墓床から浮いた状態で検出されているが、これらは斜面



第36図 方形台状墓2 溝5出土遺物



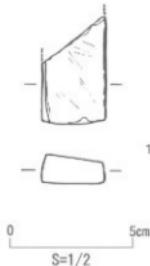
第37図 方形台状墓3（土壇墓71~77）平面・断面図



第38図 方形台状墓3 土塚墓73・74上層出土遺物

上からの転落石であるのか、元位置を保ち、墓標石のような役割をもつものであったかは不明である。

出土遺物は、土塚墓71～74の掘削中に出土した弥生土器が少數みられるほか、土塚墓73、74の上層で土器が出土している(第38図)。1は小型の甕で、外側と内面に丹塗りが施されている。実用品ではなく、ミニチュア品と考えられる。2、3は甕の口縁部と考えられる。いずれも外反する二重口縁である。4は注口土器の注口部である。また、土塚墓72からは砾石が出土している(第39図)。残存長は4.2cmである。これらの土器は甕の口縁部の形状から弥生時代後期後葉のものと推測される。



第39図 方形台状墓3
土塚墓72出土遺物

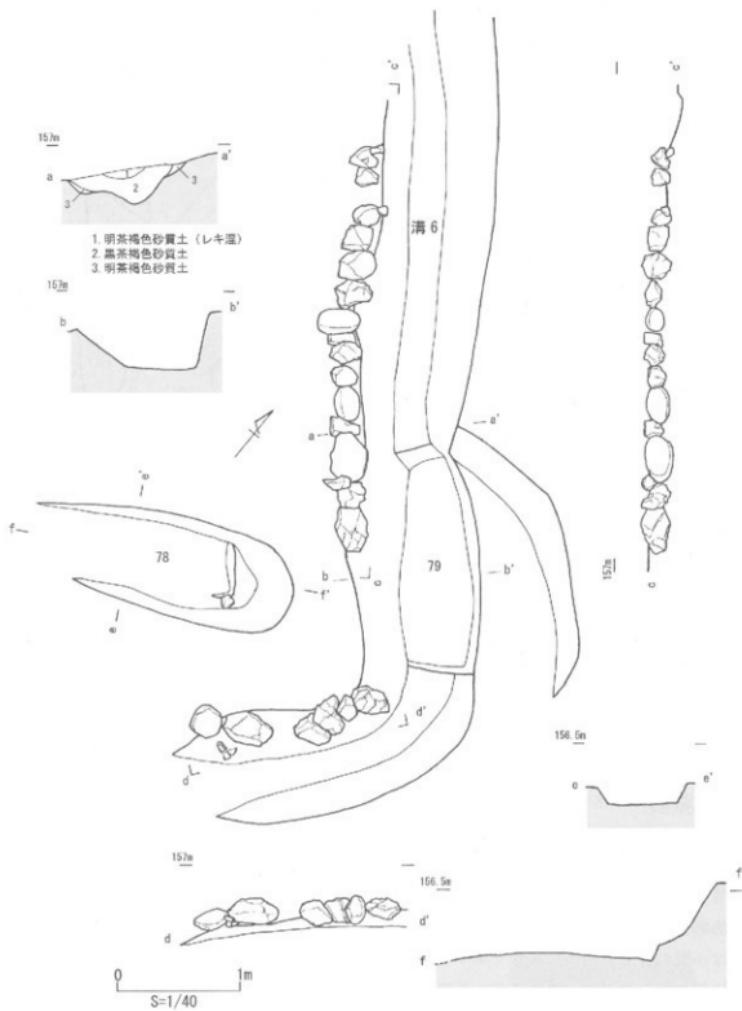
方形台状墓4(第40・41図)

方形台状墓3の斜面下に位置する方形台状墓で、南西側は削平を受けている。盛土はなく、地山を削り出して造成されたと推測される。規模は、北東-南西3.8m以上、北西-南東7m以上である。方形台状墓に伴う埋葬施設は土塚墓78のみであるが、中心からやや南東方向に寄っているため、本来は別に埋葬施設が存在していた可能性がある。小口部に僅かに段がみられるが、これが小口溝であるかは不明である。また、この段に接して10cm程度の石が1個検出されており、これが枕石の一つである可能性がある。方形台状墓4を区画する溝6は等高線に並行して掘削されており、南西に鉤形に曲がる。残存長7.5m、幅0.9～1mを測る。溝に沿って列石がみられ、遺存するのは等高線に平行した方向で3.4m、鉤形に曲がった南西部で1.6mである。方形台状墓3と異なり、河原石よりも角礫が多く使われ、また、石を縦にして並べるのではなく、横方向にして並べられている。

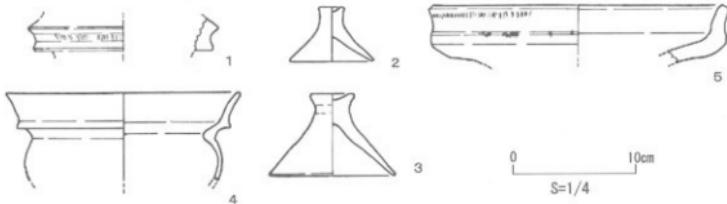
遺物は、溝6から弥生土器が出土している(第41図)。1は長頸壺の体部につけられた装飾部分と推測される。装飾部には爪形文のような刻目が施されている。2、3は蓋である。4は小型の甕で、外側に大きく開く二重口縁をもつ。5は高杯の口縁部と考えられる。端部に刻目がみられる。甕の形態から概ね弥生時代後期後葉のものと推測される。

溝7(第42・43図)

丘陵の北側斜面で検出された溝である。長さは約7.6m、幅は丘陵上位で1m、下位で2.5mを測る。溝は、上端は土塚墓58、59の北側から検出され、下端は調査区外に延びる。



第40図 方形台状墓4（土壤基78・79・溝6）平面・断面図



第41図 溝6出土遺物

溝の性格は不明だが、自然流路である可能性も考えられる。

出土遺物は、調査区北端部から出土した弥生土器の底部がある。上からの流れ込みと考えられる（第43図1）。

3. 丘陵頂部上層で出土した弥生土器（第44～52図）

本発掘調査によってみつかった方形台状墓内の土壙墓や、それ以外の土壙墓の埋土中からは出土遺物はほとんどみられなかったが、表土除去後の暗灰色土中から多数の弥生土器が出土した。遺物の大半はこの段階で出土したものである。これらの弥生土器は墓に供獻されたものと考えられるが、元位置をとどめているものはない。

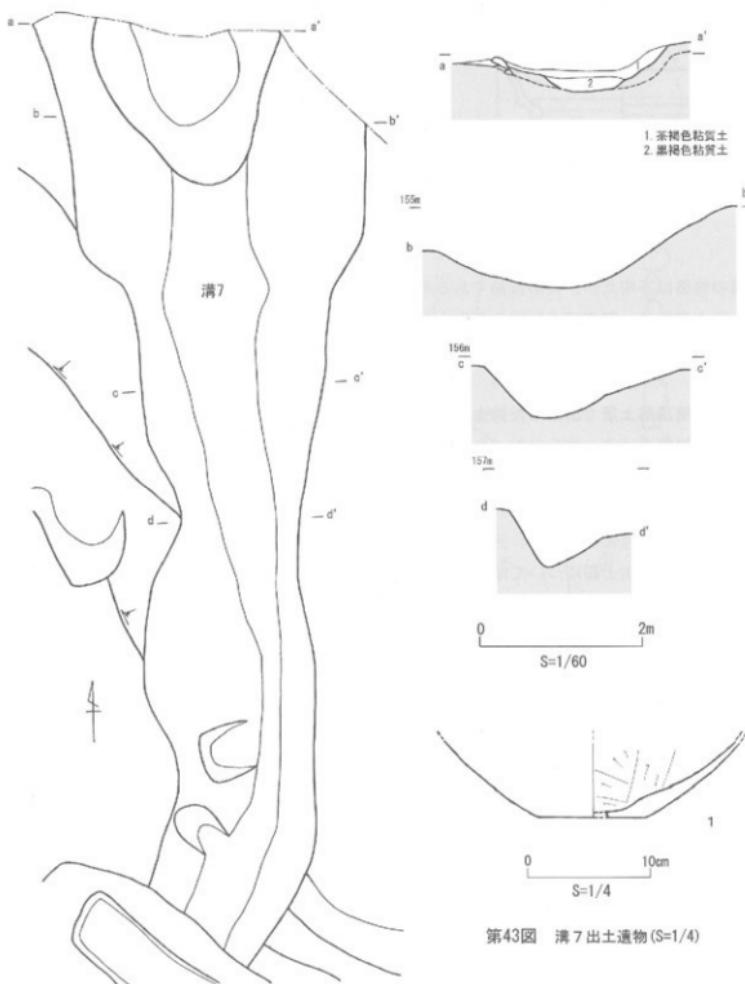
出土した弥生土器については、調査開始時に設定したアゼを境にして区分した区画ごとに報告する。

また、1997年に実施された試掘調査時に出土した土器についても、同じ丘陵上に設定されたトレンチであるため、ここで報告する。今回の調査との対応関係は、トレンチ1（＝A区）、トレンチ2（＝B区）、トレンチ3（＝C区）、トレンチ4（＝D区）となる（第44図）。

A区出土土器（第45図）

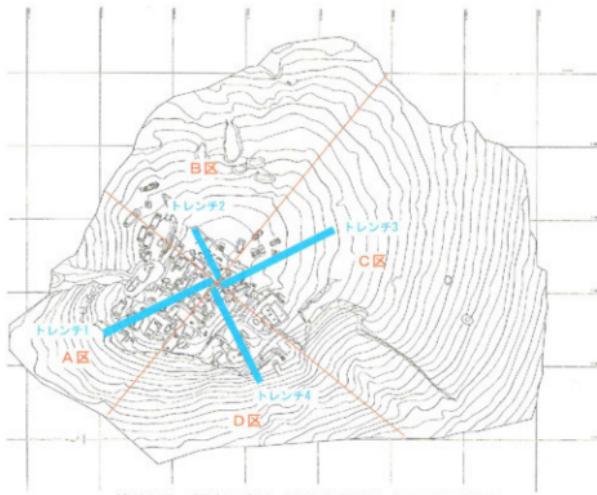
丘陵北側部分を中心に出土した土器である。1～5は高杯である。1は杯部の底に穿孔がなされている。脚部には4方向にスカシ孔がみられる。3、4の杯部は口縁部が大きく外反する。4の高杯は、口縁部の立ち上がり部分が段をなしており、円柱状の脚部をもつ。口縁部付近と杯部付近にそれぞれスカシ孔がみられる。スカシ孔は口縁部に4個×4箇所、杯部に2個×3箇所でみられる。5は短く直線的に開く高杯脚部である。6は壺あるいは甕の底部である。内面にヘラ削りがみられる。7～19は器台である。9、11は口縁部に大きく櫛描波状文が描かれ、10、12には鋸歯文が描かれている。15、16は器台の脚部中央付近で、15には突帯が巡らされている。16は長方形のスカシ孔が2段にみられる。17～19は小片であるが大型の器台の脚部である。

これらの土器は全体の判明しているものが少ないが、高杯3、4の器形などから弥生時代後期中葉～後葉と考えられる。



第43図 溝7出土遺物 (S=1/4)

第42図 溝7平面・断面図



第44図 調査区割と1997年調査トレンチ配置図

B区出土土器（第46図）

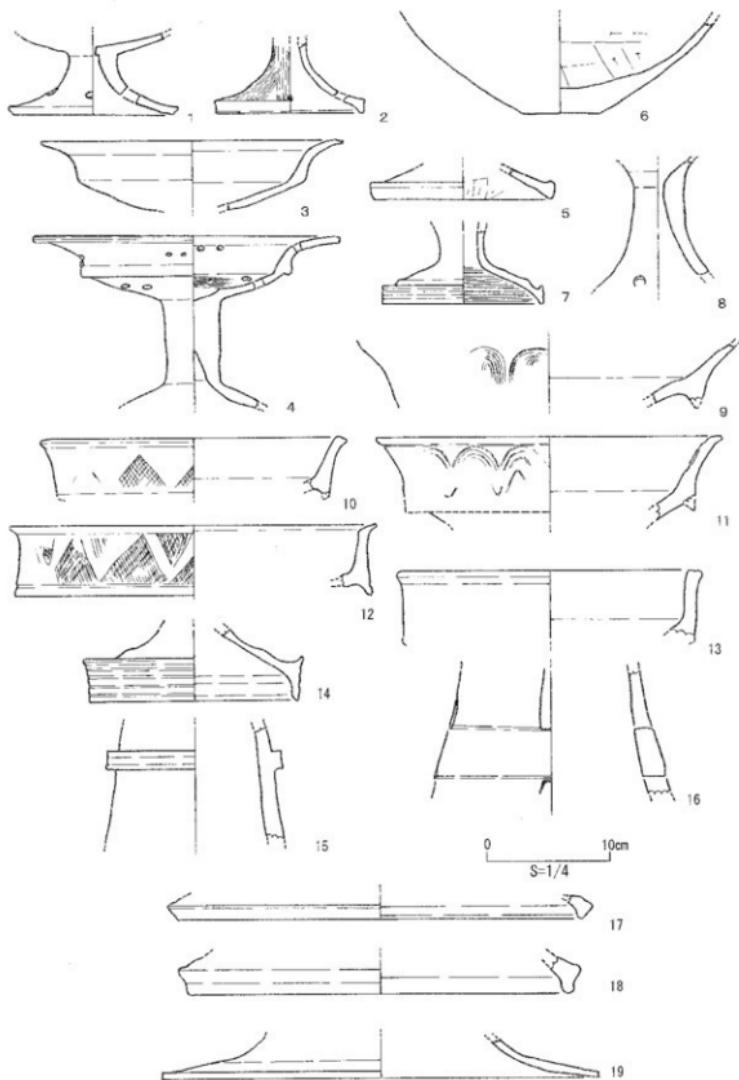
丘陵の西侧部分から出土した土器で、数量は遺構密度が高いA区に比べ少ない。1・2は壺の口縁部である。1は無頸のもので、上方に拡張している。3は口縁部を欠くが、長頸壺である。玉ねぎ形の体部をもつ。頭部は鋸歯文が残存部で4段にみられ、その間は沈線文が2条施されている。体部との屈曲部には突帯があり、その直下に刻目がある。体部最大径の部分にも突帯が2段に巡らされ、突帯部分に刻目が施されている。また、2段の突帯間に細い帯状の粘土帯が縦につけられている。この粘土帯は規則的ではなく、2箇所でみられる。5～8は器台の口縁部と考えられるが、7、8は長頸壺の口縁部になる可能性がある。6、8の口縁部及び7の頸部付近はいずれも鋸歯文で加飾されている。10は大型器台の脚部である。

上器の時期は、3の長頸壺が後期中葉頃と考えられる。残りは後期中葉～後葉の範疇に入ると考えられるが詳細な時期は不明である。

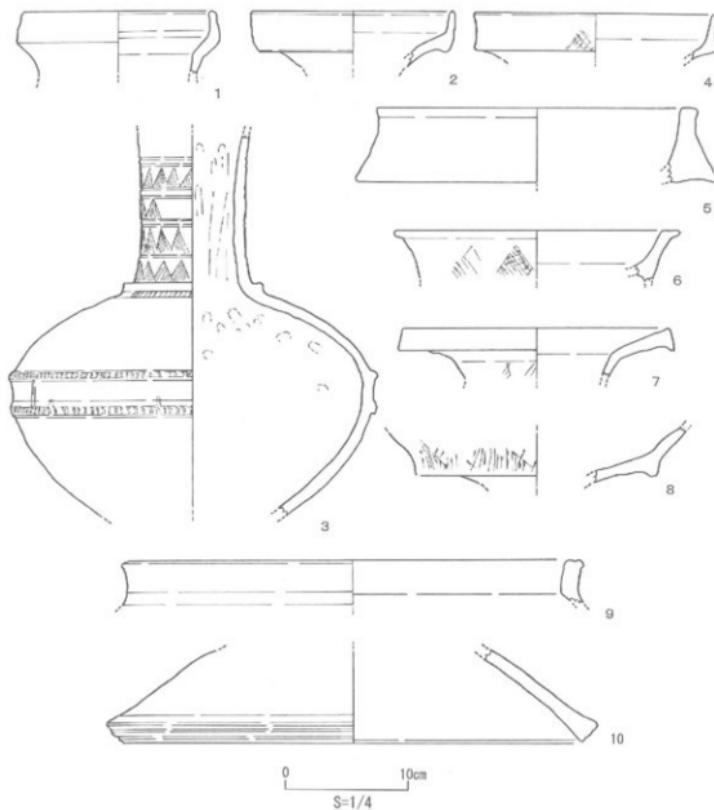
C区・D区出土土器（第47図）

丘陵の南半分を中心に出土した土器である。1、12、13は長頸壺である。1、12は口縁部を外側上方に大きく拡張させ、頭部に沈線文が施されている。13の底部には焼成後に孔が穿たれていることから、実用品ではない性格をうかがわせる。3、4は高杯の杯部と考えられる。3は口縁部の立ち上がり部分に明瞭な段をもち、外面は波状文やハートを変形させたような文様で加飾される。7は短脚の高杯で、脚部がハの字状に開く。8、10は器台あるいは壺の口縁部であり、鋸歯文が施されている。

これらの土器は弥生時代後期後葉に位置づけられる。



第45図 A区出土遺物



第46図 B区出土遺物

その他出土土器（第48図）

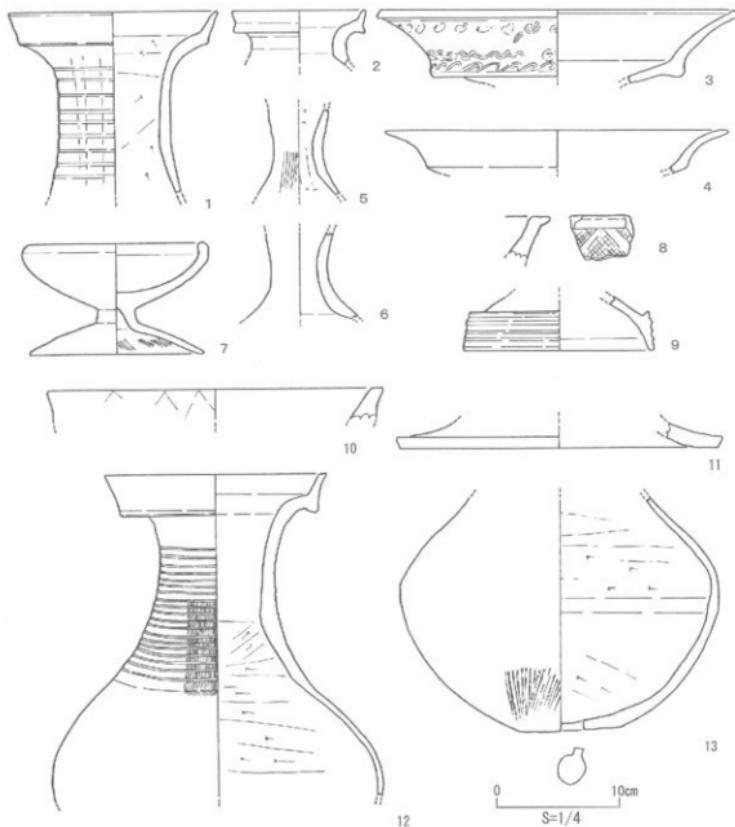
その他、丘陵頂部で出土した土器を掲載する。1の甕は口縁部が斜めに拡張される。2は小型の壺と考えられる。3、4は高杯で、脚部下半に円孔が穿たれている。5～7は器台と考えられる。7は特に大型品で、口縁部外面は渦巻き状のスタンプ文で加飾されている。

土器の時期は、1の甕が後期前葉の様相を呈する。それ以外のものについては後期中葉～後葉と考えられる。

4. 1997年試掘調査時出土の土器（第49～52図）

トレンチ1（A区）出土土器（第49図）

1は大きく外反する口縁部をもつ高杯である。2は高杯の脚部で、端部を拡張し、その



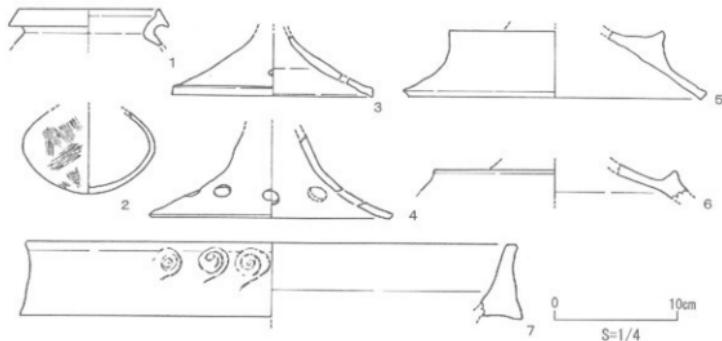
第47図 C・D区出土遺物 (1・3・12・13…C区、それ以外はD区)

上面に波状文が施されている。3～7は器台と考えられるものである。4は装飾器台の脚部である。突帯を2段に巡らせ、突帯上の中心部には波状文、上下端部には刻み目が施されており、装飾的要素の強いものである。突帯間にはスカシ孔が4方向にみられる。5～7は大型器台の口縁部及び脚部である。5の口縁部には波状文が大きく施されている。

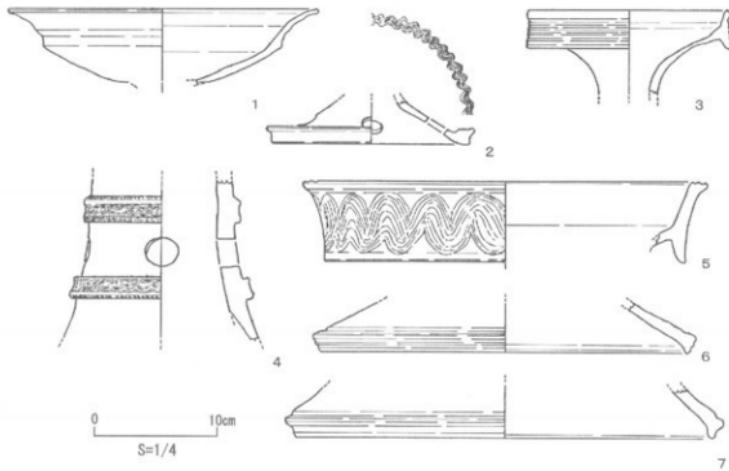
これらの上器は、明確に時期を判定するのは困難であるが、1の高杯の器形などから弥生時代後期後葉と考えられる。

トレンチ2（B区）出土土器（第50図）

1、3～5は器台である。1の口縁部には格子目の锯齿文が施される。4、5は大型器



第48図 その他の出土遺物



第49図 1997年調査トレンチ1（A区）出土遺物

台の脚部である。3は高杯と考えられる。

これらの土器の時期は、概ね弥生時代後期後葉に位置づけられる。

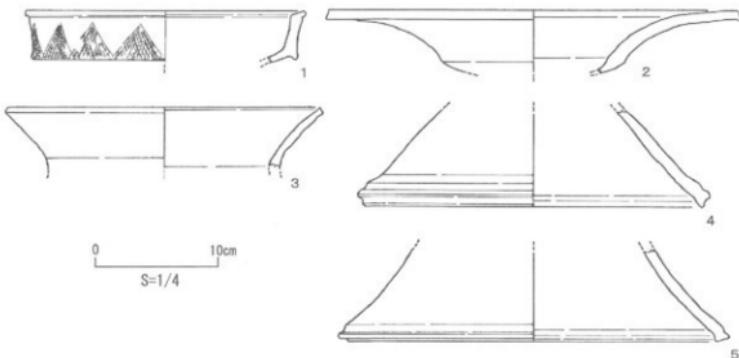
トレンチ3・4（C・D区）出土土器（第51図）

1、2は甌である。1は小型の手づくね土器で、ミニチュア品と考えられる。2の口縁部は斜め下方に拡張されている。3は低脚杯の脚部と考えられる。4、5は高杯で、いず

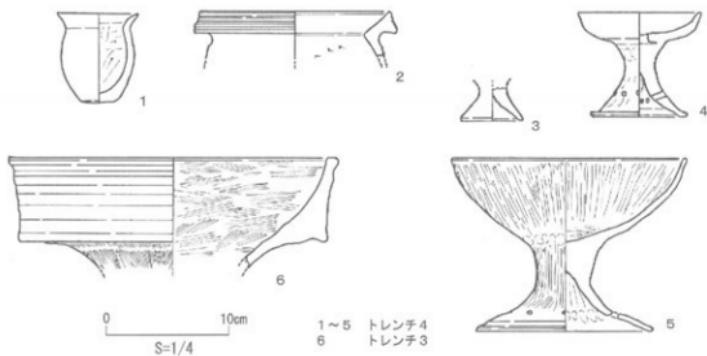
れも口縁部は拡張させず、まっすぐに立ち上がるものである。4は脚部の下端にスカシ孔が施されている。5の高杯も同様にスカシ孔がみられる。内面、外面とヘラミガキが丁寧に施され、杯部と脚部の境目部分の外面及び脚部の内面には指押さえの痕跡が見られる。6は大型器台の口縁部になると考えられる。外面、内面にハケ目が施されている。これらの土器のみでの時期は判断し難いが、2の甕の口縁部形態などはやや古い様相を呈しており、それ以外のものは弥生時代後期中葉頃に位置づけられよう。

その他の出土土器（第52図）

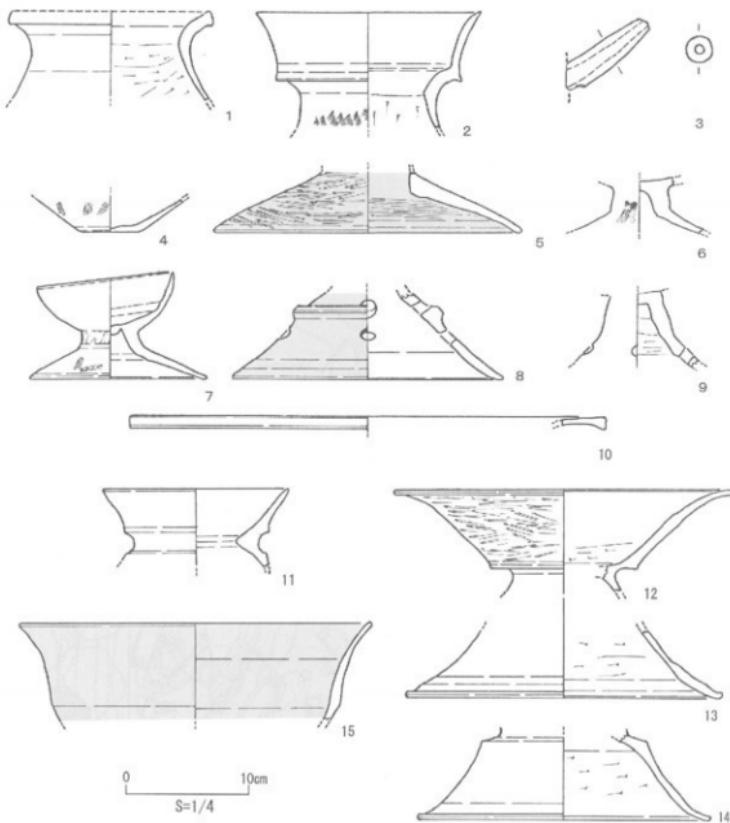
その他丘陵上で出土した土器である。1は甕の上部で口縁端部を欠くが、短く上方に拡張するものと考えられる。2は広口壺の口縁部で、大きく上方に外反する口縁部をもつ。



第50図 1997年調査トレンチ2（B区）出土遺物



第51図 1997年調査トレンチ3・4（C+D区）出土遺物

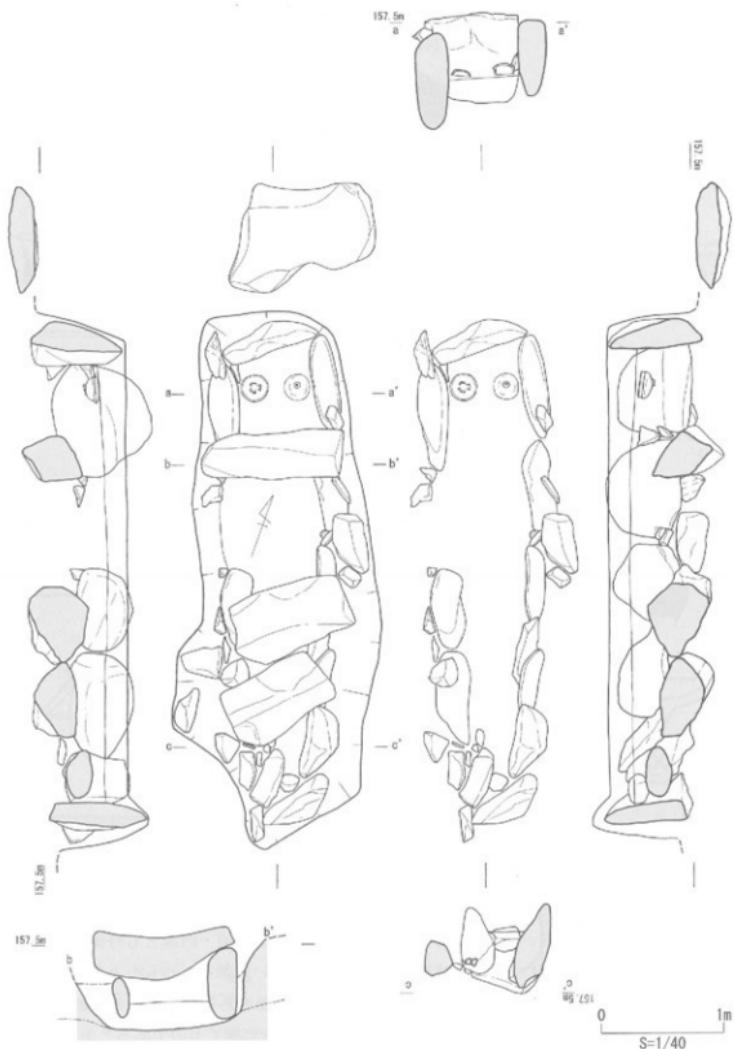


第52図 1997年調査トレンチ内その他出土遺物

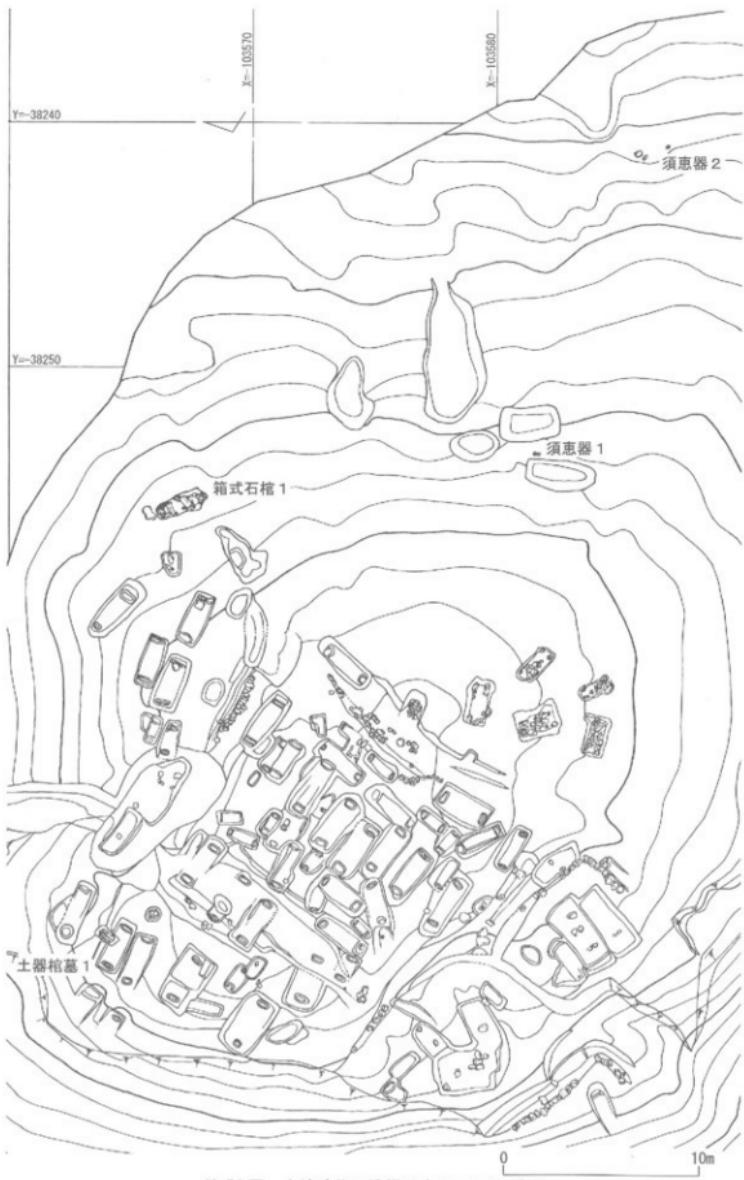
頭部には三角形のスタンプ文が連続的に施されている。3は注口土器の注口部である。5～9、15は高杯である。5～7は短くハの字状に開く脚部である。5は外面と内面丹塗りである。8はスカシ孔が4方向2段に施され、間に突帯が1条巡る。外面丹塗りである。15は高杯と考えられるが、器台である可能性も考えられる。外面・内面とも丹塗りである。10～14は器台である。11・12・14は鼓形器台で、太く短い頭部をもつものと考えられる。12は外面に丁寧なヘラミガキが施されている。13は鼓形器台あるいは器台の脚部である。

以上の土器は、2の二重口縁や、高杯脚部が短くハの字状に開くものであること、鼓形器台の頭部が短いことなどから、概ね弥生時代後期後葉に位置づけられると考えられる。(農島)

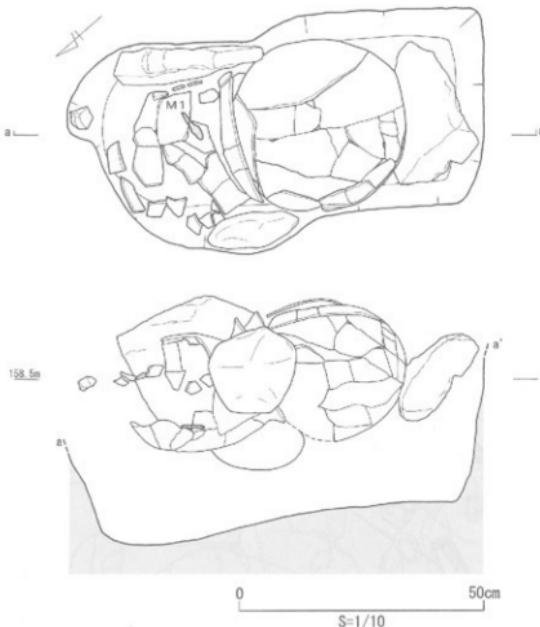
第3節 古墳時代の遺構と遺物



第53図 箱式石棺 1平面・断面図 ($S=1:40$)



第54図 古墳時代の遺構分布図 (S=1:250)

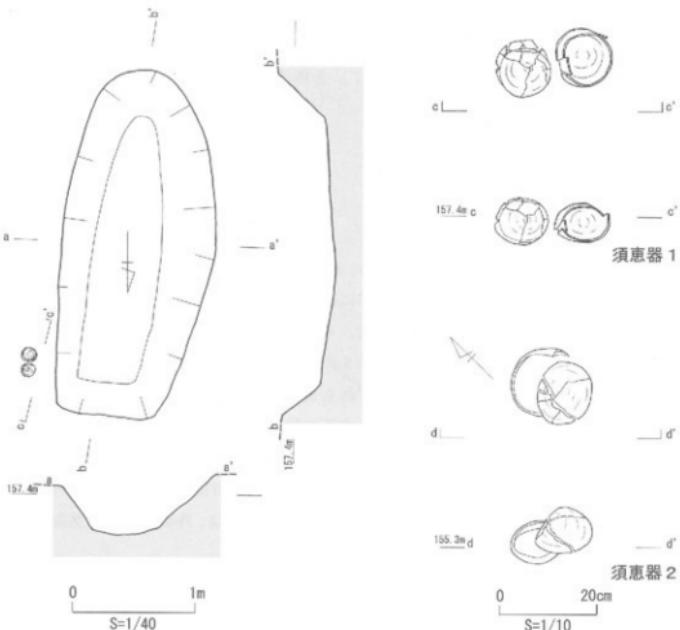


第 55 図 土器棺墓 1 平面・見通し図 ($\$=1:10$)

1. 遺構

箱式石棺 1 (第 53 図)

調査区の北東にて検出された。遺存状況はあまり良好ではなく、石棺の南側半分は擾乱を受けており、原位置から動いていると考えられる。また、蓋石及び側壁の一部の石材の移動と抜き取りが認められる。掘り方は現長約 4.3m、幅約 1.3m の不整形を呈する。石棺の内法は、現長 3.6m、幅 0.6m、高さ 0.2m を測る。石棺に使用されている石はいずれも自然石であるが、石棺小口と蓋石には山石を用い、側壁には山石と川原石を併用している。棺内出土遺物は少ない。北側小口から須恵器高杯の蓋と、脚部を打ち欠いた有蓋高杯が出土している。これらは枕と考えられ、頭位方向は北西であったと思われる。



第 56 図 須恵器 1・須恵器 2 出土状況 (S=1:40 S=1:10)

土器棺墓 1 (第 55 図)

土壙 16 を一部切る形で作られる。墓壙は現長 0.85m、幅 0.4m、高さ 0.3m を測り、円形と方形が 2 つくついたような形である。主軸は南西方向であり、墓壙の北側に土師器の壺を横に据え、南側から口縁を打ち欠いた須恵器の甕をはめ込み蓋としている。梢を固定するため、土師器壺頸部の墓壙床面側、須恵器甕底部の墓壙南西側、及び棺合わせ口の両側面の計 4 か所に石が置かれている。土器棺内からは、刀子（図面網掛け部）が 1 点出土している。

須恵器 1・須恵器 2 (第 56 図)

須恵器 1 は調査区の東側にて検出された。西隣に土壤が検出されているが、須恵器 1 は据えられた痕跡がなく、また、周囲から他に遺物も出土していないため、この土壤には伴わないと考えられる。身と蓋が計 2 セット分南北に並んで出土しており、北側は蓋を上にして杯身(第 57 図 4)と杯蓋(第 57 図 3)が組み合わせた状態、南側は杯蓋(第 57 図 5)が単独で上下逆さまになっていた状態であった。

須恵器 2 は調査区の東端にて検出された。須恵器 1 と同様の出土状況であり、また、周囲に遺構がなく、斜面からの出土であることから、丘陵の頂部から転がってきたものと考えられる。身を上にして、杯身（第 57 図 7）と杯蓋（第 57 図 6）が組み合わさるような状態で出土した。

2. 出土遺物

遺構に伴う遺物（第 57 図）

1 は須恵器高杯蓋、2 は有蓋高杯である。2 は枕として利用されたため、脚部が打ち欠かれており、復元できない。残存する脚部には、3 方向の台形のスカシが認められる。

3 から 7 は須恵器杯、3・5・6 が杯蓋、4・7 が杯身である。ヘラケズリの範囲は半分から 3 分の 2 ほどであり、6 はヘラケズリの後にナデている。口縁端部は 3 から 5 は段をもち、6・7 は丸く收める。焼成はいずれも良好である。

8 は土師器の甕で、くの字状でやや外反する口縁と球形の体部をもつ。口縁端部は丸く收め、体部外面にはハケメが、内面にはヘラケズリが施される。また、黒斑が認められる。

9 は須恵器の甕である。土器棺として利用される際に、口縁部を打ち欠かれている。頭部にはカキ目が施され、あまり肩のはらない長胴形の体部には、外面に平行タタキが施され、内面には同心円当て具痕と肩部にオサエが認められる。

M1 は刀子である。土師器甕 8（土器棺）内から出土しており、刃先部分が欠損している。棟線が少し湾曲する両開式で、開部分から茎尻にかけて幅を狭め、茎尻を丸く收める。茎には木質とともに樹皮状物で巻いた痕跡が認められる。長畠山北古墳群 3 号墳出土のものに類似している。

1 から 5、8、9 および M1 は古墳時代後期前半、6、7 は古墳時代後期後半であると思われる。

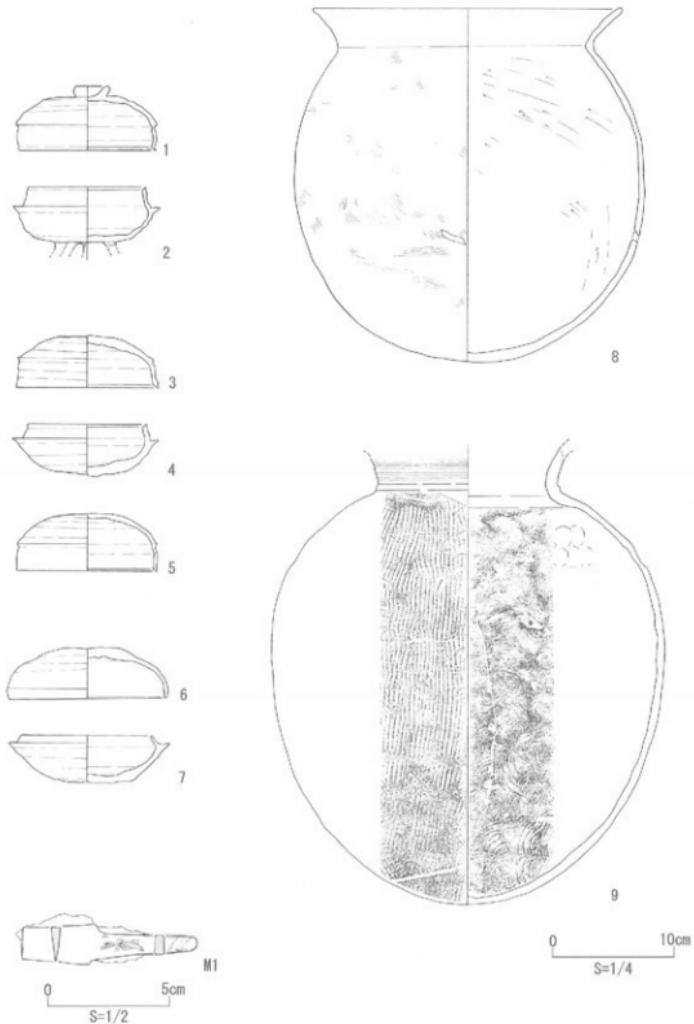
遺構に伴わない遺物（第 58 図）

1 から 6 は須恵器杯で、1 が杯蓋、2 から 6 が杯身である。1～3・5 でヘラケズリが認められ、範囲は半分強である。口縁端部の形状は 2 が段をもち、1・3 は内傾する面をもち、6 は丸く收める。焼成はいずれも良好で、4 は他に比べておおきめの作りである。

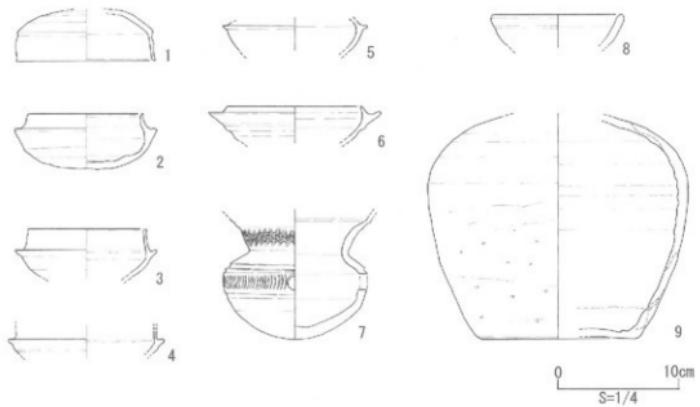
7 は須恵器甕である。頸部に櫛描波状文、肩部に沈線と刻み目文による装飾が施される。

8 は勝間田焼の碗で、口縁部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。9 は須恵器の甕で、おそらく短頸甕である。体部外面には上半部にヘラケズリ、下半部にヘラケズリの後ナデが、内面には横ナデが、底部外面にはナデ、内面には荒いナデが施される。

1 から 5、7 は古墳時代後期前半、6 は古墳時代後期後半、9 は 9 世紀頃、8 は 12 世紀頃であると思われる。この他図示できない遺物についてもおおむねこの時期に當てはまり、調査区の北側からの出土が多かった。



第 57 図 遺構に伴う遺物 (S=1:4 S=1:2)



第58図 遺構に伴わない遺物 (S=1:4)

3. 小結

箱式石棺1と土器棺墓1は、伴う須恵器から、須恵器編年のTK23・TK47に並行する時期であり、古墳時代後期前半と判断した。検出地点は離れているが、2基とも丘陵北側の緩やかな斜面上に立地する。出土遺物も少ないため、先後関係は不明であるが、埋葬時期にあまり差はないと思われる。

須恵器1も箱式石棺1らと同時期に属し、須恵器2は、同編年のTK209に並行する時期で、古墳時代後期後半と判断した。両者は遺構に伴ないものの、組み合わさった状態という出土状況から、何らかの人間活動があったと推定される。

また、遺構に伴ない遺物にも、古墳時代後期前半、後期後半の須恵器があり、やや時期が離れるが、9世紀頃の須恵器壺や、12世紀頃の勝間田焼の碗も出土している。

以上より、遺跡は古墳時代後期前半に北側斜面が墓域として利用され、その後も断続的に利用があったと思われるものの、遺構が検出されていないため、用途は不明であることがわかった。(宮崎)

参考文献

津山市教育委員会 1992『長歓山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

山田邦和 2011『須恵器の編年 西日本』『古墳時代の考古学』第1巻 同成社

第4節 まとめ

1. 黒岩遺跡弥生時代墳墓群の築造時期

黒岩遺跡の発掘調査では、弥生時代後期の方形台状墓を中心とした多数の土壙墓群や土器棺墓、及び古墳時代後期前半の箱式石棺や十器棺墓などが発見された。ここでは、遺跡の立地する丘陵上における遺構の変遷を追い、その性格について若干の考察を行う。

遺構の年代を考える上で最も有効な手がかりのひとつとなるのは出土遺物であるが、今回の発掘調査では、土壙墓に伴う土器がほとんどなく、土器以外の副葬品等もみられなかつたことが大きな特徴としてあげられる。よって、本遺跡の変遷を考える際には、表上直下から出土した多数の土器や、遺構の切り合い関係、及び遺構の特徴などを総合的に捉える必要がある。

黒岩遺跡で検出された埋葬施設は、方形台状墓、土壙墓群、及び上器棺墓などがある(第7~8図)。このうち、方形台状墓に伴う土壙墓及び周辺でみつかった土壙墓群については、その特徴から大きく4つの類型に分けられる。1. 土壙墓内及び墓壇上に石を配置したもの、2. 墓壇の両小口に溝をもつもの、3. 墓壇内の頭位に枕石のあるもの、4. 小口溝や枕石をもたないもの、である。1の配石墓はA群を中心とする土壙墓1~8がこれに該当すると考えられる。A群は丘陵の最高所から少し南東に下がったところにまとまってみられ、一部方形台状墓1の周溝と重複している。2の小口溝をもつものは木棺の小口板を墓壇床面に埋め込むものであり、土壙墓の大半を占める。方形台状墓1内の土壙墓については、土壙墓の重複により不明なものもあるが、ほぼすべてがこの類型である。また、台状墓に伴わないB群及びC群の土壙墓についても、C群の西側に位置する土壙墓58、59を除くほぼすべてがこの類型であることから、2の類型は、土壙墓群の中心的な埋葬類型であったことが分かる。3の枕石をもつ土壙墓は、小口溝をもたないものであることから棺形態は不明であるが、確実なものは方形台状墓2の埋葬施設である土壙墓67~69にほぼ限定される。方形台状墓2の周溝である溝5内の埋葬施設である土壙墓54や70については枕石はみつかっていない。4の小口溝や枕石をもたないものは、先の土壙墓54、70のほか、方形台状墓3の中心的埋葬である土壙墓71~74、77などがある。方形台状墓4の埋葬施設である土壙墓78、及び周溝内の79も、この類型になる可能性がある。また、C群の土壙墓58、59についても同様である。このように、黒岩遺跡でみつかった土壙墓の4つの類型については、その大半が墓壇に小口溝をもつ2の類型にあてはまり、丘陵からやや下がったところに位置する方形台状墓2は3の類型、方形台状墓3、4は4の類型となる。各類型については混在することなく、ある程度のまとまりをもってみられることが分かる。

それでは、これらの土壙墓群はどのような順序で築かれたのかを考える。方形台状墓1の南東部に位置するA群については、他の土壙墓群とは規模、構造が異なる一群と捉えられる。A群の土壙墓の規模は、いずれもほぼ全長2mを下回り、他の土壙墓群と比べて小さい。また、検出された土壙墓の大半を占める両側に小口溝をもつものはみられない。石

は墓壙床面から浮いた状態で検出されており、整然と並べられたものでなく、大小様々な石が集積しているような状態である。また、中には墓壙内の四隅に置かれたような状態で遺存するものもあり、これらの石については木棺の支えとなるための石である可能性が考えられる。墓壙内にみられる石は、検出状況から、墓壙上あるいは木棺上に置かれていた石が棺内に落ち込んだような状況である。

このような墓の形態は、「配石墓」あるいは「配石造構」と呼ばれ、中国地方では主に山陰地方や広島県北部地域などに分布している(註1)。これらの墓は、出土遺物から弥生時代前期後半～中期初頭に位置づけられる墳墓にみられる。山陰地方や広島県北部にみられる配石墓は、墓壙上あるいは墓壙に沿った形に石を並べているものが多くみられる。これらと比べると黒岩遺跡のA群にみられる土壙墓は石を並べたような状況ではない点において異なっている。

今回の調査で検出されたA群の土壙墓群が弥生時代前期後半から中期初頭の墳墓と同じ系譜のものであると考えると、美作では初めての例となり、本遺跡でみられる方形台状墓や土壙墓群が築かれたと考えられる後期より大きく遡ることになる。しかし、これらA群土壙墓の配置をみると、頂部から少しずれたところに位置しており、後につくられた方形台状墓1が丘陵の頂部を占めている。最初に作られた配石墓が丘陵の頂部に築かれなかつた点には疑問が残る。

このように、A群の配石墓が遺跡の大半を占める後期の土壙墓群に大きく先行する土壙墓群であることを示すのは困難であるが、類例から判断すれば、A群の土壙墓群は遺跡の存在する丘陵上に最初に築かれた土壙墓群である可能性が考えられる。今後、同様の例が周辺地で発見されることを期待したい。

次に、丘陵頂部と南斜面にかけて築かれた方形台状墓1～4と周辺の土壙墓群の時期について検討する。これまで述べてきたように、黒岩遺跡においては土壙墓埋土中からの出土遺物はほとんどなく、多くの土器は墳墓上に供獻された土器と推測されるが、上壙墓の個々の時期を判断するのは困難である。しかし、台状墓を区画する溝から一定量の土器が出土していることから、方形台状墓の時期をある程度推測することは可能である。丘陵上及び台状墓を区画する溝から出土した土器は土器柄など後期前葉に遡ると考えられるものもみられるが、中心となるのは弥生時代後期中葉～後葉のものである。器種は、壺、甕、尚杯、器台などが中心であるが、鰐歯文などの装飾されたものが目立つ。また、丹塗りのものや、ミニチュア品など、明らかに祭祀用と考えられるものも多い。このうち、造構に伴って出土した土器からみていくと、方形台状墓1の溝2や3から出土した土器は後期中葉のものが多く。方形台状墓2の溝5は後期中葉～後葉の土器、方形台状墓3、及び4に伴う溝6は後期後葉の土器が中心となっていることから、方形台状墓1が最も古く、次いで2、最後に3、4という築造順序が成り立ちそうである。

では、これらの墳墓群がどのように形成されたのか考えてみる。個々の築造の前後関係については土器からは判断し得ないが、各造構の配置や切り合い関係などからある程度の推測は可能である。造構の配置を考えると、まず丘陵の最も中心にあたる場所に最初に方形台状墓1がつくられたと考えるのが自然である。また、方形台状墓1の北西に位置する

B群については、B群の上墳墓群が方形台状墓1に伴う溝1が埋まった後に掘り込まれていることから、方形台状墓1が墓城を北西部に広げ、B群の土壇墓群が築かれたと考えられる。さらに、北東部に位置するC群についても同様に、墓城を広げたことにより形成されたのではないだろうか。

ただし、B群のうち、溝1よりも明らかに西側に位置する土壇墓群（土壇墓10、13～17など）については注意を要する。それは、これらの上墳墓群のさらに西側が削平されているためである。削平された西側部分にも埋葬施設が存在したと考えると、溝1が、方形台状墓1に伴うものではなく、方形台状墓1の西側に別の方形台状墓があり、それに伴う溝であった可能性も考えられるのである。西側の一帯が削平されており、明らかにすることはできないためここでは可能性を指摘するにとどめる。

丘陵南斜面に位置する方形台状墓2、3、4については、出土土器からは、方形台状墓2が若干古い様相を呈する上器があるものの、方形台状墓3、4については大きな時期差はみられない。方形台状墓1との関係をみると、方形台状墓1に伴う溝4を切る形で方形台状墓2が築かれていることや、出土土器の時期差から、方形台状墓2は方形台状墓1より後出すると考えられる。方形台状墓2と3の前後関係は明確ではないが、出土土器からは、方形台状墓3が少し新しい土器を含むことから、方形台状墓2よりも新しく位置づけられよう。この2基が築かれたのち、さらに斜面下に築かれたのが方形台状墓4であったと考えられる。しかし、土器に大きな時期差は見いだし難いことから、方形台状墓1～4については大きく時期を隔てることなく築かれたと考えられる。

また、丘陵上で検出された墓のうち、方形台状墓1の北西方向で検出された土器棺墓に使用されている甕は弥生時代後期前葉のものである。後期前葉の土器は出土はあるものの個体数はわずかであり、遺構としてみられるのは土器棺墓が唯一である。

古墳時代の遺構についてみると、箱式石棺及び土器棺墓があり、これらは後期前半に位置づけられる。丘陵下位にも須恵器の出土が複数個体みられることから、本来はもう少し多くの埋葬施設が存在したと推測される。黒岩遺跡の丘陵は、古墳時代前期から中期にかけての遺構がみられないことから、断絶した時期はあるものの、弥生時代後期を中心に、弥生時代中期頃から古墳時代後期まで集団墓地として長く利用されていたことが分かる。

2. 黒岩遺跡弥生墳墓群の特質（第59・60図）

黒岩遺跡で発見された土壇墓群は、列石あるいは溝によってつくられた区画内あるいは区画外にまとまった状態で検出されている。これらの多くは墓壇の両小口部に溝をもつもので、もとは木棺が安置されていた墓壇であったと考えられる。これとは別に、方形台状墓2、3、4の方形区画内の埋葬施設は、方形台状墓1と異なり小口溝をもたないものであり、方形台状墓2には頭位部分に枕石を置くものである。この埋葬の違いは、どのような要因からなのか、周辺地域の例をとりあげて検討する。

美作地域における弥生時代墳墓群の主な例として、三毛ヶ池遺跡（津山市）、下道山遺跡（同）、有本遺跡（同）などが挙げられる。

三毛ヶ池遺跡は下層に中期後半の方形台状墓1基、上層に後期前半の土壇墓がそれぞれ



第 59 図 美作地域の弥生時代墳墓群 1
1. 三毛ヶ池遺跡下層墓 2. 下道山遺跡土壙墓群

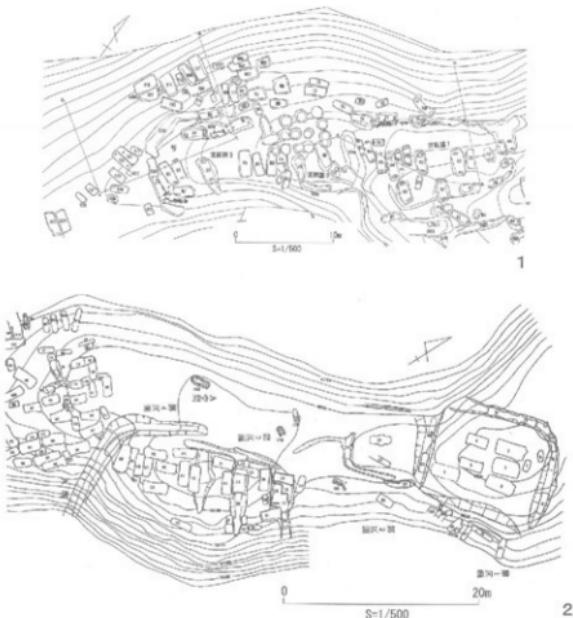
築かれている。中期後半のものは削平をうけているものの方形の区画を削り出しており、区画内外に合計 34 基の土壙墓がある。土壙墓のほとんどが黒岩遺跡同様小口溝をもつもので、一部もたないもの、墓壙内に石を立てているものなどがある（小郷 1993）。

下道山遺跡は丘陵尾根上に築かれた後期前半の墳墓群である。方形台状墓 2 基と、そこから緩やかに傾斜した斜面に土壙墓群 120 基あまり、及び土器棺 6 基が形成されている。埋葬施設は方形台状墓の 1 号墓の中心に 2 基あり、2 号墓には中心に 8 基と裾部に 2 基の計 10 基みられる。土壙墓の形式は 2 号墓の一つは小口溝をもたないものであるが、それ以外は小口溝をもつものである。斜面の土壙墓群については、100 基あまりが小口溝をもつもので占められる（栗野・岡本 1977）。

中期後半の三毛ヶ池遺跡の下層方形台状墓や、後期前葉の下道山遺跡の方形台状墓及び

土壇墓群については、主流となるのが小口溝をもつものであり、その中に小口溝をもたないものが少數みられるという様相を呈している。また、方形台状墓内に複数の埋葬施設をもち、その中に副葬品や規模等で突出したものがみられない。これらの点については後期中葉～後葉の墳墓群である黒岩遺跡についてもいえることである。美作地域の墳墓群においては小口溝をもつもの、つまり木棺の小口板を支えるための溝をもつものは弥生時代中期から後期にかけてみられる埋葬形態であるといえる。さらに、複数の土壇墓の中に副葬品や規模で突出したものがなく、均一的な集団墓地のあり方を示している点も共通しているといえる。

黒岩遺跡と同時期と考えられる弥生時代後期後半の墳墓群としては、有本遺跡がある。有本遺跡は、後期中葉から後期後葉の区画墓3基、及び土壇墓群102基が南北方向の丘陵尾根筋に築かれている(第60図1)。区画墓3基の埋葬施設の数は、それぞれ23基、2基、13基である。土壇墓群には、小口溝をもつもの、小口溝をもたないもの、小口溝をもたず枕石があるもの の3類型の土壇墓があることが判明している。区画墓以外の土壇墓は、分布状況から大きく9つのグループに分けられ、尾根の南から小口溝のないグループ→小口溝のあるものとないものが共存するグループ→小口溝のないグループ→枕石があるグル



第60図 美作地域の弥生時代墳墓群2
1. 有本遺跡土壇墓群(部分) 2. 中山遺跡A調査区土壇墓群

一帯と位置していることが指摘されている（小郷 1998）。さらに、枕石のあるグループの北側には古墳時代前期の有本古墳群が位置しており、古墳群の埋葬施設は枕石をもつ。枕石のもつものは県南部の大規模な弥生時代の墳墓群であるみその遺跡などにもあり、後期後葉（報告書ではⅢ期の終わりとある）に出現することから、小口溝をもつものと小口溝のないもの→枕石をもつものとして、これらの埋葬施設の違いが時期差によるものであることを指摘している（註2）。一方、山陰弥生墳墓の埋葬施設について論及した岩橋孝典氏は、福永伸哉氏の先行研究に基づき、墓壙の両小口に溝をもつもの、片側だけのもの、小口溝をもたないもの、木棺の両側板が小口板から大きく突出するもの、とに分類し、各遺跡における棺形態の割合を詳細に検討している。その結果、地域ごとの差異はあるものの、時期的な推移としては、小口溝のあるものは前期から後期後葉まで継続して使用されるが、後期以降、小口溝をもたない型式のものがもつものを凌駕し、古墳時代初頭には小口溝をもつものがみられなくなることを指摘した（岩橋 2007）。

以上のように、岡山県内及び山陰の事例からは、時代が下るとともに小口溝をもつ形態からもたない形態のものへ緩やかに推移している状況がみて取れる。

黒岩遺跡の土塚墓群についてみると、方形台状墓1が小口溝を有する土塚墓を主流とするのに対し、丘陵斜面に築かれた方形台状墓2は小口溝をもたず、枕石をもつもの、3は小口溝をもたず、枕石ももたないものをそれぞれ埋葬施設の主体としている。先述のように、方形台状墓の築造についてはあまり期間を置くことなく築かれたと推測されるため、時期差によるものと即断できない。これを示すものとして四辻土塚墓群（赤磐市）があげられる。四辻土塚墓群は、1基の方形台状墓とその周間に多数の土塚墓群を配する遺跡であり、出土した土器から弥生時代中期中葉から後葉を中心とした集団墓地であることが判明している。このうち、B地区に存在する方形台状墓には23基の埋葬施設があり、小口溝を有するものが11基、枕石をもつものが8基みられる（註3）。同じ台状墓内に2つの類型の埋葬施設が存在している例である（神原 1973）。

時期差によるものではないとすれば何に因るのだろうか。福永伸哉氏は弥生時代墳墓における木棺形式の差異について類型化し、遺跡において主流となる木棺型式と、それ以外の少数派の木棺形式がみられるこことを指摘し、出土土器の中に他地域産の土器が含まれることなどから、木棺型式の違いは被葬者の出自の違いを表すことを論じた（福永 1985）。黒岩遺跡から出土した土器には他地域からの搬入土器はみられず、在地産のものと考えられるため、木棺墓型式の違いと枕石の使用・不使用について、出自の違いと判断するのも困難である。

黒岩遺跡においては、各墳墓に時期的な違いはあまりみとめられない上、各墳墓ごとにほぼ同じ木棺形態を採用していることから、同一の丘陵を墓地として利用した大集団の中に、埋葬方法が異なる小集団が複数存在していたとは考えられないだろうか。異なる埋葬形態を採用する背景は明らかでないが、その小規模な集団こそが最も強い結びつきをもつたまとまりであったと推測される。

次に、黒岩遺跡における集団墓地の特質について検討する。黒岩遺跡において出土した土器は、丘陵の掘削埋土中全体から出土したものである。このことから、埋葬行為を行う

際に各土壙墓に供えられたというより、むしろ集団全体の埋葬行為に対して供えられたものという印象を受ける。これは土壙墓の中に、大型のものはみられるが、それが中心となるような突出した規模のものではないことにも関係していると考える。有本遺跡の土壙墓についても、各方形台状墓における中心となる埋葬は想定されるが、それが突出した規模あるいは副葬品をもつものではない。

同じ県北部の弥生時代後期後葉の集団墓地である中山遺跡を見る（第60図2）。中山遺跡は丘陵の尾根筋に築かれた墳墓群で、墓域の中心となるA調査区とC調査区で土壙墓がみつかっている（山崎編 1978）。A調査区では4基の区画墓及び区画の外に多数の土壙墓がみられ、その総数は198基である。土壙墓は、小口溝をもたないものが大多数で、枕石のあるものも一定数みられる。土器は弥生時代後期末～古墳時代初頭のものが多く出土しており、特殊器台も出土している。特殊器台は集団墓地の祭祀に使用されたと考えられる状況で出土しており、特定の突出した勢力の存在を伺わせるものではない。

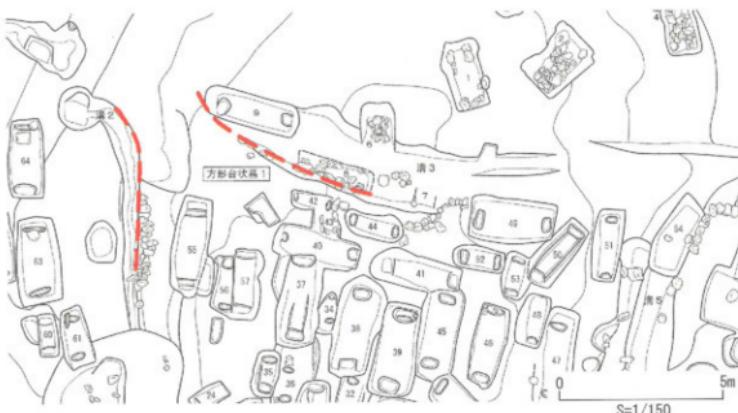
以上のように、県北部の集団墓地における祭祀のあり方として、弥生時代後期後葉から後期末においても突出した勢力の存在を墓からうかがうことはできず、比較的均質な埋葬が行われていることが特徴としてあげられる。特殊器台が独立した勢力の墓と考えられる墳丘墓に使用される岡山県南部地域とは、この点において大きく異なると言えよう。

黒岩遺跡でみられる個々の土壙墓には副葬品がほとんどなく、台状墓全体に供獻されたとされる土器からは、黒岩遺跡の台状墓に埋葬された人々の強いまとまりをみることができる。また、とりわけ突出した墓がいまだこの地にはみられず、集団の墓地として営まれていたことが推察される。なお、これらの人々の居住地である集落跡は判明していないが、大きくは離れていないものの、墓地とは別の丘陵上に存在していたのかもしれない。

方形台状墓1が四隅突出型墳丘墓である可能性について（第61図）

黒岩遺跡における方形台状墓1については、墓の周囲4辺に溝が巡らされており、方形を呈しているため方形台状墓とした。しかし、溝はすべてが完全な形で残っておらず、端部は不明瞭な箇所が多い。溝1は、方形台状墓1に伴う溝としては他の溝2～4と比べて規模が大きいことや、西側に土壙墓群が存在することなどから別の台状墓に伴う溝である可能性を先に記した。溝2～4をみると、流出している箇所はあるがいずれも溝の内側（台状墓側）に列石を伴っている。列石をみると、溝2の列石が北東端でわずかに張り出しており、溝3の列石についても北東に向かって張り出している。溝3は内湾しており、南東端についても張り出した形状を呈する。この形状から、方形台状墓1が山陰地方を中心で分布する四隅突出型墳丘墓である可能性が考えられるのではないかだろうか。

四隅突出型墳丘墓については、近年の調査事例の増加に伴い多くの研究がなされている。四隅突出型墳丘墓の特徴である隅部の張り出しについては、弥生時代中期中葉から中期後葉に三次盆地を中心とする中国山間部や日本海沿岸部に分布する、貼石による区画をもつ方形貼石墓にその系譜をもとめる考えがある（註4）。突出部には貼り石や縁石によって通路が表現されており、山陰にみられる多くの四隅突出型墳丘墓にはこの施設が存在する。四隅突出型墳丘墓と方形貼り石墓の区別については、方形貼石墓の隅部稜線上にみられる



第61図 方形台状墓1の東隅部

石列が発達し、墳丘の貼り石から飛び出したものを四隅突出型墳丘墓の指標とする見解がある（仁木 2007）。また、方形周溝墓の溝が隅でとぎれている部分を聖域と外界とを結ぶ通路と捉え、これが発達をとげた結果、突出部になるとみる考え方もある（都出 1974）。

この他に、突出部に貼り石や縁石をもつ典型的な四隅突出型墳丘墓ではないが、石を用いずに貼り石や列石のないスペースを作ることによって道を表現したものもあり、これを四隅突出型墳丘墓とする考え方もある（藤田 2010）。黒岩遺跡の方形台状墓1における隅角部分は、貼り石や列石はないが、北東部分の隅角部については通路を意図したと考えられるスペースである可能性がある（第55図赤点線部分）。また、内部の埋葬施設の配置をみると、他の多くの土壙墓が等高線に平行または直交する向きで配置されているのに対し、南東隅の土壙墓50、南西隅の土壙墓28・30、北西隅の土壙墓24、25などは斜め方向に配置されている。この配置は、隅部の張り出しを意識したものであると考えられないだろうか。

美作地域において四隅突出型墳丘墓の可能性があるものとしては、これまでに竹田8号墓（鏡野町）、門の山1号墓（津山市）などがあげられている。竹田8号墓は、墳墓内部には土壙墓14基と土器棺墓4基があり、半分が遺存しているのみであるため全容は不明であるが、四隅突出型墳丘墓とする根拠として、墳丘裾部南西端にみられる列石が張り出している点があげられている。墳墓の時期は上器から後期初頭のものと考えられている（鏡野町教育委員会 1984）。門の山1号墓は箱式石棺3基をもつ台状墓で、裾部に列石をもつ。時期が明確ではないが、列石の形状が四角形でなく五角形状に配列されている（近藤・中島 1952）。2例とも列石が四隅突出型墳丘墓風に張り出しているが、典型的な四隅突出型墳丘墓にみられるような張り出し部をもたないため、慎重な検討をする。

このように美作地域における四隅突出型墳丘墓の存在は依然として不明確ではあるが、少なくとも岡山県北部に出土する土器からは山陰地方の影響をみることができることから、

その影響下で四隅突出型墳丘墓が採用されたとしても違和感はない。今回の調査によって発見された方形台状墓1にみられる列石のあり方が四隅突出型墳丘墓といえるのか、また、四隅突出型墳丘墓であるとすれば丘陵の中心に築かれ、墳墓内部に34基もの土壙墓をもつこの台状墓と、他の方形台状墓2～4との集団関係はどのようなものであったのか、周辺地の例を踏まえて検討すべき課題である。(豊島)

註

- (1) 例として、鳥取県松江市友田遺跡や、広島県北広島町岡の段C地点遺跡などがある。友田遺跡は、弥生時代中期から後期の墳墓群である。検出された配石墓は、副葬品や、覆土から出土した弥生土器の年代から後期前半を中心とした時期のものとされている。岡の段C遺跡は、河岸段丘上に位置する集落遺跡で、約100基の土壙墓がみつかっている。出土した土器等から、配石墓は弥生時代前期のものとされている(岡崎他 1983、梅本編 1984)。
- (2) 有本遺跡、みそのお遺跡(岡山市)のほか、弥生時代後期の集団墓地がみつかっている前山遺跡(総社市)においても、同様のことが指摘されている(正岡 1997)。
- (3) 小口構をもち、かつ枕石をもつ土壙墓も1基みられる。
- (4) 桑原隆博 2005、野島永 1991、藤田憲司 2010 などがある。

参考文献

- 岩橋孝典 2007 「山陰弥生墓制の検討と四隅突出型墳丘墓の特質」『四隅突出型 墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥取県古代文化センター
- 梅本治 1984 『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(IV)』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第132集) 財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター
- 岡崎雄二郎他 1983 『友田遺跡』『松江園都市計画事業乃木地区調整事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会
- 小郷利幸 1993 『三毛ヶ池遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集) 津山市教育委員会
- 小郷利幸 1998 『有本遺跡 男戸嶋古墳 上追戸嶋遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集) 津山市教育委員会
- 鏡野町教育委員会 1984 『竹田墳墓群』(竹田遺跡発掘調査報告第1集)
- 栗野克己・岡木寛久 1977 『下道山遺跡緊急発掘調査概報』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(17)) 岡山県文化財保護協会
- 桑原隆博 2005 「四隅突出型墳丘墓の新展開」『季刊考古学』第92号
- 神原英朗 1973 『四辻土壙墓群・四辻古墳群』(岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(3)) 岡山県赤磐郡山陽町教育委員会
- 近藤義郎・中島壽雄 1952 「門の山第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市
- 都出比呂志 1979 「古墳出現期の社会」『考古学研究』第26卷3号 考古学研究会
- 仁木聰 2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥取県古代文化センター

野島水 1991 「京都府北部の貼り石方形埴丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集 第2集』財團法人

京都府埋蔵文化財調査研究センター

福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻1号 考古学研究会

藤田憲司 2010 『山陰弥生埴丘墓の研究』日本出版ネットワーク

正岡睦夫 1997 「前山遺跡 錐戸原遺跡」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 115) 岡山県教育委員会

山崎康平編 1973 『中山遺跡』落合町教育委員会

表1 黒岩遺跡土壙墓一覧表

番号	平面形	墓壁上面		墓底底		深さ	主軸方向	等高線	小口溝	小口溝距離・最大長	遺物	備考
		長さ	幅	長さ	幅							
1	隅丸方形	188	96	146	66	40	N-79°-E	斜交	×	—	A群・配石塗	
2	隅丸方形	178	114	137	68	37	N-17°-E	直交	×	—	A群・配石塗	
3	隅丸方形	176	76	157	70	35	N-44°-E	直交	×	—	A群・配石塗	
4	隅丸方形	166	85	141	62	36	N-73°-E	平行	×	—	土器	
5	隅丸方形	122	67	100	48	35	N-26°-E	直交	×	—	A群・配石塗	
6	隅丸方形	120～	95	80	64	(9)	N-60°-E	直交	×	—	A群・配石塗が(清3に切られる)	
7	長方形か	20～	53	—	50	26	N-56°-E	直交	×	—	A群・配石塗か	
8	長方形	193～	62～	—	—	N-40°-E	直交	×	—	A群・配石塗か		
9	長方形	266～	88	212	73	60	N-42°-E	直交	○	182・50	方形合状墓1周内	
10	長方形	260	156	235	126	71	N-56°-E	直交	○	180・60	B群・墓表面が一部段になる	
11	長方形	126	70	111	56	17	N-82°-E	直交	○	82・28	土器	A群
12	長方形	96	59	81	45	14	N-56°-E	直交	×	—	B群・上部墓1を切る	
13	長方形	260	148	234	120	76	N-55°-E	直交	○	187・48	土器	B群
14	長方形	152～	95	145～	67	60	N-53°-E	直交	○(片)	—・67	B群・西側は削平	
15	長方形	80～	83	75～	75	49	N-53°-E	直交	○(片)	—・38	B群・西側は削平	
16	長方形	237	91	204	70	50	N-64°-E	直交	○	170・52	B群・上層に古墳時代七輪捨石	
17	長方形	230～	92	215	77	28	N-65°-E	直交	○	190・47	B群	
18	長方形	220～	73～	215～	58～	(6)	N-50°-E	直交	○	190・55	B群・横1を切る	
19	長方形	228～	103	206	80	80	N-54°-E	直交	○	182・43	B群・横1を切る	
20	長方形	140～	64	125～	35	(28)	N-32°-E	平行	×	—	B群・溝1を切るか	
21	長方形	247～	96	215	75	63	N-17°-E	平行	○	165・55	B群・横1を切るか	
22	長方形	235～	145～	115～	12	N-64°-E	斜交	○	176・64	B群・溝1を切る		
23	長方形	135～	76	130～	70～	20	N-59°-E	平行	○	93・53	豈群・横1を切る	
24	長方形	105～	55	91	40	18	N-1°-E	直交	○(片側)	—・10	方1	
25	長方形	133～	35	124	40	13	N-21°-E	直交	○	113・29	方1	
26	長方形	242	88	216	69	40	N-37°-E	直交	○	180・31	方1・横1を切る	
27	長方形	212～	93	187	75	56	N-40°-E	直交	○	165・50	方1・1・横墓31を切る	
28	長方形	205～	96	203～	83	35	N-73°-E	斜交	○	160・48	方1	
29	長方形	98	46	82	30	18	N-46°-E	平行	○	75・28	方1	
30	長方形	85～	77～	75～	50～	32	N-80°-E	斜交	×	—	方1	
31	長方形	102～	86	92～	55	14	N-73°-E	平行	○(片)	—・40	方1	
32	長方形	108～	70	109～	66	14	N-44°-E	平行	○	90・30	方1	
33	長方形	216	90	198	70～	17	N-65°-E	平行	○	174・43	方1	
34	楕円形	115	49～	100	45～	21	N-53°-E	平行	○	66・22	方1	
35	長方形	132	70	103	47	40	N-52°-E	平行	○	80・40	方1	
36	長方形	205	123	180	97	36	N-57°-E	平行	○(片)	—・30	方1・土壙塗33を切る	

番号	平山形	墓壇上面		墓壇底		深さ	土軸方向	等高線	小口群	小口溝距離・最大長	遺物	備考
		長さ	幅	長さ	幅							
37	長方形	260	112	250	73	72	N 55° -E	平行	○	206・63	土器	方1・墓壇底に段がある
38	長方形	282	115	230	85	48	N-52° -E	平行	○	190・48	方1	
39	長方形	254	110	210	97	50	N 53° -E	平行	○	205・68	方1	
40	長方形	233	85	205	65	54	N-40° -E	直交	○	190・29	方1・上横墨43を切る	
41	長方形	240	92	208	62	46	N-42° E	直交	○	185・40	方1	
42	長方形	116	48	105	35	12	N 40° -E	直交	○	95・30	方1	
43	長方形か	55～	74	55～	62	17	N-58° -E	斜交	—	—	方1・河原石あり(浮いた状態)	
44	長方形	167	62	137	40	30	N 41° E	直交	○	120・32	方1	
45	長方形	266	101	253	88	44	N-49° -E	平行	○	180・49	方1	
46	長方形	222	90	207	75	35	N-50° -E	平行	○	190・54	方1・南東小口に石(浮いた状態)	
47	長方形	300	120	258	65	54	N 58° -E	平行	○	185・50	方1	
48	長方形	145	78	126	45～	12	N-51° -E	平行	○(片側)	* 28	方1	
49	長方形	224	122	210	98	56	N 32° -E	斜交	○	190・52	方1	
50	長方形	214	83	196	62	56	N-31° -E	斜交	○	166・48	土器	方1・墓壇底に段がある
51	長方形	198	78	176	45～	48	N-54° -E	平行	○	155・30	方1	
52	長方形	140	64	117	42	34	N-38° -E	斜交	○	93・43	方1	
53	長方形	126	70	106	45～	25	N-48° -E	平行	○	94・37	土器	方1
54	長方形	226	92	183	72	28	N 39° -E	平行	○	—	土器	方2の周溝内
55	長方形	269	104	240	76	45	N-61° -E	平行	○	192・55	方1	
56	長方形	166	50～	142	32～	30	N-55° -E	平行	○	120・35	方1	
57	長方形	188	74	166	55	47	N-53° -E	平行	○	150・60	方1	
58	長方形	210	75	184	60	38	N 54° -E	平行	×	—	C群・中心に石(浮いた状態)	
59	長方形	280～	140～	265～	98～	35	N-50° -E	平行	×	—	C群・石(列石の転落か)	
60	長方形	119	53	100	37	14	N 68° -E	平行	○	85・35	C群	
61	長方形	165～	77	157～	60	48	N-70° -E	平行	○	105・35	C群	
62	長方形	217	95	202	86	35	N-68° -E	平行	○	168・55	C群	
63	長方形	236	117	204	82	58	N 68° -E	平行	○	170・60	C群・墓壇東側に石(浮いた状態)	
64	長方形	216	98	191	84	30	N-66° -E	斜交	○	175・58	C群・墓壇東側に石(浮いた状態)	
65	長方形	284	107	230	72	12	N 46° -E	平行	○	165・63	C群	
66	長方形	266	85	230	64	42	N-67° -E	平行	○	190・50	B群	
67	長方形	304	120	274	100	84	N-32° -E	直交	×	—	土器	方2・南西側に枕石
68	長方形	185	55	163	35～	76	N 52° -E	直交	×	—	土器	方2・南西側に枕石
69	長方形	350	162	280	120～	100	N-53° -E	直交	×	—	土器	方2・南西側に枕石
70	長方形	160～	46	150～	38	30	N-43° E	直交	○(片)	—	—	方2の周溝内
71	長方形	142～	100	132～	80	56	N-46° -E	直交	×	—	—	方3
72	長方形	233～	120	220～	100	54	N-60° -E	直交	×	—	砾石	方3
73	長方形	283	130～	244	104～	96	N 5° -E	平行	×	—	土器	方3
74	長方形	230	62～	197	50～	88	N-10° -E	平行	×	—	上器	方3
75	長方形	137	63	116	53	16	N-42° -E	平行	×	—	方3	
76	横円形	110	64	92	52	36	N-35° -E	直交	○(片側)	- 56	方3	
77	長方形	124	53	94	35～	36	N 40° -E	平行	×	—	—	方3
78	楕円形	216～	89	185～	60	56	N-61° -E	直交	○(片側)	- 46	方4	
79	長方形	186	65	167	56	44	N-44° -E	平行	×	—	—	方4の周溝内

* 小口溝の「片」は、片側のみに小口窓があり、もう一方は不明なもの。「片側」は片側のみにあるものをいう。

* 備考の「方1」は方形台状墓1、「方2」は方形台状墓2、「方3」は方形台状墓3、「方4」は方形台状墓4を指す。

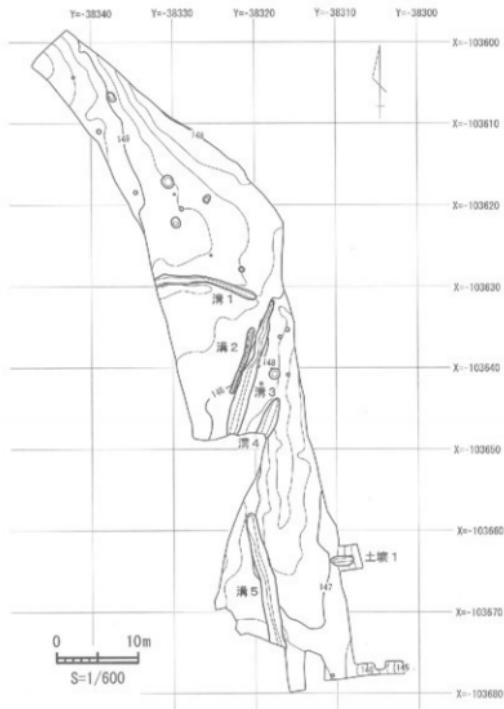
第8章 追坊師B遺跡

第1節 遺跡の概要

追坊師B遺跡は、津山市領家 1378-1 に所在し、新クリーンセンター建設予定地の南東端の丘陵上に位置している。遺跡の範囲の標高は約 145 ~ 149m である。

遺構は、溝 5 条と土壙 1 基を検出している。これらの遺構から土器片等が数点出土しており、時期は奈良時代から江戸時代末のものである。

なお、その他に数基の土壙及び柱穴と思われるものを検出しているが、遺物等の出土がなく詳細は不明である。これらのものについては、第 1 図の遺構配置図にて位置のみを記している。(平井)

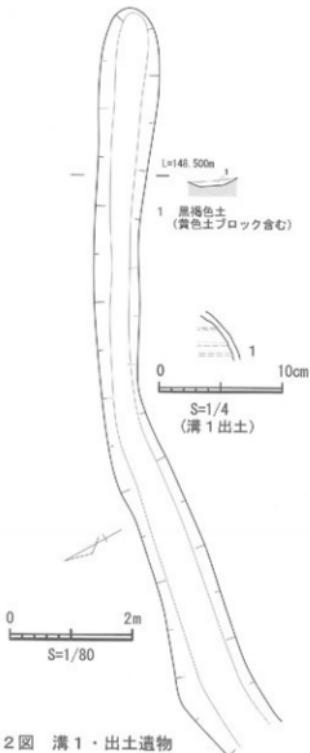


第1図 追坊師B遺跡遺構配置図

第2節 検出された遺構と遺物

溝1（第2図）

調査区の中央部に位置し、東西に流走している。溝の東側は浅くなり途切れしており西側は調査区外にのびる。溝の幅は、60～110 cmを測り、深さは5～18 cm程度残存していた。遺物は1の磁器製の総利で19世紀中ごろのものであろう。

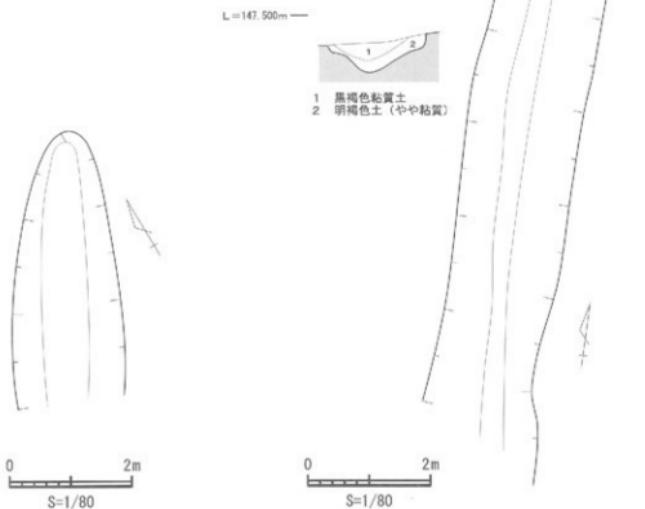


溝2（第3図）

調査区中央部に位置し、概ね南北に流走している。南及び北端で浅くなり途切れている。溝の幅は、50～70 cmを測り、深さは5～15 cm程度残存していた。遺物は2の勝間田焼の椀で、底部に糸切痕が残る。古代末から中世にかけてのものと考えられる。

溝3（第3図）

調査区中央部に位置し、溝2に接して概ね南北に流走し、溝の北側は浅くなり途切れており、南側は調査区外にのびる。溝の幅は60～160 cmを測り、深さは11～34 cm程度残存していた。遺物は3の勝間田焼の壺で、底部は平底で内外面ともに横方向のナデを施している。古代末のものであろう。



第4図 溝4

第5図 溝5

溝4（第4図）

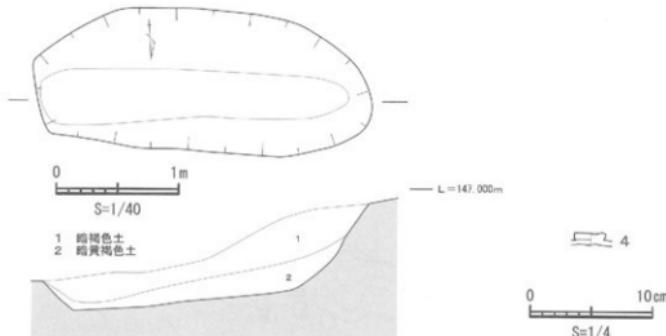
調査区中央部に位置し、溝の幅は、100～180 cmを測り深さは、24～45 cm程度残存していた。溝の大部分が調査区外に存し、遺物もなく詳細は不明である。

溝5（第5図）

調査区南側に位置し、概ね南北に流走している。溝の北側は浅くなり途切れており、南側は調査区外にのびる。溝の幅は、130～210 cmを測り、深さは、25～57 cm程度残存していた。遺物の出土はなく、詳細は不明。

土壤1（第6図）

平面形が120～280 cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20～45 cmを測る。遺物は4の須恵器の坏蓋のつまみ部分が1点のみ出土しており、外面は横方向のナデを施す。奈良時代前半のものであろう。



第6図 土壌1・出土遺物

第3節 まとめ

今回調査した調査区では、検出した遺構及び出土遺物が少なく詳細な遺跡の様相を明らかにすることことができなかった。

遺構は奈良時代から江戸時代にかけてのものであるが、集落の形成は見られず、土地利用は限定的なものであったと思われる。（平井）

表1 追坊師臼遺跡遺構一覧表

土塁

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	床面幅 (cm)	深さ (cm)	床面標高 (m)	時期
溝1	逆台形	60~110	30~60	5~18	148	19世紀中頃
溝2	輪の底形	50~70	15~20	5~15	149	古代末~中世
溝3	楕の底形	60~160	20~70	11~34	147~148	古代末
溝4	楕の底形	100~180	50~70	24~45	147	
溝5	楕の底形	130~210	30~80	25~57	146~147	

土塁

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
土塁1	橢円形	280	120	20~45	奈良時代前期	

表2 追坊師臼遺跡遺物観察表

土器

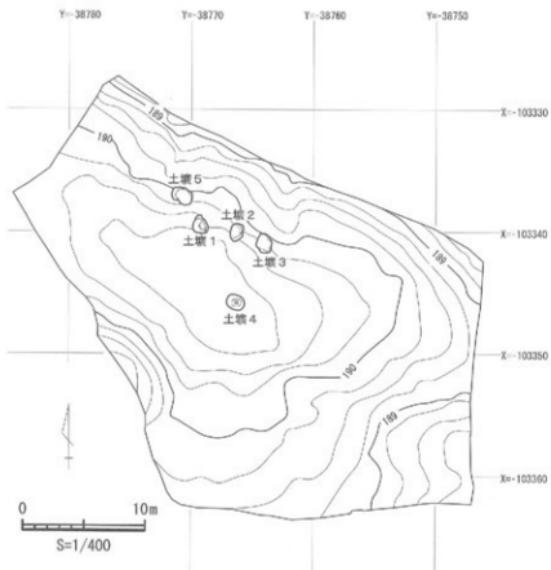
掲載番号	遺傳名	器種	計測値 (cm)			色調	形態・手法の特徴	備考
			口径	底径	鉢高			
1	溝1	壺				灰白色		
2	溝2	壺			(6, 0)	綠灰色	内外：ヨコナデ 底に糸切痕	
3	溝3	壺				明緑灰色	内外：ヨコナデ	
4	上塙1	坪壺 (つまみ)				青灰色	ヨコナデ	

第9章 城山遺跡

第1節 遺跡の概要

城山遺跡は、津山市領家 1446 に所在し、畔田遺跡・追坊師A遺跡・黒岩遺跡・追坊師B遺跡が所在する丘陵と谷を隔てて向かい合う独立した丘陵の頂部に位置している。遺跡の範囲の標高は約 188 ~ 190m である。

遺構は、調査区北側斜面に貯蔵穴と考えられる土壙 4 基を検出し、そのうち 2 基の土壙から人骨が出土した。調査区中央付近の丘陵尾根上では落し穴と考えられる 1 基の土壙を検出した。遺構はこれらの土壙 5 基のみであり、遺構、遺物とともに局所的な検出にとどまっている。また、事前に行った試掘調査でも本遺跡周辺では、他に遺構、遺物は確認されていない。(平井)



第1図 城山遺跡遺構配置図

第2節 検出された遺構と遺物

土壤 1 (第2・3図)

調査区の北斜面に位置する。平面形は $100 \times 135\text{ cm}$ のやや不整な円形を呈し、残存する深さは、最深部で 175 cm を測り、断面形がいわゆる袋状の土壤である。また、この土壤の床面に床面中心から東側の場所に平面形が $80 \times 80\text{ cm}$ の円形を呈し深さが最深部で 110 cm を測る土壤が掘られている。

土層観察からは、この土壤は人為的に埋められた状況は確認できなかった。しかし床面からの土壤については、分層ができなかつたが、基盤層の土がブロック状に含まれ、明らかに堆積状況が異なり、床面からの土壤は人為的な埋戻しが想定される。

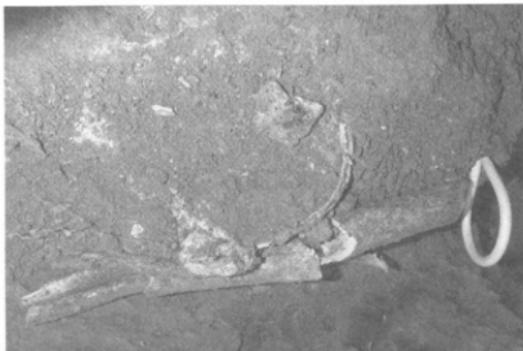
遺物は 1・2・3 の壺、壺及び人骨である。人骨は床面からの土壤より出土しており、鑑定の結果、人骨は 1 個体で年齢不詳ながら女性の可能性があることが分かった。また、人骨の出土状況からは、骨を丁寧に並べて置いたような状況が確認され、一同での埋葬もしくは埋没では、このような出土状況になるとは考えにくいため、再葬が行われた可能性も考えられる。

なお、埋葬施設としての痕跡（例えは墓標的なもの）は検出されていない。

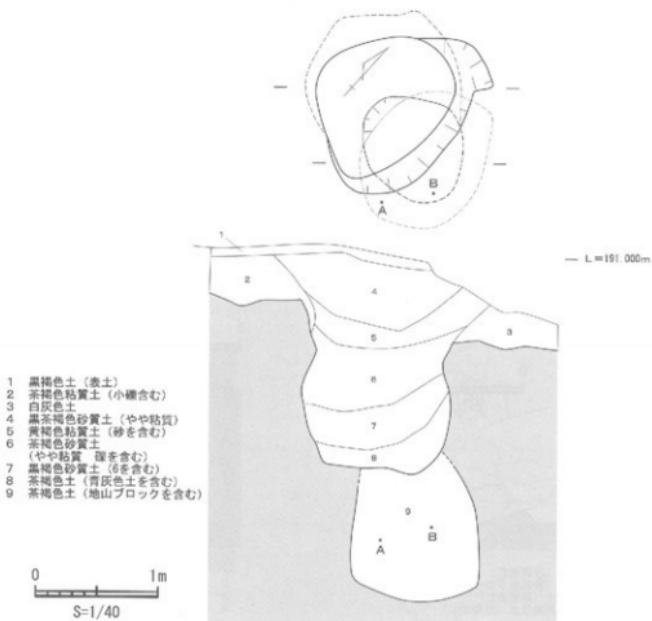
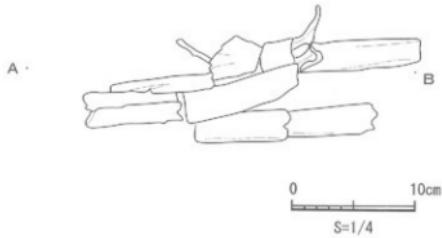
遺物の特徴から土壤の時期は、弥生時代後期後葉のものであろう。



第2図 土壤 1 出土遺物



挿図写真 1 人骨出土状況



第3図 土壠1・人骨出土状況

土壤2（第4図）

調査区の中央部分北側に位置する。平面形は $110 \times 145\text{ cm}$ の不整形な円形を呈する。残存する深さは最深部で 95 cm を測り、断面形はいわゆる袋状を呈する。

土層観察からは、第1・2・3層が埋戻しもしくは埋没後改めて掘り返されたものと考えられる状況が確認できた。

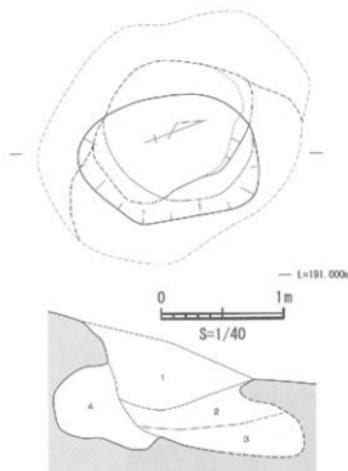
この土壤からは、遺物の出土はないが、周囲の状況から見て、他の土壤と大差ない時期に、貯蔵穴として利用されていた土壤と考えても差し支えはないであろう。

土壤3（第5図）

調査区の中央部分北側に位置する。 $130 \times 150\text{ cm}$ の不整形な円形を呈する。残存する深さは、最深部で 110 cm を測り、断面形はいわゆる袋状を呈する。

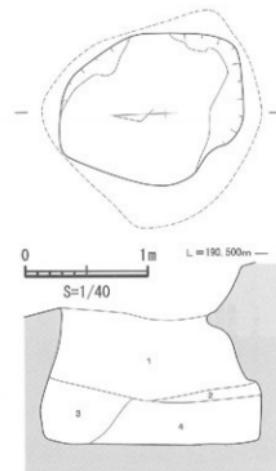
堆積土の下半は基盤層の土がブロック状に入る水平堆積であり人為的かつ短期間の埋戻しが考えられるが、土壤1、5のように人骨等は出土しなかった。

この土壤からは、遺物の出土はないが、周囲の状況から見て、他の土壤と大差ない時期に、貯蔵穴として利用されていたと考えても差し支えはないであろう。



- 1 茶褐色土（砂礫含む）
- 2 茶褐色土（黄褐色ブロック含む）
- 3 褐茶褐色土（砂礫含む）
- 4 やや緑茶褐色土（砂礫含む）

第4図 土壤2



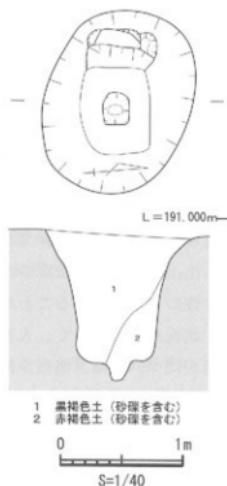
- 1 茶褐色土（砂礫含む）
- 2 黒褐色土（1のブロック含む）
- 3 茶褐色土（地山ブロック含む）
- 4 黒褐色土（1ブロック含む）

第5図 土壤3

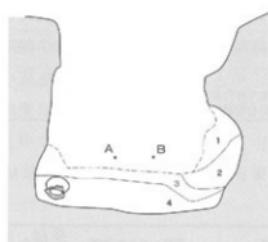
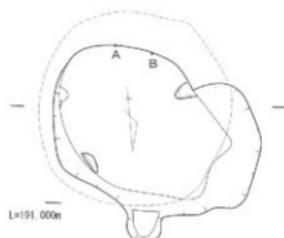
土壤4（第6図）

調査区中央付近の丘陵尾根上に位置する。周囲に同様の土壤ではなく単独での検出である。床面中央にピットを伴う。平面形は120×147 cmの楕円形を呈し、残存する深さは、105 cmを測る。床面のピットは径22～26 cm、土壤床面からの深さは15 cmを測る。

遺物は出土していないため、遺構の時期は判然としないが、このような遺構は、一般的には縄文時代のものと考えられるものが多く、そのころの落穴としての機能を持つものであろう。

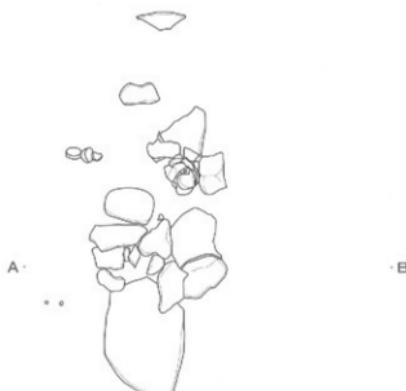


第6図 土壌4



- 1 黄褐色土（地山ブロック含む）
- 2 明顯褐色土（地山ブロック含む）
- 3 明顯褐色土（より暗色）
- 4 明顯褐色土（より暗色 一部黒褐色土層を含むが分離不可）

0 1m
S=1/40



第7図 土壌5・人骨出土状況

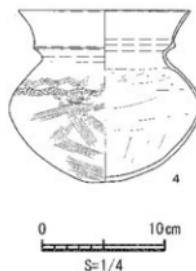
土壤5（第7・8図）

調査区の北西部に位置し、平面形は125×175cmの不整形な円形を呈する。残存する深さは、最深部で165cmを測る。断面形は、いわゆる袋状を呈する。

土層観察からは、第1・2層は基盤層の土がブロック状に堆積しており、人為的な埋戻しが想定される。

出土遺物は、4の甕と人骨である。人骨は3層上面から出土しており、鑑定の結果成年から壮年前半の女性の可能性があることがわかった。しかし、出土状況が良好でなく、人為的に埋葬されたものか否かについては、明らかにできないが、前述の土層観察から考えると、土壌の埋没過程のくぼみを利用した埋葬も否定できない。

遺物の特徴から土壤の時期は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭頃のものであろう。



第8図 土壤5出土遺物

表1 城山遺跡遺構一覧表

土壤

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壤1	不整形な円形	135	100	175	弥生時代後期後葉 から古墳時代初頭	床面に掘られた土壌あり(80 ×80cm 円形 深さ110cm) 人骨出土
土壤2	不整形な円形	145	110	95		
土壤3	不整形な円形	150	130	110		
土壤4	楕円形	147	120	105		断面中央にビットあり
土壤5	不整形な円形	175	125	165	弥生時代後期後葉 から古墳時代初頭	人骨出土

表2 城山遺跡遺物観察表

土壤

掲載番号	遺構名	器種	計測値(cm)			色調	形態・手法の特徴	備考
			口徑	底径	高さ			
1	土壤1	甕	(10.6)		(10.6)	橙色	外:ハケ 内:ヘラケスリ	
2	土壤1	甕	(11.3)			灰白色	内:ヘラケスリ 外:ヨコナガ	
3	土壤1	甕	(11.5)			灰白色	内:ヘラケスリ 外:ヨコナガ	
4	土壤5	甕	14.0		14.1	濃い黄褐色	内:ヘラケズリ 外:ハケ (波状文)	

第3節 城山遺跡出土骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

城山遺跡（岡山県津山市に所在）の発掘調査では、弥生時代後期後半の可能性がある土壙1（以下SK1という。）と弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土壙5（以下SK5という。）から人骨が出土している。今回の分析調査では、2基の土壙から出土した人骨について形態学・解剖学的観察を行い、部位および性別等、出土人骨に関する情報を得る。

1. 試料

人骨資料は、SK1とSK5から出土した人骨片である。SK1の人骨は、頭蓋骨の上に大腿骨が存在する状況で検出されている。SK5は、袋状の断面をした土壙で、土壙底面上50cmから出土している。出土骨は、現地収上後、表面の泥をクリーニングした後、番号を付けてアルミホイルで包み、ビニール袋にて保存されていた。SK1が12試料（No.①～⑩・⑪・⑫）、SK5が13試料（No.①～⑫および番号なし）、合計25試料である。試料の詳細は結果と合わせて示す。

2. 分析方法

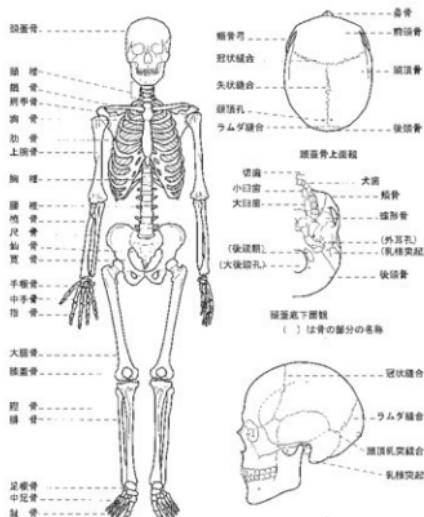
試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串等で除去する。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。歯牙の計測は、藤田（1949）に従う。なお、年齢の記載は、幼児が1～5歳程度、小児が6～15歳程度、成人が16歳程度以上、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、熟年が40～59歳程度、老年が60歳以上を表す。

3. 結果

同定結果を表3に示す。いずれもヒトであった。以下、遺構ごとに同定結果を記す。人体骨格各部の名称を図9に示す。

（1）SK1

・No.①・②(SK1)



第9図 人体骨格各部の名称

表3 出土骨の同定結果

2 試料とも大腿骨ないし脛骨の破片と思われる。

- No. ③・④(SK 1)
大腿骨の破片である。No. ③と No. ④は、接合関係にある。
 - No. ⑤(SK 1)
腓骨の破片である。
 - No. ⑥(SK 1)
橈骨の可能性がある破片である。
 - No. ⑦(SK 1)
尺骨の破片である。
 - No. ⑧(SK 1)
右側頭骨の破片、頬頭蓋の破片、部位不明破片である。
 - No. ⑨(SK 1 内 クリーン G)
側頭骨雑体部の可能性がある破片である。
 - No. ⑩(SK 1(下) 埋土中 クリーン G)
四肢骨の破片である。
 - No. ⑪(SK 1 頭骨?)
頭蓋の破片である。
 - No. ⑫(SK 1 クリーン G)
大腿骨の破片、脛骨の可能性がある破片、部位不明破片である。この他、土器片が含まれる。
- (2) SK 5
- No. ①(SK 5 茎 1)
歯牙の破片である。
 - No. ②(SK 5 埋土 3(上層) 人骨破片(四肢骨))
部位不明破片である。
 - No. ③(SK 5 骨ワク東側の清掃中)
四肢骨の破片である。
 - No. ④(SK 5 内 クリーン G)
頬蓋の可能性がある破片である。
 - No. ⑤(SK 5 人骨取り上げ後の土 城山 G 地区)
穢である。
 - No. ⑥(SK 5 埋土)
部位不明破片である。
 - No. ⑦(SK 5 (121207C))
側頭骨雑体部、頭蓋の破片、部位不明破片である。
 - No. ⑧(SK 5 位置不明(人骨集積付近))
部位不明破片である。
 - No. ⑨(SK 5 土器 No. 2 南壁際 茎)
— 129 —

左下顎第1大臼歯、左下顎第2大臼歯、右下顎第2大臼歯、大臼歯および歯牙の破片である。左下顎第2大臼歯は、歯冠幅10.80mm、歯冠厚10.28mmを測る。また、右下顎第2大臼歯は、歯冠幅11.10mm、歯冠厚10.28mmを測る。

・No. ⑩(SK 5 (121207B))

右上顎第1大臼歯、右上顎第2大臼歯、および歯牙の破片である。右上顎第1大臼歯は、歯冠幅10.49mm、歯冠厚11.18mmを測る。また、右上顎第2大臼歯は、歯冠幅9.68mm、歯冠厚10.45mmを測る。

・No. ⑪(SK 5 人骨 (出土位置不明) 人骨)

頭蓋の破片、部位不明破片である。

・No. ⑫(SK 5 (121211A) 人骨)

頭蓋の破片、部位不明破片である。

・番号なし (SK 5 内埋土 クリーン G)

部位不明破片である。

4. 考察

今回、検出された人骨は、保存状態が悪く、形質を完全に保つ骨片が認められない。SK 1から出土した人骨は、大腿骨 (No. ③・④・⑪) が華奢である。右側頭骨 (No. ⑧) をみると乳様突起の発達が弱く、錐体部が小さい。これらの状況より、SK 1 出土人骨は女性の可能性がある。年齢は不明である。

一方、SK 5 から出土した人骨は、側頭骨錐体部が小さい。また歯牙計測値は、権田 (1959)と比較すると女性的である。したがって、本人骨も女性の可能性がある。年齢は、咬耗状況から成年～壮年前半の可能性がある。

引用文献

藤田 恒太郎, 1949, 歯の計測基準について, 人類学雑誌, 61, 27-32.

権田 和良, 1959, 歯の大きさの性差について, 人類学雑誌, 67, 151-163.

第4節　まとめ

城山遺跡で、検出した遺構は、貯蔵穴と考えられる土壙4基と落し穴と考えられる土壙1基である。貯蔵穴のうち2基からは人骨が出土している。

土壙1内の人骨の出土状況を見ると、骨を並べているような状況が確認できるため、土壙内への遺体の遺棄といったことは考えにくく、貯蔵穴としての機能を失った後にその土壙を利用して人為的に埋葬されたものと考えられる。また、推測の域をでないがこのような出土状況から再葬（遺体を骨化し再度埋葬すること）が行われた可能性も否定できない。ただ、從来から知られている弥生時代の再葬墓とは、分布域、時期、さらに蔵骨器としての土器の使用といった埋葬方法などが大きく異なり、同一の範疇で考えることはできない。

今回の調査で分かったことは、①他の目的で使用された土壙を再利用して墓塚をしていること。②人骨は女性のものである可能性が高いこと。③土壙からは、1個体のみの人骨が出土していること。④蔵骨器が出土していないこと。⑤副葬品が出土していないこと。⑥埋葬施設としての痕跡（例えば墓標的なもの）は確認されていないこと。などがあげられる。

また、人骨が出土した土壙は2基であるが、城山遺跡内には同様の土壙が2基あり人骨は今回の調査では確認されていないがこれらの土壙も埋葬が行われていた可能性がある。

これらのことから、城山遺跡周辺に、このような貯蔵穴を用いた埋葬を行う集団が存在した可能性が考えられるが、本遺跡内を含め、周辺には、今のところ集落は確認されていない。

今回の調査で確認できた貯蔵穴を利用した埋葬例については、同様の調査例が確認できないため、このような埋葬方法が、どのような影響を受け成立したのか、墓域の構造や立地、例えば城山遺跡では確認できなかった墓を造営した集団の集落遺跡とのあり方、そしてそもそもこの埋葬方法が一般的なものであったのか否か等について、比較検討をすることができなかった。今後の調査例の集積を期待したい。

土壙4の落し穴と考えられる土壙については、調査区や試掘の範囲内に同様の土壙は検出されず、丘陵頂部付近の尾根上に単独で存するのみであった。けもの道上に掘られた落し穴の一つであろう。

これらのことから、城山遺跡は、弥生時代後期に集落跡は見つかっていないものの、貯蔵穴が掘られ、何らかの人の活動が行われており、集落の一部として機能していたであろう。その後この貯蔵穴は役割を失った後に埋葬施設として利用されその後廃絶したものと考えられる。（平井）

参考文献

- 石川日出志『再葬墓』『弥生文化の研究8』雄山閣 1987
土生田純之『墓の考古学』吉川弘文館 2013
設楽博己『弥生再葬墓と社会』瑞書房 2008

写 真 図 版

辰尾池東南遺跡確認調査 図版 1

1 調査位置遠景
(南から)



2 T-1 (北西から)



3 T-2 (北東から)



図版2 辰尾池東南遺跡確認調査



1 T-3 (南から)



2 T-4 (北から)



3 T-5 (南から)

辰尾池東南遺跡確認調査・試掘調査 図版3

1 T-6 (北から)



2 T-7 (北西から)



3 調査前状況 (南から)



図版4 試掘調査



1 T-1 (南から)



2 T-2 (西から)



3 T-3 (北から)

試掘調査 図版 5



1 T-4 (北東から)



2 遺物出土状況(T-2)
(北西から)



3 遺物出土状況(T-4)
(西から)

図版6 辰尾池東南遺跡確認調査・試掘調査



1 調査状況（T-4）
(北東から)



1



7



2



8



3



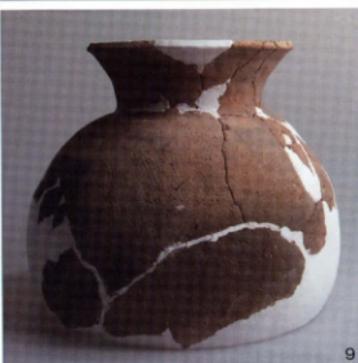
4



5



6



9

2 辰尾池東南遺跡確認調査出土遺物

試掘・確認調査(平成 21 年度) 図版 7



1 A 地区試掘調査前



2 A 地区遺構検出状況
(東から)



3 B 地区試掘調査前

図版8 試掘・確認調査(平成21年度)



1 B地区試掘調後
(南から)



2 C地区試掘調後
(北から)



3 D地区試掘調前

試掘・確認調査(平成 21 年度) 図版9



1 D 地区重機掘削中



2 E 地区試掘調査前



3 E 地区試掘トレンチ
(西から)

図版 10 試掘・確認調査(平成 23・24 年度)



1 F 地区調査前現況
(北西から)



2 G 地区調査前現況
(西から)



3 作業状況 (G 地区)

試掘・確認調査(平成 23・24 年度) 図版 11

1 F 地区及び G 地区
調査状況遠景
(北西から)
遠方は畔田遺跡



2 F 地区トレンチ
(上空から)(左上が北)



3 G 地区 平成 23 年度
調査トレンチ
(上空から)
(下方が北、ブルーシー
ト位置は遺構確認位置)



図版 12 畑田遺跡



1 畑田遺跡遠景（北から）



2 畑田遺跡全景（左が北）

畔田遺跡 図版 13



1 土壌 1 (北から)



2 土壌 14 (東から)



3 土壌 18 (北から)

図版 14 畑田遺跡



1 土壙 19 (東から)

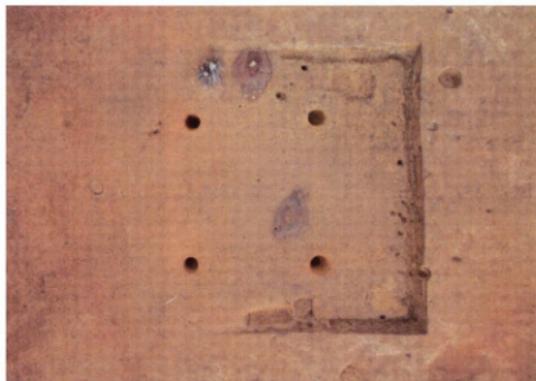


2 墓 1 (北から)



3 建物 1 (上が北)

1 住居 1 (上が北)



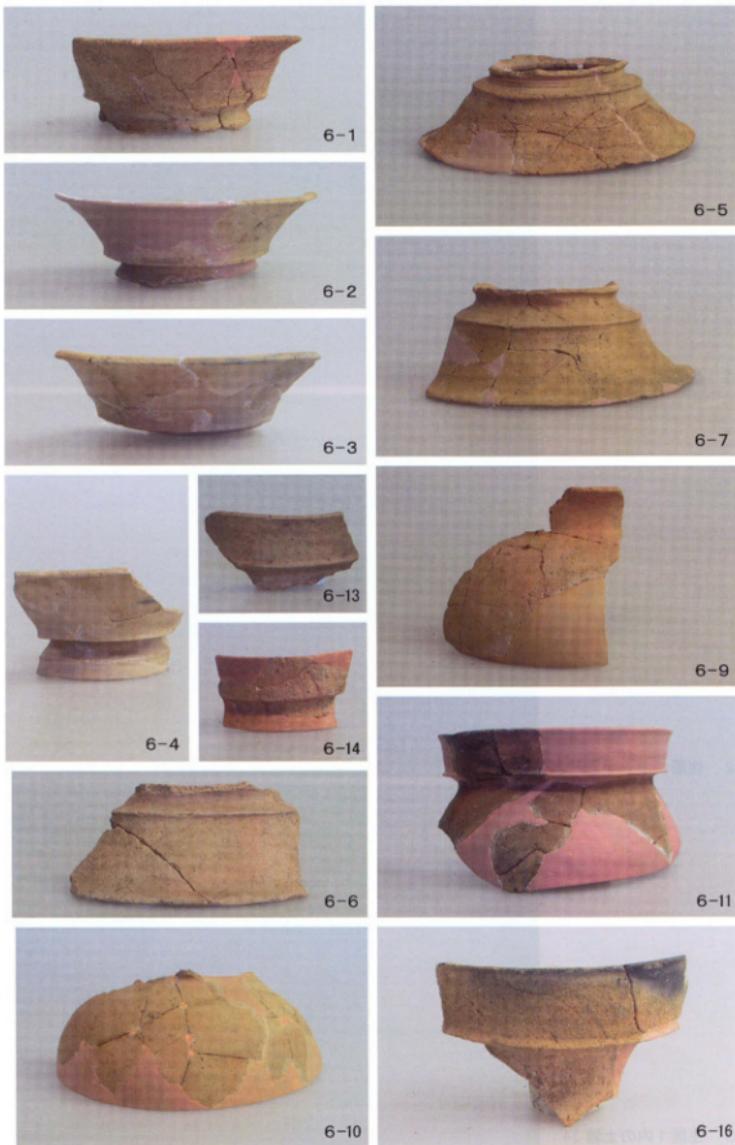
2 住居 1 (北から)



3 住居 1 内の土器 34
出土状況



図版 16 畑田遺跡



畠田遺跡出土遺物 1

畔田遺跡 図版 17



畔田遺跡出土遺物 2

図版 18 追坊師 A 遺跡



1 追坊師 A 遺跡遠景（東から 写真左側 右側は畔田遺跡）



2 追坊師 A 遺跡全景（右が北）

追坊師A遺跡 図版 19

1 溝1（東から）



2 溝2（東から）



3 溝2断面



図版 20 黒岩遺跡



1 黒岩遺跡発掘調査前（西から）



2 黒岩遺跡発掘後全景（左上が北）



1 遺構全景

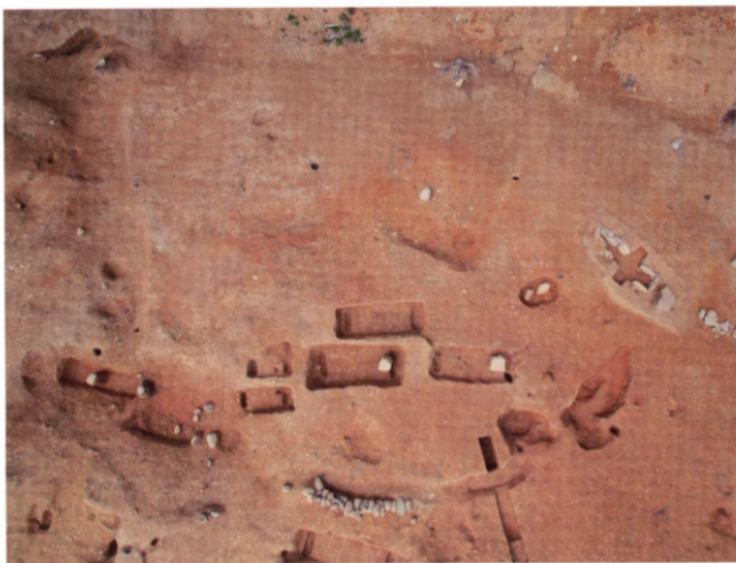


2 A群土壙墓 1～5（左上が北）

図版 22 黒岩遺跡



1 B群土壙墓（左上が北）



2 C群土壙墓（左上が北）



1 箱式石棺 1 (上が北)

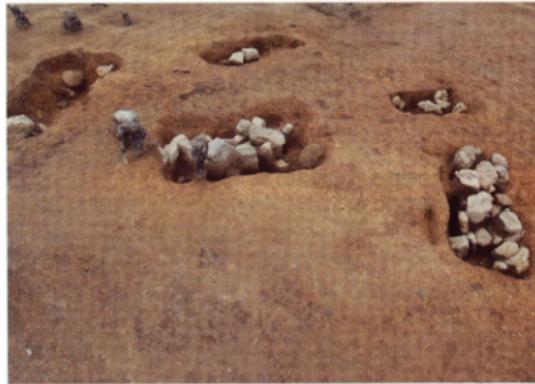


2 古墳時代の土壙墓 (下) (上が北)

図版 24 黒岩遺跡



1 上層遺構(南西から)



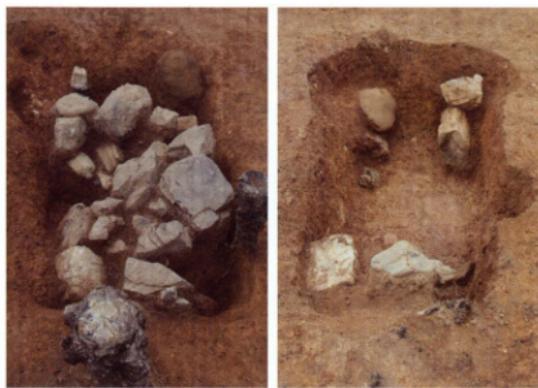
2 土壇墓 1~5
(西から)



3 溝 3、土壇墓 6~9
(東から)

黒岩遺跡 図版 25

1 左：土壤墓1
(南西から)
右：土壤墓2
(北から)



2 土壤墓4 (南から)



3 左：土壤墓3
(東から)
右：土壤墓5
(北から)



図版 26 黒岩遺跡



1 土壌墓 10、16、17
(東から)



2 土壌墓 11~13、22
(南から)



3 土壌墓 14~17
(西から)



1 土器棺墓 1 検出状況
(北から)



2 土器棺墓 1 完掘状況
(東から)



3 土壙墓 18、19、21
(東から)

図版 28 黒岩遺跡



1 土壙墓 25、33、35、
36（西から）



2 土壙墓 26～29、31、
32、38、39、45、46
(西から)



3 土壙墓 38、39、41、
45（東から）

黒岩遺跡 図版 29



1 土壙墓 55~57
(東から)



2 土壙墓 49、50、52、
53 (西から)



3 溝 5、土壙墓 51、54
(南東から)

図版 30 黒岩遺跡



1 C群土壙墓(西から)



2 溝2、土壙墓 62~64
(東から)



3 溝1 (西から)

黒岩遺跡 図版 31

1 溝1北側アゼ土層
断面（北から）



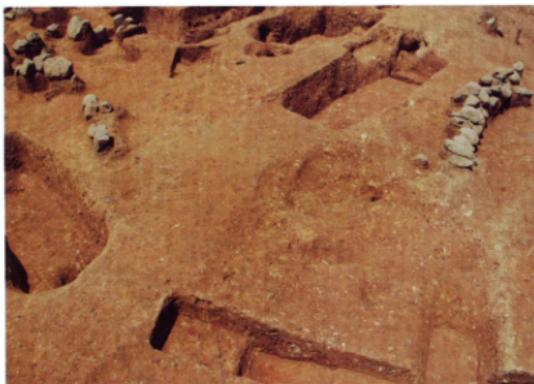
2 溝1南北アゼ土層
断面（東から）



3 溝2列右（北から）



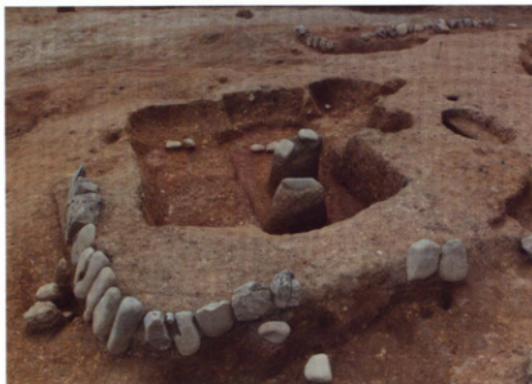
図版 32 黒岩遺跡



1 方形台状墓 1
東隅部拡大(東から)



2 方形台状墓 2
(南東から)



3 方形台状墓 2
(北から)

黒岩遺跡 図版 33



1 方形台状墓 3
(南から)



2 方形台状墓 4
(南東から)



3 方形台状墓 4
(北東から)

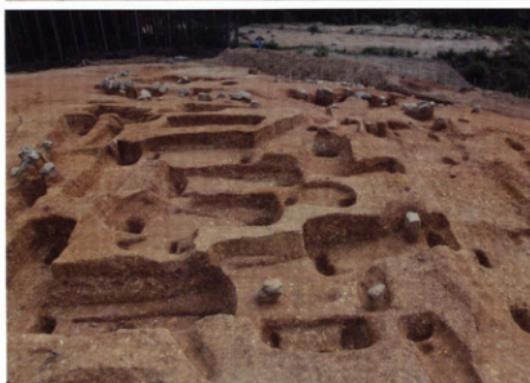
图版 34 黑岩遺跡



1 溝7（西から）



2 土壌墓 58、59、66
(北から)



3 方形台状墓1内土壌
墓群（北から）

1 方形台状墓 1 内土壤
墓群（南から）



2 方形台状墓 1 内土壤
墓群（東から）



3 発掘作業風景



図版 36 黒岩遺跡



1 中学生職場体験



2 現地説明会



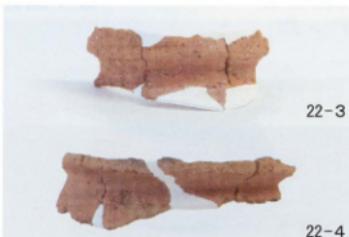
21-1 (溝2)



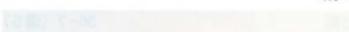
22-1 (溝3)



22-2 (溝3)



22-3



22-4
溝3



22-5



22-6
溝3



22-7 (溝3)

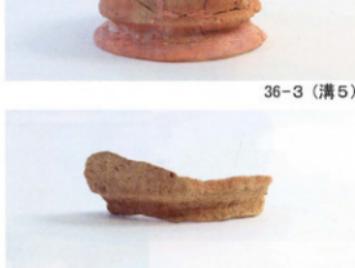
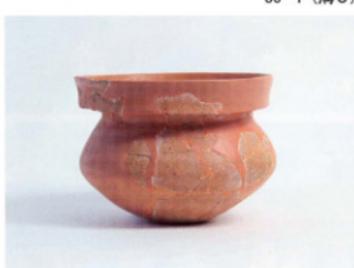


溝3



22-12 (溝3)

图版 38 黑岩遺跡



36-17 (溝5)

黑岩遺跡出土遺物 2



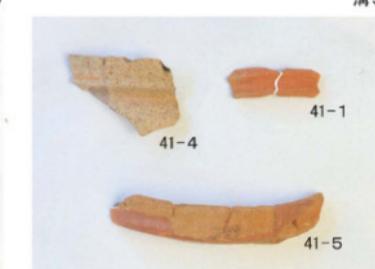
36-18 (溝5)

36-19 (溝5)



36-20 (溝5)

溝5



溝6

溝6

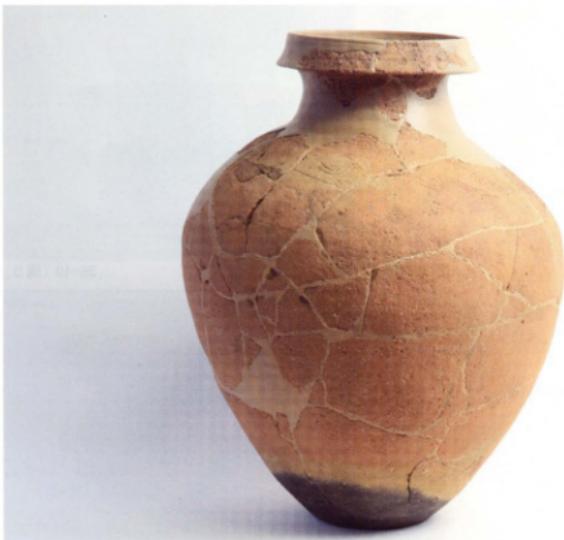


土壤墓 73・74



左：土壤墓 73・74 右：土壤墓 72

図版 40 黒岩遺跡



17-1 (土器棺墓1)



土器棺墓1文様部拡大



45-1 (A区)



45-2



45-12

A区



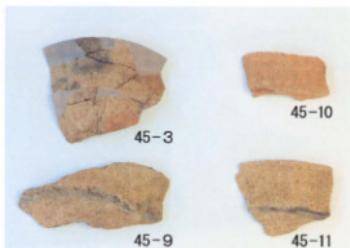
45-4 (A区)

黒岩遺跡出土遺物 4

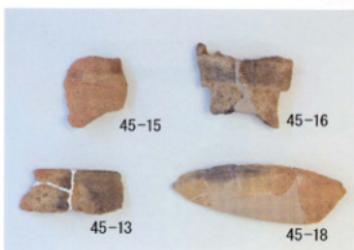
黒岩遺跡 図版 41



A区



A区



A区



B区

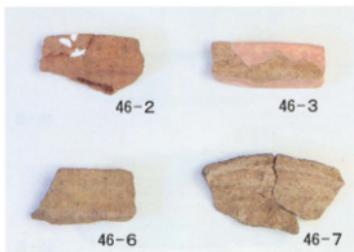


黒岩遺跡出土遺物 5

図版 42 黒岩遺跡



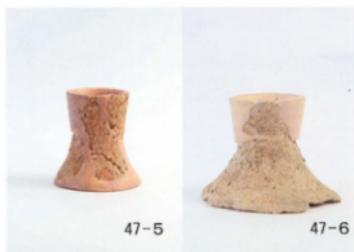
46-10 (B区)



B区



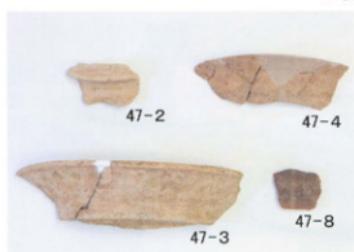
47-1 (C区)



D区



47-7 (D区)



C区 (47-3) · D区

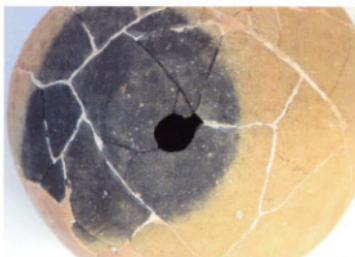


47-12 (C区)

黒岩遺跡出土遺物 6



47-13 (C区)



47-13 底部



48-2 (その他)



48-3 (その他)



48-4 (その他)



48-5 (その他)



48-7



49-2

上:その他 下:1997年トレンチ1



49-1 (1997年トレンチ1)

図版 44 黒岩遺跡



49-3 (トレンチ1)



49-4 (トレンチ1)



49-5



49-6
トレンチ1



50-1

50-2

トレンチ2



50-4 (トレンチ2)



50-5 (トレンチ2)



51-1 (トレンチ4)



51-4 (トレンチ4)

黒岩遺跡出土遺物 8

黒岩遺跡 図版 45



黒岩遺跡出土遺物 9

図版 46 黒岩遺跡



1 土器棺墓 1
(古墳時代)
検出状況 (北西から)



2 土器棺墓 1
(古墳時代)
刀子出土状況
(北東から)



3 須恵器 2 検出状況
(南から)



1 箱式石棺 1
(古墳時代)
蓋石取り外し後
(西から)

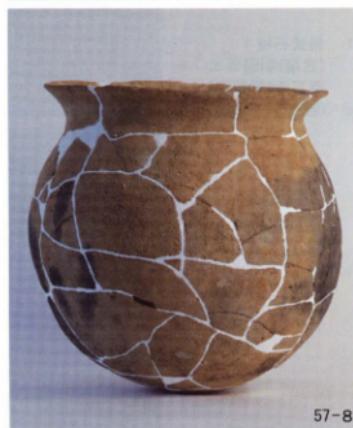


2 箱式石棺 1
(古墳時代)
完堀状況(南東から)



3 須恵器 1 検出状況
(南東から)

図版 48 黒岩遺跡



黒岩遺跡出土遺物 10

黒岩遺跡 図版 49



黒岩遺跡出土遺物 11

図版 50 追坊師臼遺跡



1 追坊師臼遺跡遠景（南から）



1 追坊師臼遺跡全景（右が北）

城山遺跡 図版 51



1 城山遺跡遠景（西から）（右側半分は平成 24 年度試掘調査のトレンチ）



2 城山遺跡全景（上が北）

図版 52 城山遺跡



1 土壙 1 (西から)



2 土壙 1 人骨出土状況
(南西から)



3 土壙 1 人骨出土状況



1 土壌 2 (北から)



2 土壌 3 (北から)



3 土壌 4 (北西から)

図版 54 城山遺跡



1 土壙5（北東から）



2 土壙5人骨出土状況



3 土壙配置（右から土壙5・1・2・3）



1 畔田遺跡出土金属製品



2 城山遺跡出土遺物

図版 56 城山遺跡



- 1. ヒト右側頭骨(SK1;No. ⑧)
- 3. ヒト橈骨?(SK1;No. ⑥)
- 5. ヒト大腿骨(SK1;No. ③)
- 7. ヒト大腿骨(SK1;No. ⑪)
- 9. ヒト腓骨(SK1;No. ⑤)
- 11. ヒト大腿骨/脛骨(SK1;No. ②)
- 13. ヒト頭蓋(SK5;No. ⑦)
- 15. ヒト頭蓋(SK5;No. ⑪)
- 17. ヒト頭蓋?(SK5;No. ④)
- 19. ヒト右上顎第2大臼歯(SK5;No. ⑩)
- 21. ヒト左下顎第2大臼歯(SK5;No. ⑨)
- 23. ヒト大臼歯(SK5;No. ⑨)
- 25. ヒト四肢骨(SK5;No. ③)
- 2. ヒト側頭骨?(SK1;No. ⑨)
- 4. ヒト尺骨(SK1;No. ⑦)
- 6. ヒト大腿骨(SK1;No. ④)
- 8. ヒト脛骨?(SK1;No. ⑪)
- 10. ヒト大腿骨/脛骨(SK1;No. ①)
- 12. ヒト側頭骨(SK5;No. ⑦)
- 14. ヒト頭蓋(SK5;No. ⑦)
- 16. ヒト頭蓋(SK5;No. ⑪)
- 18. ヒト右上顎第1大臼歯(SK5;No. ⑩)
- 20. ヒト左下顎第1大臼歯(SK5;No. ⑦)
- 22. ヒト右下顎第2大臼歯(SK5;No. ⑨)
- 24. ヒト四肢骨(SK5;No. ③)

城山遺跡出土骨

報告書抄録

ふりがな	はんだいせき おいぼしえーいせき くろいわいせき おいぼしげーいせき ジョウヤゴイセキ						
書名	畔田遺跡 遠坊師A遺跡 黒岩遺跡 遠坊師B遺跡 城山遺跡						
副題名	津山古城クリンシャンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査						
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第84集						
編著者名	小野利恵 仁木康治 豊島雪裕 平井泰明 宮崎洋子 株式会社パリノ・サーヴェイ						
編集機関	津山市教育委員会						
所在地	〒708-0824 岡山県津山市沼600 1 電話 0868-24-8413 FAX 0868-24 8414						
発行年月日	2015年3月19日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	町村	道統番号			㎡	
はんだいせき	おかやまけんつやましりょうけ	33203	35° 4' 2" 133° 54' 46"	~	20110926	3,500	記録保存調査
畔田遺跡	岡山県津山市郷家				20120313		
おいぼしーいせき	おかやまけんつやましりょうけ	33203	35° 3' 59" 133° 54' 46"	~	20111018	999	記録保存調査
遠坊師A遺跡	岡山県津山市郷家				20120313		
くろいわいせき	おかやまけんつやましりょうけ	33203	35° 4' 55" 133° 54' 50"	~	20120420	4,600	記録保存調査
黒岩遺跡	岡山県津山市郷家				20120803		
おいぼしげーいせき	おかやまけんつやましりょうけ	33203	35° 5' 55" 133° 54' 48"	~	20111130	600	記録保存調査
遠坊師B遺跡	岡山県津山市郷家				20120416		
こうやまいせき	おかやまけんつやましりょうけ	33203	35° 4' 3" 133° 54' 30"	~	20120616	950	記録保存調査
城山遺跡	岡山県津山市郷家				20121115		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
畔田遺跡	集落	弥生時代	土壙6	弥生土器			
		古墳時代～古代	住居1、環立柱建物1	須恵器、土師器			
遠坊師A遺跡	集落	近世以降	墓1	金銀製品、人骨			
		弥生時代～古代	環2、土壙2	弥生土器、須恵器			
黒岩遺跡	墳墓	弥生時代	方形台状墓4、土壙墓79	弥生時代後期の方形台状墓4とそれに伴う土壙墓49、その他の場所に土壙墓30などを検出			
		古墳時代	土壙棺墓1	弥生土器			
遠坊師B遺跡	集落	古墳時代～近世	環5、土壙1	須恵器、勝南田焼、磁器			
		弥生時代	土壙1	：			
城山遺跡	集落	土壙1	：	弥生時代の土壙より、埋葬されたと思われる人骨が出土			
		土壙1	：	：			
畔田遺跡では、弥生時代後期の土壙や、古墳時代後期～中世頃の住居跡1、古代に属するものと考えられる環立柱建物1を検出したが、いずれの時代の施設も確認されていない。							
遠坊師A遺跡については、弥生時代から古代にかけての構造を検出しているが詳細は不明。							
黒岩遺跡では、弥生時代後期を中心として、弥生時代中期から古墳時代中期にかけての集団墓地であることが分かり、特に古墳時代の方形台状墓45及びそれに伴う土壙を9、台状墓周辺の場所で土壙を30検出している。							
また、古墳時代の施設として、土器和籠、施式石棺1を検出している。							
遠坊師B遺跡については、古墳から近世にかけての構造を検出したが詳細は不明。							
城山遺跡では、土壙を4検出し、そのうちの2つの土壙からは、埋葬されたものと考えられる人骨が出土した。試掘調査及び水割査では、周辺に集落は確認されていない。							

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 84 集

畔 田 遺 跡

追坊師A遺跡

黒 岩 遺 跡

追坊師B遺跡

城 山 遺 跡

津山団地クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成 27(2015)年 3 月 19 日 印刷

平成 27(2015)年 3 月 19 日 発行

編集・発行 津山市教育委員会

岡山県津山市山北 520

印刷 株式会社 津山朝日新聞社

岡山県津山市田町 13

